

379

12

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10<sup>19</sup>m 1 2 3 4 5

始



工-40152

379-12



國譯禪宗叢書

第七

卷



國譯禪宗叢書第七卷凡例

一、本叢書第七卷には碧巖集(十卷)を収む、碧巖集は雪竇禪師の頌古百則に基きて、圓悟禪師の著述せられしものなり。此の書、唐本には蜀、福、張の三本ありて、本文の異同少からず。且つ表題に或は碧巖集、或は碧巖錄等の差異あり。今次國譯に際しては主として張本に據り、且つ卷末の原文も亦之に従ふ。

一、碧巖集の我邦に舶載せられたる年月詳ならざるも、足利初期以來、慶長以前に既に數版の刻本ありて、其の多くは元槩本の覆刻本なり。間々我國刻工の書字によりて刻せられたるものあれど、概して足利時代の刻版は、元明の覆刻本其の多數を占めたり。徳川時代に入りての刻本は、悉く邦人の書字に基きて鏤刻せしもののみにて、元祿以後に至りては、冠註本尤も廣く

流布せり。  
一、碧巖集には、古來より註解の書、十餘種を下らず、就中、最も廣く流布せられたるは、岐陽和尚の碧巖不二鈔、大智禪師の種電鈔なり、以て本書の我邦禪宗に如何に流傳せしかを窺ふに足るべし。

大正九年六月

編者記す

# 國譯禪宗叢書 第七卷

## 目次

國譯佛果圓悟禪師碧巖集解題	.....	一
國譯佛果圓悟禪師碧巖錄	.....	一—四七一
佛果圓悟禪師碧巖錄原文	.....	一—二六四

國譯碧巖集

解題

碧巖集の原著者は雪竇重顯禪師にして、禪師曾て百則の公案を擇び、叢林學道の詮要を頌出せり。「雪竇頌古」是れなり。たゞ夫れ銀山鐵壁、衲僧鐵研に由なく、恰も蚊子の鐵牛を咬むに似たり。雪竇の滅後六十餘年を経て、圓悟禪師、宋の徽宗皇帝の政和年間、澧州夾山の靈泉院に住せし日、この百則の頌古に就き、垂示、著語、評唱を加へて奥旨を發揮せらる、後に高宗の建炎年中、門人等之を輯録して碧巖集と題せり。靈泉院方丈の匾額に碧巖と題せしに因みてなり。然るに禪師の寂後、門人等徒らに書中の言句を記誦して辯論の資材となす者多かりしかば、圓悟の法嗣大慧宗杲禪師痛く之を慨き、刻版を一炬に付して其の流傳を防ぎたり。其の後二百餘年を経て元の成宗皇帝の大徳年間に、岫中の居士張明遠なる者、諸刹の藏本を集め、彼此參照して重刊せしより、本書再び世に出現するに至れり。爾來、宗門第一書と稱して天下の衲僧之を珍重し、熾んに流布して今日に及べり。

雪竇重顯禪師の傳記は、本叢書第六卷祖英集の解題中に、圓悟克勤禪師の傳記は本叢書第四卷圓悟心要の解題中に再掲げたれば今爰に録せず。

國譯碧巖集の序

至<sup>①</sup> 聖の命脈、<sup>②</sup> 列祖の大機、<sup>③</sup> 換骨の靈方、<sup>④</sup> 願神の妙術、其れ惟みれば  
雪竇禪師、超宗越格の正眼を具して、正令を提掇す、風規を露さず、烹佛煨祖の鉗鎚を乗つて、衲僧向上の巴鼻を頷出す、銀山鐵壁、孰か敢て鑽研せん。蚊、鐵牛を咬む、口を下すことを爲し難し、大匠に逢はずんば、焉んぞ玄微を悉かにせん、粵に佛果老人有り、碧巖に住する日、學者迷ふて請益す、老人愍んで慈を垂れ、淵源を剔抉し、底理を剖析す、<sup>⑤</sup> 當陽の直指、<sup>⑥</sup> 豈に見知を立せんや。百則の公案、<sup>⑦</sup> 頭より一串に穿來し、一隊の老漢、次第に總べ將つて

國譯碧巖集の序

① 靈泉方丈の額を碧巖と曰ふ、開山善會禪師に僧問ふ、「如何なるか、是れ夾山の境、」師曰く、「猿子を抱いて青嶂の後に歸り、鳥花を啣んで碧巖の前に落つ。」又或は曰く、「澧洲の中に夾山あり、夾山の中に碧巖あり、碧巖の中に靈泉禪院あり、開悟禪師曾て此に住す、後代に至り、參徒、師の評唱を編集し卷を成す、之を名けて碧巖集と云ふ。」  
② 明教云く、「聖とは道なり、通なり、佛は大道を極め大道を得、一切種智を具して、一切聖人に冠たり、故に之を聖と云ふ。」  
③ 摠じては西天四七、東土二三、乃至五家七宗の諸師を謂ふ。  
④ 古詩に、「潭には千年に蛟骨の龍を養ふ、」言ふこゝろは、蛇、龍と成る時、必ず其の骨を換ふるなり。  
⑤ 願は養なり。  
⑥ 別は説文に解骨なり、抉は廣韻に抉出なり。  
⑦ 洞は開なり、分なり、析は開なり、破なり。  
⑧ 當陽は、當面の義、分明の義なり。  
⑨ 公案は、官司因罪を勘問して款に據り案に結して曲直正に、公驗分明なるを謂ふ。  
⑩ 按過は鞠勸して罪を問ふなり。  
⑪ 史記に趙國に卞和氏が璧あり

① 按過す、須らく知るべし。趙壁本瑕類無し、相如諷に秦王を誑す、至道實に言無し、宗師慈を垂れ弊を救ふ、儻し是の如く見ば、方に徹底老婆なることを知らん、其れ或は句に泥み言に沈まば、未だ佛種族を滅することを免れず、② 普照幸に、師の席に親しみ、未聞を聞くことを得たり、道友集めて簡編を成す、鄙拙其の本末を敘す、時 建炎戊申暮春晦日、參學嗣祖比丘普照謹んで序す。

秦十五城を以て之に易へんと欲す、趙、相如を遣し壁を逃む、秦の昭王壁を得て城を制す、相如詐りて壁に瑕有り取りて之を指さん云々、柱に倚つて還へさずして云く、城を割く、齋戒を請ふ、吾れ方に

壁を受く、王若し臣に急あらば、臣則ち頭懸俱に碎けん、王壁を碎くを懼る、敢て害を加へず、壁竟に趙に歸る。③ 宗派の圖を按するに、蓋し眉州中岩の照なり。④ 建炎は宋の高宗の年號。

① 四十二章經、中國に入つてより、始めて佛

有るを知る、② 達磨六祖の傳衣に到つてより、言句有り、③ 本來無一物と曰ふを南宗と爲し、時時に勤めて拂拭せよと曰ふを北宗と爲す、是に於て、禪宗の頌古有りて、世に行はる、其の徒讎案の法有り、佛を呵し祖を罵る、爲さずと云ふ所無し、間ま深く吾が詩家の活法を得る者有り、然れども所謂第一義、焉んぞ言句を用ひん、雪竇圓悟、老婆心切なり、大慧已に一炬に之を丙く矣、④ 嶠中の張煒明遠、死灰を然して復た板行す、亦所謂老婆心切なる者か、⑤ 大德四年庚子四月初八日癸丑、紫陽山の方回萬里序す。

① 東漢の永平七年、顯宗孝明帝の時、佛教始めて渡來、此の時、騰蘭漢言を習ひ、四十二章經、其の他の四經を譯す。

② 會元第一に、東土の初祖菩提達磨大師、心要を發明す、祖乃ち尊者に告げて曰く、我れ既に法を得たり云々。

③ 五祖弘忍大師の章に、唐の成亨中に一居士あり、姓は盧、名は慧能云々、盧行者は六祖なり、嶺南に居す、故に南宗と號す、祖偈あり、曰く、菩提本樹無し、明鏡亦臺に非らず、本來無一物、何の處にか

塵埃を惹かん。④ 傳燈錄曰く、北宗の神秀禪師は、開封尉氏人なり、姓は李氏云々、門人普寂、義福等、並に嶺野の爲に重んぜらる、世に北宗と稱す、師の偈に曰く、身は是れ菩提樹、心は明鏡臺の如し、時々勤めて拂拭せよ、塵埃を惹かしむる莫れ。⑤ 嶠中は地名なり、張は姓、煒は名、字は明遠、蜀の人なり。⑥ 大德は元の成宗の年號。

⑦ 勝覽云く、紫陽山は湖南路に在り、方は姓、回は諱、萬里は字なり。

碧巖集は圓悟大師の所述なり、其の大弟子大慧禪師、乃ち其の書を焚棄す、世間種種の法は皆執著を忌む、釋子の歸敬する所は佛に如くは莫けれども、猶ほ時有つて之を罵る、蓋し我れ有つて彼れ無く、我れに由つて彼れに由らざればなり、己を捨て物に徇へば、必ず己を失するに至る、夫れ心、道と一に、道、萬物と一にして、太虚に充滿す、何くに適くとしてか道に非ざらん、第だ常の人之を觀るに、能く其の見る所を見て、其の見ざる所を見ず、之を人に求むれば人之を語るに、東坡が日喻の説の如し、往復推測すれば愈遠く愈失す、吾が夫子道を體してより、猶ほ言無からんと欲す、而も佛氏は出世間の法爲り、文字言語にして之を求む可けんや、然りと雖も、亦廢つ可からざる者有り、智者は少く、愚者は多し、已學の者は少く、未學の者は多し、大藏經五千餘卷、盡く未來世の爲に設く、苟し以て言を忘す可くんば、釋迦老子便ち當に口を閉づべし、何んぞ是の如く、叨々たるに至らん。天下の理固に尋常の中を離れずして、而も尋常の表に超出することあり、知り易きが若くなりと雖も、而も實に知り易からざる者なり。之を人に求めざる時は、則ち身を終るまで得可か

① 雲門打殺して狗子に與へて喫せしめん、又一如何なるか是れ佛の乾屎橛と答ふ、此の如きの説、見地明白にして佛と肩を齊しうする向上の語、之を罵るにあらず、俗見に罵すると作す。

② 東坡日喻の説に云く、生れながらにして眇なる者、日の形を識らずして之を目ある者に問ふ、或る人之れに告げて曰く、日の狀ち銅盤の如しと、盤を扣いて其の聲を得て、佗日鐘の聲を聞いて以て日と爲す云々。

③ 夫子は孔子を謂ふ。  
④ 論語陽貨に、子曰く、予れ言無からんと欲す、予賈曰く、子如し言はずんば則ち小子何をか述べん、子曰く、天何をか言ふや、四時行はれ、百物成る云々。

らず。古世に名あるの人は、千人の英に非ざれば、則ち萬人の傑なり、太阿の劍は天下の利劍なり、山に登るときは則ち虎豹を戮り、水に入るときは則ち蛟龍を刺る、人之之を知ること、是に盡くるのみ、古の人善く之を用ふる者有り、城に乗じて戦ひ、風に順つて之を揮れば、三軍之が爲に大に敗れて、流血千里に赭す、是れ豈に一己の所能を以て、盡く之を疑ふ可けん哉、吾れ是の書有ることを聞いてより、之を求むる甚だ至れり、嶠中の張氏始めて木に刻して、來つて予に謀る、遂に賛して之を成せしむ、且つ爲に其の首に題す、大德九年歲乙巳三月吉日、玉岑の休居士聊城の周馳、錢唐觀橋の寓舎に書す。

⑤ 明々は蓋なり。  
⑥ 越絶書に曰く、楚王風胡子をして吳に之いて、歐冶子將に見えしめ、之れをして鍛劍を爲らしむ、一を龍泉と曰ひ、二を太阿と曰ひ、三を上市と曰ふ、劍成りて晋鄭之れを聞き之れを求むれども得ず、晋の師、楚の城を圍んで三年まで解けず、是に於て太阿の劍を引き城に登りて之れを磨く、三軍破敗し、士卒迷惑して、血を流すこと千里、晋鄭の頭舉く白し云々。



或人問ふ、「碧巖集の成毀孰れか是なる乎。」曰く、「皆是なり。」<sup>①</sup> 鯨鱈東に來つて、心印を單傳して、文字を立せざることは固なり、而れども血脈歸空の諸論、果して誰か之を爲る哉、<sup>②</sup> 古文字に在らず、文字を離れずと謂ふ者は、眞に言を知れり、已に人々をして、<sup>③</sup> 簾を卷き板を聞き、<sup>④</sup> 指を堅て脚に觸るるの際に於て大事を了卻せしむ、文字何ぞ有せん哉、拈花微笑より以來、<sup>⑤</sup> 門竿倒卻の後、才かに言句に渉る、文字に非ずんば、以て傳ふること無けん、是れ又廢つ可らざる者なり。嘗て祖教の書を謂つて、之を公案と謂ふものは、唐に倡へて宋に盛なり、其の來る尙し矣、二字は乃ち世間法の中吏牘の語、其の用三有り、面壁功成り行脚事了るとも、定盤の星は明め難く、野狐の趣は墮

- ① 鯨鱈は、齒虫むなり、今は達磨を言ふ、乃ち缺の意で、血脈歸空は、二論の名、初祖の所述なり。
- ② 會元に、達磨天然に返らんと欲す門人に命じて曰く、時將に至らんす、汝等蓋んぞ各々所得を言はざるや。時に道副有り、對へて曰く、我が所見の如きんば、文字を執せず、文字を離れず、而して道用を爲す。祖曰く、汝吾が皮を得たり。
- ③ 福州長慶の棲禪師、一日簾を卷き、忽然大悟す。
- ④ 塗毒岩主、板壁を聞いて豁然大悟す。
- ⑤ 天龍一指を堅てて俱胝に示す、言下に大悟す。
- ⑥ 會元第一に、阿難、迦葉に問うて曰く、師兄世尊金闍の袈裟を傳ふる外、別に道の什塵をか傳ふ。迦葉、阿難を言す、阿難應諾す、迦葉曰く、門前の刹竿を倒却せよ。
- ⑦ 盧行者初めて嶺南より來りて五祖に見ゆ、初來と言ふは未だ是非を知らざるなり。
- ⑧ 居士龍龜馬祖に參門して云く、萬法と偈爲らざる者は是れ什麼ぞ。祖曰く、汝が一口に西江水を吸盡するを待つて、即ち汝に向つて道はん。
- ⑨ 列子に云ふ、楊子が隣人羊を亡ふ、其の黨を率ゐて之れを追ふ、楊子曰く、嘻一羊を亡ふて何んぞ追ふ者の衆きや。既に返つて曰く、岐路の中又岐路有り、吾れ之く所を知らず、返る所以なり。楊子曰く、「大道多岐を以て羊を亡ふ云々。」
- ⑩ 遺教經に曰く、汝等比丘已に能く戒に住す、當に五戒を制

し易し、具眼之が爲に勘辨す、一呵一喝して、實を見んと要するは、老吏の獄に據つて罪を識つて、底裏悉く見て、情狀遺さざるが如くなる一なり、其の次は則ち嶺南より初めて來り西江未だ吸はず、<sup>①</sup> 亡羊の岐泣き易く、指海の針必ず南す、悲心之が爲に接引す、一棒一痕して、證悟せしめんと要するは、廷尉の法を執つて平反して、人を死より出すが如くなる二なり。又其の次は則ち犯稼愛深く繫贖事重し、<sup>②</sup> 學奕の志、須らく專なるべく、染絲の色、悲み易し、大善知識之が爲に付囑す、之をして心蒲團に死して、一動一參せしむるは、官府の條令を頒ち示して、人をして律を讀んで法を知り、惡念才かに生ずれば、旋や即ち寢滅せしむる三なり、<sup>③</sup> 方冊を具へ案底を作し、<sup>④</sup> 機境を

- し、放逸して五欲に入らしむる勿れ、譬へば牧羊の人、杖を執つて之れを視て、縱に人の苗稼を犯さしめざるが如し。
- ① 孟子曰く、今夫れ奕の數たる小數なり、心を專にし志を致さずんば、則ち得ざるなり。
- ② 長慶七箇の蒲團を坐破して、此の事を明めず、一日簾を卷いて忽然大悟す。
- ③ 方は版なり、冊は編簡なり、記録を謂ふ。
- ④ 實主相見問答の時、互に機境あり。
- ⑤ 金科玉條は、二書の名なり、一朝廷の政事を記する者なり。
- ⑥ 清明對越、亦二書の名なり。
- ⑦ 徳山云く、十二分教は瘡疣を拭ふ紙なり。
- ⑧ 人の門戸に傍うて只だ作客して、口を餌し日を渡る、其の主人の招呼に任す。師は男子の稱、言ふ意は主人と作ることを得ざるなり。
- ⑨ 楚氏春秋に曰く、楚人江を涉りて、罾舟中より水に墜つ、其の舟を割んで曰く、此に於て劍を墜す、求むれば必ず之れを得ん。
- ⑩ 列子に曰く、宋に耕す者あり、兔走りて株に觸れて頭を折いて死す、因つて耕を釋いて株を守りて復た得んことを冀ふ。
- ⑪ 毛公詩傳に曰く、魯頌叔子獨居す、夜暴かに風雨至る、隣婦趨りて至る、叔子之れを納る云々、魯に男子あり、叔子が如くにして處す、婦前の如くにして至る、男子戸を閉ぢて納れず、婦人曰く、何んぞ柳下惠が若くせざるや。男子曰く、柳下惠は固に可なり、吾れは固に不可なり、吾れ若

陳<sup>①</sup>格令<sup>②</sup>を爲すは、世間の所謂、金科玉條、清明對越の諸書と、初めより何を以てか異ならん、祖佛の立てて公案と爲し、叢林に留示する所以の者、意或は此れを取る、奈何せん末法以來、妙心を瘡紙に求め、正法を口談に付することを、鬼神を點盡して、猶ほ薄を離れず、人の門戸に傍ふ、喚んで郎と作すに任す、劍去つて舟猶ほ刻み、兔逸げて株移らず、滿肚の葛藤能く問ふこと千轉すれども、其れ生死の大事に於ては、初めより干渉無し、鐘鳴り漏盡くれば將た焉んぞ之を用ひん、烏乎羚羊角を掛く未だ形迹を以て求む可らず、善く下慧を學ぶ者は、豈に歩まば亦歩み、趁らば亦趁らんや、此れを知るときは則ち二老の心皆是なり、圓悟は子を顧み孫を念ふの心多し、故に重ねて雪竇の頌を拈す、大慧は梵を救ひ溺を拯ふの心多し、故に立ちどころに碧巖集を毀る、釋氏一大藏經を説いて、末後に乃ち謂く一字を説かずと、豈に我れを欺かん哉、圓悟の心は釋氏經を説くの心なり、大慧の心は釋氏説を諱むの心なり、禹稷顔子、地を易へば皆然らん、之を推し之を輓く、車行を主る而已、爾來二百餘年、觸中の張明遠、復た梓に鏤めて以て其の傳を壽す、故に祖教春を回す乎、

八

① 不可を將つて、下惠が可な學ばん云々。  
 ② 莊子の田子方の篇に曰く、顔淵仲尼に問うて曰く、夫子歩すれば亦た歩し、夫子趨れば亦趨り、夫子馳すれば亦馳す云々。

③ 孟子離婁の章に曰く、禹稷平世に當つて、三たび其の門を過ぐれども入らず、孔子之れを賢とす、顔子亂世に當つて、陋巷に居り、一簞の食、一瓢の飲、人は其の憂に堪へず、顔子は其の樂を改めず、孔子之れを賢とす、孟子曰く、禹稷顔同道を同じうす。  
 ④ 三十年又は一代を一世と爲す數は運數なり、世運の法與廢數あるか。  
 ⑤ 首楞嚴經に一漏を認めて、全潮と爲すの義なり。  
 ⑥ 首楞嚴二に、佛阿難に告げ玉はく、汝等練心を以て法を聽

抑<sup>①</sup>世故數有る乎、然れども是の書の行關る所甚だ重し、若し水を見て海に即き、指を認めて月と作さば、特に大慧之を憂ふるのみにあらず、圓悟も又將た之が爲に粘を去り縛を解かん、昔人寫照の詩に曰く、「分明なり紙上の張公子、力を盡して高聲に喚べども響へず、此の書を觀んと欲せば、先づ此の語に參せよ、大德甲辰四月望、三教老人書す。」

① 此法亦練なり、法性を得るに非ず、人の手を以て月を指して人に示すが如し、云々。  
 ② 三教老人は如居士、名は顏丙。

國譯佛果園悟禪師碧巖錄卷第一

師、澧州夾山靈泉禪院に住して、雪竇顯和尚の頌古を評唱する語要

第一則

垂示に云く、山を隔てて、烟を見て早く是れ火なることを知り、牆を隔てて角を見て、便ち是れ牛なることを知る。舉一明三、目機鉄兩、是れ衲僧家尋常の茶飯、衆流を截斷するに至つては、東涌西沒、逆順縦横、與奪自在なり、正當恁麼の時、且く道へ、是れ什麼人の行履の處ぞ、雪竇の葛藤を看取せよ。

【本則】 擧す、梁の武帝、達磨大師に問ふ。(この不啣喙の漢を説く。)

「如何なるか是れ聖諦第一義。」(是れ甚の繫驢概ぞ。)磨云く、「廓然無聖。」(將に謂へり多少の奇特と、箭新羅を過ぐ、可敏だ明白。)帝曰く、「朕に對する者は誰ぞ。」(滿面の慚惶強ひて惺惺、果然として摸索不著。)磨云く、「不識。」(咄、再來半文錢に直らす。)帝契はず。(可惜許、卻つて

【本則】 東嶺禪師曰く、第一に宗旨の本を明す、佛教の所説空假中を基と爲し、中道を超越す、是れ即ち我が宗向上宗乘の事と爲すのみ。

些子に較れり。達磨遂に江を渡つて魏に至る。この野狐精、一場の懺悔を免れず、西より東に過ぎ、東より西に過ぐ。帝後に舉して志公に問ふ。貧兒舊債を思ふ、傍人眼有り。志公云く、「陛下還つて此の人を識るや否や。」志公に和して、國を起し出して始めて得ん、好し三十棒を與ふるに、達磨來や。帝云く、「不識。」(卻つて是れ武帝達磨の公案を承當得ず。)志公云く、「此は是れ觀音大士、佛心印を傳ふ。」(胡亂に指注す、臂膊外に向つて曲らす。)帝悔ひて、遂に使を遣はし去つて請せん。果然として把不住、向に道不啣。志公云く、「道ふこと莫れ、陛下使を發し去つて取らしめん。」(東家の入死すれば、西家の入哀を助く、也た好し一時に國を起し出すに。)闔國の人去るも、佗亦回らず。(志公也た好し、三十棒を與ふるに、知らず脚跟下大光明を放つ。)

【評唱】 達磨遙かに此土に大乘の根器有るを觀て、遂に海に泛んで得得として來り、心印を單傳して迷塗を開示す。不立文字、直指人心、見性成佛。若し恁麼に見得せば、便ち自由の分有り、一切の語言に隨つて轉せられず、脱體現成せん。便ち能く後頭に於て、武帝と對譚、并に二祖安心の處、自然に見得して、計較情塵無く、一刀に截斷して、洒洒落落たらん。何ぞ必ずしも更に是を分ち非を分ち、得を辨じ失を辨せん。然も恁麼なりと雖も、能く幾人有る。

武帝嘗て袈裟を披して、自ら放光般若經を講す、天花亂墜し、地黄金と變ずることを感得す。道を辨じ佛に奉じ、天下に詔詔して、寺を起て僧を度し、教に依つて修行す、人之を佛心天子と謂ふ。達磨初め武帝に見ゆ。帝問ふ、「朕寺を起て僧を度す、何の功德有る。」磨云く、「無功德」と。早く是れ惡水驀頭に流ぐ。若し這箇の無功德の話を透得せば、偏に許す親しく達磨に見ゆることを。且く道へ、寺を起て僧を度す、什麼と爲てか都て功德無き、此の意什麼の處にか在る。帝、婁約法師、傅大士、昭明太子と眞俗の三諦を持論す。教中の説に據れば、眞諦は以て非有を明し、俗諦は以て非無を明す、眞俗不二、即ち是れ聖諦第一義、此れは是れ敎家極妙窮玄の處、帝使ち此の極則の處を拈じて達磨に問ふ、「如何なるか是れ聖諦第一義」と。磨云く、「廓然無聖」と。天下の衲僧跳不出、達磨他の與めに一刀に截斷す。如今の人多少か錯つて會し、卻つて去つて精魂を弄し、眼睛を障して云く、「廓然無聖」と。且喜すらくは、沒交涉、五祖先師嘗て説く、只だ這の廓然無聖、若し人透得せば、歸家穩坐せん。一等に是れ葛藤を打す、妨げす他の與めに漆桶を打破することを。達磨中に就いて奇特なり、所以に道ふ、一句に參得し透れば、千句萬句一時に透ると。自然に坐得斷じ、把得定す。古

① 放光品は、如來等持三昧に入つて、光を放つて十方世界を照す、故に品題に立つ。  
 ② 六學高僧傳に、梁の婁約、字は德素、姓は婁氏、東陽烏傷の人なり。  
 ③ 婺州義烏縣の人、雙林大士は姓は傅、名は蕸、法號は善惠。  
 ④ 昭明は武帝の太子なり。  
 ⑤ 大品般若經。  
 ⑥ 沒交涉は、相干ること無きの謂なり。  
 ⑦ 楞伽云く、「人の曠劫無明、結習固うして、恰も漆を貯ふるの桶、黑洞洞地にして不明なるが如し。」愚曰く、「無分

人道く、「粉骨碎身、未だ酬ゆるに足らず、一句了然として百億を超ゆ」と。達磨劈頭に他に一撈を與ふ、多少か漏返し了れり。帝省せず、卻つて人我の見を以ての故に、再び問ふ、「朕に對する者は誰ぞ。」達磨慈悲忒然し、又向つて道ふ、「不識」と。直に得たり武帝眼、目定動して、落處を知らざることを。是れ何の言説ぞ、這裏に到つて有事無事、拈じ來るに即ち堪へず。端和尚頌有り、云く、「一箭尋常一鵬を落す、更に一箭を加へて已に相饒す。直に少室峰前に歸つて坐す、梁主言ふことを休めよ更に去つて招かん」と。復た云く、「誰か招かんと欲す。」帝契はず、遂に潛かに國を出づ、這の老漢只だ、憐憫を得たり、江を渡つて魏に至る。時に魏の孝明帝當位なり、乃ち北人の種族、姓は拓跋氏、後來方に中國と名く、達磨彼に至つて、亦出て見えず、直に少林に過つて、面壁九年、二祖を接し得たり、彼の方に號して壁觀、婆羅門と爲す。梁の武帝、後に志公に問ふ、公云く、「陛下還つて此の人を識るや否や」と、帝曰く、「不識」と。且く道へ、達磨の道ふ底と、是れ同か是れ別か、似たることは則ち也た似たり、是なることは則ち是ならず、人多く錯つて會して道ふ、「前來の達磨は、是れ他に禪を答ふ、後來の武帝は是れ他の志公に對ふ、乃ち相識の識なり」と。且得沒交涉、當時志公恁麼に問ふ、且く道へ、作麼生か祇對せん、何

四

- ① 曉。眼黒闇なるなり、無眼子を罵るの詞。
- ② 永嘉眞覺大師證道歌の語、粉骨は常啼般若を學ぶ時の如く、碎身は釋迦因中に半偈を求むる時の如し。
- ③ 眼目定動は「目がすわつたり、うごいたりしてうるつく」なり。
- ④ 楊岐の孺子白雲守端禪師。
- ⑤ 佛は商家物を添ふるの多きを謂ふ、「まける」と譯す、又罪を「ゆるす」の意なり。
- ⑥ 憐憫は慚なり。
- ⑦ 婆羅門、秦には外意と云ふ。

ぞ一棒に打殺して、① 擦糊せらるゝことを免れざる。武帝卻つて他に欺を供して不識と道ふ、志公機を見て作す。便ち云く、「此れは是れ觀音大士、佛心印を傳ふ」と。帝悔いて遂に使を遣し去つて取らんとす、好、不啣。當時他の此れは是れ觀音大士、佛心印を傳ふと道はんを等つて、亦好し他を擯して國を出さば、猶ほ些子に較らんに。人傳ふ、② 志公は天監十三年に化し去り、達磨は普通元年に方に來る、自ら七年を隔つ、何が故ぞ卻つて道ふ、同時に相見すと。此れ必ず是れ謬傳ならんと。傳中に載する所に據る、如今這の事を論せず、只だ他の大綱を知らしめんことを要す。且く道へ、③ 達磨も是れ觀音、志公も是れ觀音、阿那箇か是れ、④ 端的底の觀音、既に是れ觀音、什麼と爲てか卻つて兩箇有る、何ぞ止だ兩箇のみならん、群を成し隊を作す。時に後魏の ⑤ 光統律師、⑥ 菩提流支三藏、師と論議す、師、相を斥け心を指す、而も偏局の量、自ら堪任せず、競うて害心を起し、數たび毒藥を加ふ。第六度に至り、化緣已に畢り、傳法の人を得たり、遂に復た救はず、端居して逝す、⑦ 熊耳山の定林寺に葬る。後に魏の宋雲使を奉じて、葱嶺に於て、師の手に隻履を携へて往くに遇ふ、武帝追憶して、自ら碑文を撰して云く、「嗟夫之れを見て見す、之

- ① 擦糊。常に塗糊に作るべし、模糊の義、猶ほ塗糊のごとし。
- ② 俗呼小録に云く、人の不慧を説いて不啣と云ふ、たわけもの」と譯す。
- ③ 志公は實志和尚なり。
- ④ 佛祖統要聖賢の部に云く、「志公は觀音の化身云々。達磨は觀音の化身云々。」
- ⑤ 端的は支那常用の俗語なり、端は正なり、的は實なり。
- ⑥ 齊郡下の大覺寺惠光、姓は楊氏、佛陀三藏の高弟なり。
- ⑦ 顏師古云く、熊耳山は順陽の北、益陽縣の東に在り、其の山に兩峰あり、かたち熊耳の如し、因つて以て名く。

れに逢うて逢はず、今も古も、之れを怨み之れを恨む」と。復た讀して云く、「心有なれば曠劫にも凡夫に滞り、心無なれば刹那にも妙覺に登る」と。且く道へ、達磨即今什麼の處にか在る、<sup>⑥</sup> 蹉過すれども也た知らず。

【頌】 聖諦廓然、箭新羅を過ぐ、唳、何ぞ當に的を辨すべき。(過也、何の辨じ難きことか有らん。) 朕に對する者は誰ぞ。(再來半文錢に直らず。又恁麼にし去るや。) 還つて云ふ不識と。(三個四個中れり。咄) 茲に因つて暗に江を渡る。(人の鼻孔を穿つことを得ず、卻つて別人に穿たる、蒼天蒼天、好大丈夫) 豈に荆棘を生ずることを免れんや。(脚跟下已に深きこと數丈) 闔國の人追へども再來せじ。(兩重の公案、追ふことを用て作麼にか作さん。什麼の處にか在る、大丈夫の志氣何にか在る。) 千古萬古空しく相憶ふ。(手を換へて臂を槌つ、空を望んで啓告す。) 相憶ふことを休めよ。(什麼と道ふぞ、鬼窟裏に向つて活計を作す。) 清風匝地何の極か有らん。(果然、大小の雪竇草裏に向つて靴す。) 師左右を顧視して曰く、「這裏還つて祖師有りや。」(爾翻 欸を待つ那、猶ほ道の去就を作す。) 自ら云く、「有り。」(場薩阿勞) 喚び來らせ、老僧が與に洗脚せしめん。(更に三十棒を與へて趕ひ出すとも、未だ分外とせず。道の去就を作す、猶ほ些子に較れり。)

【評唱】 且く雪竇の此の公案を頌するに據らば、一へに善く太阿の劍を舞すに似て相似たり。虚空中に向つて、盤礴して、自然に鋒鋦を犯さず、若し

⑥ 蹉過は錯過に同じ、蹉は足跡なりと註す、けつまつく、又「ふみすべ」と譯すべし。  
⑦ 盤礴は莊子に衣を解いて盤礴

是れ這般の手段無くんば、纒かに拈着せば、便ち鋒を傷り手を犯すことを見ん。若し是れ具眼の者は看よ、他の一拈一撮、一褒一貶、只だ四句を用て、一則の公案を 指定することを。大凡そ頌古は只だ是れ 繞路に禪を説き、拈古は大綱、欸に據つて案に結する而已。雪竇他に一擲を與へて劈頭に便ち道く、聖諦廓然、何ぞ當に的を辨すべき。雪竇佗の初句下に於て、道の一句を著く、妨げず奇特なり。且く道へ、畢竟作麼生かの辨せん。直饒鐵眼銅睛も、也た摸索不著、這裏に到つて情識を以て卜度し得ん麼。所以に雲門道く、擊石火の如く、閃電光に似たり、這箇の些子、心機意識情想到落ちず、爾が口を開くを等たば、什麼を作すにか堪へん。計較生ずる時、鶴子新羅を過ぐ。雪竇道く、爾天下の衲僧、何ぞ當に的を辨すべき、朕に對する者は誰ぞ、箇の還つて云ふ不識を著く。此れは是れ雪竇忒煞だ老婆、重重爲人の處なり。且く道へ、廓然と不識と、是れ一般か兩般か、若し是れ了底の人の分上ならば、言はずして論らん。若し是れ未了底の人ならば、決定打して兩槩と作さん。諸方尋常皆道ふ、雪竇重ねて拈すること一徧すと。殊に知らず、四句に公案を頌じ盡し了つて、後に慈悲

⑧ 羸なり、林注に羸羸の狀、わがままなるの貌なり、此れ本據なれども今は自由自在の義なり。  
⑨ 擲。當に擲に作るべし、廣韻に擲は式なり法なり、又擲抹の義にて「まつげり、めぐうて、とつた」と云ふ意か。  
⑩ 繞路は直截ならずして、巧妙に言を吐くなり。  
⑪ 續燈の註、拈古門に云く、大知見を具して宗教を拈提し、先覺を抑揚し、後見を開鑿す。  
⑫ 楞伽云く、欸は情狀なり、又誠欸なり、以て其の情を究めて其の誠を見るなり。此れ乃ち世間の有司吏職の語なり、其の事を説ふこと有るを司りて、必らず其の彼此の人情口欸を究め、以てこれを筆して案牘と名く、又は公案と云ふ。  
⑬ 説文に劈は破なり、廣韻に割

の爲の故に、事跡を頌出す。茲に因つて、暗に江を渡る、豈に荆棘を生ずることを免れんや。達磨本茲土に來つて、人の與に、粘を解き縛を去り、釘を抜き楔を抜き、荆棘を剷除す。何に因つてか卻つて道ふ、荆棘を生ずと。止だ當人のみに非ず、諸人即今脚跟下、已に深きこと數丈、闔國の人追へども再來せず、千古萬古空しく相憶ふ、可煞だ大丈夫ならず。且く道へ、達磨什麼の處に在る、若し達磨を見れば、便ち雪竇末後爲人の處を見ん。雪竇人の情見を逐はんことを恐怖す、所以に、關振子を撥轉して自己の見解を出して云く、「相憶ふことを休めよ、清風匝地何の極りか有らん」と。既に相憶ふことを休む、爾が脚跟下の事、又作麼生。雪竇道く、「即今箇の裏、匝地の清風、天上天下、何の極る所か有らん」と。雪竇千古萬古の事を拈じて、面前に拋向す、止だ雪竇當時何の極りか有らんと云ふのみに非ず、爾諸人の分上も、亦何の極りか有らん。他又人の這裏に執在せんことを恐れ、再び方便を著けて高聲に云く、「這裏還つて祖師有り麼。」自ら云く、「有り」と。雪竇這裏に到つて、妨げず人の爲に赤心片片たることを。又自ら云く、「喚び來らせ老僧が與に洗脚せしめん」と、太煞だ

八

なり、裂なり、頭は首なり、始なり。  
⑦ 事苑第八二十七、祖達磨に授く、叢文の註に曰く、祖師、人の其の行を知らんことを欲せず、是の夜菴を航して西に邁く、故に暗に江を渡ると曰ふ。  
⑧ 粘著繫縛、即ち情、識分別の執固を謂ふなり。  
⑨ 爾師古云く、闔は閉なり、一國の中を總ぶ、故に闔國といふ。  
⑩ 大丈夫ならば「男らしくない」と譯す。  
⑪ 關振子は「からくりのはげなり、通雅に曰く、關は機軸なり、廣記に唐の韓志和、木を雕りて鸞鶴を爲り、機軸を腹中に置き、之れを發すれば則ち飛傳、傳燈錄に黃髮謂ふ、「牛頭尙ほ向上の關振子を知らず」と。

人の威光を滅す。當時也た好し本分の手脚を與ふるに。且く道へ、雪竇の意什麼の處に在る、這裏に到つて、喚んで驢と作さんか則ち是、喚んで馬と作さんか則ち是、喚んで祖師と作さんか則ち是、如何が名逸せん。往往喚んで雪竇祖師を使ひ去ると作す。且喜すらくは沒交涉。且く道へ、畢竟作麼生、只だ老胡の知を許して、老胡の會を許さず。

⑫ 正約に、人物を描畫して其の形に類するを貌と云ふ、正宗普洞山章に先師の眞を道得す。

第一則

垂示に云く、乾坤窄く、日月星辰一時に黒し。直饒棒、兩點の如く、喝、雷奔に似たるも、也た未だ向上宗、乘中の事に當得せず。設使三世の諸佛も、只自知す可し。歴代の祖師も、全提不起。一だ大藏教も詮注し及ばさず。明眼の衲僧も、自救不了、這裡に到つて作麼生か請益せん。箇の佛の字を道ふも、拖泥滯水。箇の禪の字を道ふも、滿面の慚惶。久參の上士は、之を言ふを待たず。後學の初機は、直に須らく究取すべし。

【本則】 擧す、趙州衆に示して云く、「這の老漢什麼をか作す、這の葛藤を打すること莫れ。」至道無難。」(難に非ず易に非ず)「唯嫌揀擇。」(眼

【本則】 東嶺禪師云く、第二に宗旨の分ち、夫れ臨濟は宗本と爲す所、雲門は宗至る可き所、曹洞は宗の地體、馮仰は作用、法眼は宗旨の爲人方便か、是れ皆趙州の揀擇に非ず、明白に非ざるの中に在るのみ。

前是れ什麼ぞ三祖猶は在り。」「纔に語言有れば、是れ揀擇、是れ明白。」「兩頭三面、少賣弄、魚行けば水濁り、鳥飛ば毛落つ。」「老僧は明白裏に在らず。」「賊身已に露る、這の老漢什麼の處に向つてか去る。」「是れ汝還つて護惜するや也た無や。」「敗也、也た一個半箇有り。」「時に僧有り、問ふ、「既に明白裏に在らずんば、箇の什麼をか護惜せん。」「也た好く一拶を與ふ、舌上の齧を拵ふ。」「州云く、「我れも亦知らず。」「(這の老漢を拶殺す、倒退三千。)」僧云く、「和尚既に知らずんば、什麼としてか卻つて明白裏に在らずと道ふ。」「(看よ走りて什麼の處に向つてか去らん、逐てて樹に上り去らしむ。)」州云く、「事を問ふことは即ち得たり、禮拜し了つて退け。」「(頼に這の一著有り、這の老賊。)」

【評唱】 趙州和尚、尋常此の語頭を擧す、只だ是れ唯嫌揀擇、此れは是

れ三祖信心の銘に云く、「至道無難、唯嫌揀擇、但だ憎愛莫ければ、洞然として明白」と。纔かに是非有れば、是れ揀擇、是れ明白。纔かに恁麼に

會せば、蹉過了也。鉸釘膠粘せば、何の用をか作すにか堪へん。州云く、「是れ揀擇是れ明白」と。如今の參禪問道、揀擇の中に在らざれば、便ち明白裏に在らず、汝等還つて護惜するや也た無やと。汝諸人既に明白裏に在らず、且く道へ、趙州什麼の處にか在る、什麼と爲てか卻つて人をして護惜せしむ。五祖先師常に説いて道く、「垂手し來つて偏に似過す、偏作廢生か會す」と。且く道へ、作廢生か是れ垂手の處、鈎頭の意を識取せよ。定盤星をとむること莫れ、這の僧出で

①五燈會九第四に南泉の法嗣趙州觀音院從諗禪師は、曹州邯鄲の人なり、姓は祁氏云々。

來るも、也た妨げず奇特なることを。趙州の空處を捉へて、便ち去つて佗を拶す、既に明白裏に在らず、箇の什麼をか護惜せん。趙州更に捧を行じ喝を行せず、只だ道ふ、我も亦知らずと。若し是れ這の老漢にあらずんば、佗に拶著せられて、<sup>④</sup> 往往に忘前失後せん、頼に是れ這の老漢、轉身自在の處有り。所以此の如く他に答ふ、如今の禪和子、問著すれば也た道ふ、我も亦知らず會せずと。爭奈せん、途を同うして轍を同じうせず。這の僧奇特の處有つて、方に始めて問ふことを會す、和尚既に知らずんば、什麼と爲てか卻つて道ふ明白裏に在らずと、更に好一拶。若し是れ別人ならば、往往に<sup>⑤</sup> 分疏不下ならん。趙州は是れ作家、只だ他に向つて道ふ、事を問ふことは即ち得たり、禮拜し了つて退けと。這の僧舊に依つて這の老漢を奈何ともすること無し、只だ氣を飲み聲を飲むことを得たり。此れは是れ大手の宗師、偏が與に玄を論じ妙を論じ、機を論じ境を論せず、一向に本分の事を以て人を接す。所以に道ふ、相罵ることは偏に饒す術を接げ、相唾することは偏に饒す水を潑げと。殊に知らず這の老漢、平生棒喝を以て人を接せず、只だ平常の言語を以てするに、只だ是れ天下の人奈何ともせず、蓋し他の平生許多の計較無きが爲に。所以に横拈倒用、逆行順行、大自在を得たり。如今の人理會し得ず、只管に

④鈎は「はかりのききなり」云々、ぎにかけた處で合點せよ、定盤(はかり)の星をあてにするな」と云ふ義なり。  
⑤往々は毎度の義、杜詩に「醉中往々逃禪を愛す」又處々の義、蘇頌の詩に「往々花間綠石に逢ふ」  
⑥語路相似たりと雖も、其の意懸隔す。  
⑦報新錄に云く、「人の自ら其の事は是非を辨白する者を俗に分疏と曰ふ。」「分疏不下は「いひほどきえず」と譯す。



道ふ、趙州答話せず、人の爲に説かずと。知らず當面に蹉過することを。

【頌】至道無難。(三重の公案満口に霜を含む、什麼と道ふぞ。)言端語端。(魚行けば水濁る、七花八裂、擦胡也。)一に多種有り。(分開せば好し、只だ一般ならば什麼の了期か有らん。)二に兩般無し。(何ぞ堪へん四五六七、葛藤を打して什麼にか作さん。)天際日上り月下る。(靚面相呈す、頭上漫漫脚下漫漫、切に忌む頭を昂げ頭を低ることを。)檻前山深く水寒し。(一死更に再活せず、還つて寒毛卓立することを覺ゆるや。)獨體識盡きて喜何ぞ立せん。(棺木裏に瞠眼す、盧行者は是れ它の同參)枯木龍吟銷して未だ乾かず。(咄、枯木再び花を生ず、達磨東土に遊ぶ。)難難。(邪法扶け難し、倒一説、這裏是れ什麼の所在ぞ、難と説き易と説く。)揀擇明白君 自ら看よ。(睛、將に謂へり、別人に由ると、頼に自ら看るに値ふ、山僧が事に干らす。)

【評唱】雪竇佗の落處を知る、所以に此の如く頌す。便ち後に隨つて道ふ、「言端語端」と、一隅を擧げて三隅を以て反せず。雪竇道く、「一に多種有り、二に兩般無し」と、三隅一に反るに似たり。備且く道へ、什麼の處か是れ言端語端の處、什麼と爲てか一に卻つて多種有り、二に卻つて兩般無き、若し眼を具せずんば、什麼の處に向つて摸索せん。若しこの兩句を透得せば、所以に古人道く、打成一片舊に依つて見れば、山は是れ山、水は是れ水、長は是れ長、

①香林、衆に謂つて曰く、「老僧四十年方に打成一片」と言ひ訖つて逝す。  
②雲門錄に上堂云く、「諸和尚子妄想すること莫れ、天は是れ天、地は是れ地、云々。」

短は是れ短、天は是れ天、地は是れ地、有る時は天を喚んで地と作し、有る時は地を喚んで天と爲し、有る時は山を喚んで是れ山にあらずとし、水を喚んで是れ水にあらずとす。得去らん。風來れば樹動き、浪起れば船高し。春は生じ夏は長じ、秋は收め冬は藏す、一種平懷なれば、泯然として自ら盡く。則ち此の四句の頌に頓絶し了れり。雪竇餘才有り、所以に結裏を分開し、算へ來れり只だ是れ頭上に頭を安じて道く、「至道無難、言端語端、一に多種有り、二に兩般無し」と。許多の事無しと雖も、天際日上る時月便ち下り、檻前山深き時水便ち寒し。這裏に到つて、言も也た端、語も也た端、頭頭是れ道、物物全眞、豈に是れ心境俱に忘じて、打成一片の處にあらずや。雪竇頭上は太孤峻生、末後は也た漏逗少からず。若し參得透し、見得徹せば、自然に醍醐上味の如くに相似ん。若し是れ情解未だ忘せずんば、便ち見ん七花八裂して、決定して此の如きの説話を會すること能はざらんことを。獨體識盡きて喜何ぞ立せん、枯木龍吟銷して未だ乾かず。只だ這れ便ち是れ交加の處、這の僧恁麼に問ひ、趙州恁麼に答ふ。州云く、「至道無難、唯嫌揀擇、纔に語言有れば、是れ揀擇、是れ明白。老僧は明白裏に在

①信心銘の文、中峰曰く、「義解の者謂ふ取捨の情盡き、聖凡の知見依る無し、自然一切處平常一切處泯滅。」  
②頓絶は「しやんと、きりあげると譯す。  
③結裏は結果にも作る「事なしまひかたづける」なり、語の意は「やわらりと分開し、又たしやんと、結果してしまつた、されども算用して見れば、とかく頭上に頭を安することぢや」。  
④牛乳酥を出し、酥酪を出し、酪醍醐を出す、乃ち諸味中の最上なり。  
⑤交加は樹木の繁りて、枝と枝とが交又する貌、則ち雪竇趙州の話を頌するに、香嚴、石

らす、是れ汝還つて護惜するや也た無しや」と。時に僧有り、便ち問ふ。「既に明白裏に在らず、又箇の什麼をか護惜せん。」州云く、「我も亦知らず。」僧云く、「和尚既に知らずんば、什麼と爲てか卻つて道ふ明白裏に在らすと。」州云く、「事を問ふことは即ち得たり、禮拜し了つて退け」と。此れは是れ古入道を問ふ底の公案、雪竇拽き來つて、一串に穿卻して、用て至道無難、唯嫌揀擇を頌す。如今の人古人の意を會せず、只管に言を咬み句を嚼む、甚の了期か有らん。若し是れ通方の作者ならば、始めて能く這般の説話を辨得せん。見すや、僧香巖に問ふ、「如何なるか是れ道。」巖云く、「枯木裏の龍吟。」僧云く、「如何なるか是れ道中の人。」巖云く、「獨體裏の眼睛。」僧後に石霜に問ふ、「如何なるか是れ枯木裏の龍吟。」霜云く、「猶ほ喜を帶ぶること有り。」「如何なるか是れ獨體裏の眼睛。」霜云く、「猶ほ識を帶ぶること有り。」僧又曹山に問ふ、「如何なるか是れ枯木裏の龍吟。」山云く、「血脈不斷。」「如何なるか是れ獨體裏の眼睛。」山云く、「乾不盡。」「什麼人か聞くことを得たる。」山云く、「盡大地未だ一箇も聞かざるもの有らず。」僧云く、「未審し龍吟是れ何の章句ぞ。」山云く、「是れ何の章句と云ふことを知らざれども、聞く者は皆喪す。」復た頌有り、云く、「枯木龍吟眞の見道。獨體識無く眼初めて明かなり。喜識盡くる時消息盡く。當人那ぞ辨せん濁中の清。」雪竇謂つ可し大いに手脚有りと。一時に爾

- ① 霜、曹山の答話を引用して頌出するを云ふ。
- ② 香巖は濁山粘の法嗣。
- ③ 石霜は道吾智の法嗣。
- ④ 曹山は洞山价の法嗣。
- ⑤ 萬松云く、「道有るときは則ち喜有り、人有るときは則ち識有り。」
- ⑥ 好彩は「ばくちの彩の目の好きを云ふ」なり。

が與に交加して頌出す。然も是の如くなりと雖も、都て兩般無し。雪竇末後に爲人の處有り、更に道ふ難難と。只だ這の難難、也た須らく透過して始めて得べし。何が故ぞ、百丈道く、「一切の語言、山河大地、一一轉じて自己に歸す」と。雪竇凡そ是れ一拈一撮、末後に到つて須らく自己に歸すべし。且く道へ、什麼の處か是れ雪竇爲人の處、揀擇明白君自ら看よと。既に是れ葛藤を打して頌じ了る。何に因つてか卻つて道ふ、君自ら看よと。好彩偏をして自ら看せしむ。且く道へ、意什麼の處にか落在す、道ふこと莫れ諸人理會し得すと。設使ひ山僧も這裏に到つては、也た只だ是れ理會し得ず。

### 第三則

垂示に云く、一機一境、一言一句。且く箇の入處有らんことを圖る。好肉上に瘡を癩る、窠を成し窟を成す。大用現前、軌則を存せず。且く向上の事有ることを知らんを圖る。蓋天盖地、又摸索不著。恁麼も也た得たり、不恁麼も也た得たり、太廉纖生。恁麼も也た得ず、不恁麼も也た得ず、太孤危生。二塗に涉らす、如何してか即ち是ならん。請ふ試みに擧す看よ。

【本則】 擧す、馬大師不安。(這の漢漏逗少からず、別人を帶累し去れり。院主問ふ、「和尚近日尊候如何。」(四百四病一時に發す、三日の後亡

【本則】 東嶺禪師云く、第三に宗旨の出づる所を明す、もと馬大師凡そ言句有れば、是れ提婆宗の語に依る、此の日月佛月面佛を要と爲す。

僧を送らすんば、是れ好手、仁義道中。大師曰く、「日面佛月面佛（可煞だ新鮮、養子の縁。）

【評唱】 馬大師不安、院主問ふ、「和尚近日尊候如何。」大師云く、「日面佛月面佛」と。祖師若し本分の事を以て相見せずんば、如何が此の道の光輝を得ん。此れ箇の公案、若し落處を知らば、便ち丹

香に獨歩せん。若し落處を知らずんば、往往枯木巖前に差路し去ること。在らん。若し是れ本分の人ならば、這裏に到つて、須らく是れ耕夫の牛を驅り、飢人の食を奪ふ底の手脚有つて、方に馬大師爲人の處を見るべし。如今多く人有つて道ふ、馬大師院主を接すと。且喜すらくは没交渉、如今衆中多く錯つて會して瞪眼して云く、「這裏に在り、左眼は是れ日面、右眼は是れ月面」と。什麼の交渉か有らん、驢年にも未だ夢にだも見ざること。在らん、只管に古人の事に蹉過す。只だ馬大師此の如く道ふが如きんば、意

什麼の處にか在る、有る底は云ふ、「平胃散一盞を點じ來る」と、什麼の巴鼻か有らん這裏に到つて作麼生か平穩なることを得去らん。所以に道ふ、「向上の一路、千聖不傳、學者形を勞すること、猿の影を捉ふるが如し」と、只だ這の日面佛月面佛、極めて是れ見難し。雪竇此に到つて、亦是れ頌じ難し。卻つて他の見得透するが爲に、平生の工夫を用ひ盡して他を指注す、諸人雪竇を見んと要する廢、下文を看取せよ。

【頌】 日面佛月面佛。（口を開かば膽を見る、兩面の鏡の如し、相照して中に於て影像無きが如し。）五帝三皇是れ何物ぞ。（大高生、他を謾すること莫くんば好し、貴ぶ可し、賤むべし。）二十年來曾て若辛す。（自ら是れ懶落草す、山僧が事に干らず、啞子苦瓜を喫す。）君が爲めに幾か蒼龍窟に下る。（何ぞ恁麼なることを消せん、錯りて用心すること莫くんば好し、奇特無しと道ふこと莫れ。）屈。（人を愁殺す、愁人愁人に向つて説くこと莫れ。）述するに堪へたり。（阿誰に向つてか説かん、愁人に説與すれば人を愁殺す。）明眼の衲僧も輕忽すること莫れ。（更に須らく子細にすべし、咄、倒退三千。）

【評唱】 神宗在位の時、自ら此の頌、國を諷すと謂へり、所以に肯て藏に入れず。雪竇先づ拈じて云く、「日面佛月面佛」と。一拈し了つて卻つて云ふ、「五帝三皇是れ何物ぞ」と。且く道へ、他の意作麼生、適來已に説了也、直下に佗を注す。所以に道ふ、鈎を四海に垂れて、只だ獐龍を釣ると、只だ此の一句に已に了れり。後面に雪竇自ら他の平生心を用て參尋する所以を頌す。二十年來曾て若辛す、君が爲めに幾か蒼龍窟に下る、箇の什麼にか似たる。一人の蒼龍窟裏に入つて珠を取るに似て相似たり。後來漆桶を打破し、將に謂へり多少の奇特と。元來只だ箇の五帝三皇是れ何

① 曾元第三、馬大師の章に云く、「江西の道一禪師は、涇州の人、姓は馬氏、本邑の羅漢寺にて出家す、容貌奇異牛の如く行き虎の如く視る云々。」  
② 院主は都寺なり、又監寺、監院なり。  
③ 巴は把と同じ、道具の柄なり、鼻はつまみなり。故に没巴鼻は「とらえ處なき」義なり、支那にて常に用ふる俗語なれども、宗門にては又一轉して、衲僧の巴鼻など用ふ、本の據るべき有るを云ふなり。

【頌】 日面佛月面佛。（口を開かば膽を見る、兩面の鏡の如し、相照して中に於て影像無きが如し。）五帝三皇是れ何物ぞ。（大高生、他を謾すること莫くんば好し、貴ぶ可し、賤むべし。）二十年來曾て若辛す。（自ら是れ懶落草す、山僧が事に干らず、啞子苦瓜を喫す。）君が爲めに幾か蒼龍窟に下る。（何ぞ恁麼なることを消せん、錯りて用心すること莫くんば好し、奇特無しと道ふこと莫れ。）屈。（人を愁殺す、愁人愁人に向つて説くこと莫れ。）述するに堪へたり。（阿誰に向つてか説かん、愁人に説與すれば人を愁殺す。）明眼の衲僧も輕忽すること莫れ。（更に須らく子細にすべし、咄、倒退三千。）

【評唱】 神宗在位の時、自ら此の頌、國を諷すと謂へり、所以に肯て藏に入れず。雪竇先づ拈じて云く、「日面佛月面佛」と。一拈し了つて卻つて云ふ、「五帝三皇是れ何物ぞ」と。且く道へ、他の意作麼生、適來已に説了也、直下に佗を注す。所以に道ふ、鈎を四海に垂れて、只だ獐龍を釣ると、只だ此の一句に已に了れり。後面に雪竇自ら他の平生心を用て參尋する所以を頌す。二十年來曾て若辛す、君が爲めに幾か蒼龍窟に下る、箇の什麼にか似たる。一人の蒼龍窟裏に入つて珠を取るに似て相似たり。後來漆桶を打破し、將に謂へり多少の奇特と。元來只だ箇の五帝三皇是れ何

④ 宋太祖の後、第六主を神宗と曰ふ、乃ち英宗の子、諱は頊、熈寧元年即位、治世十八年汴に都す、圓照の本公、雪竇を以て藏に入れんことを請ふ、時に中書省の諸大臣議評して「其の錄之旨妙理に至りては、即ち得て潤度するに及ばず、今五帝三皇是れ何物ぞと云ふ句有り、三皇五帝は是れ我が王の先祖なり、今是れ

物ぞと云ふを消得す。且く道へ、雪竇の語、什麼の處にか落在す、須らく是れ自家に退歩して見て、方に始めて他の落處を見得す。豈に見ずや、興陽の割侍者、遠録公の間に答ふ、「婆竭海を出でて乾坤震ふ、觀面相呈する事若何。」割云く、「金翅鳥王宇宙に當る、箇の中誰か是れ出頭の人」と。遠云く、「忽ち出頭に遇はば、又作麼生。」割云く、「鶻の鳩を捉ふるに似たり、君信せずんば、獨體前に驗して始めて眞を知らん。」遠云く、「恁麼ならば則ち、節を屈して胸に當て、退身三步せん。」割云く、「須彌座下の烏龜子重ねて點額に遺ふて回るを待つこと莫れ。」所以に三皇五帝亦是れ何物ぞ、人多く雪竇の意を見ず、只管に國を諷すと道ふ。若し恁麼に會せば、只だ是れ情見と。此れは乃ち、禪月、公子行に題して云く、「錦衣鮮華にして手に鶻を撃ぐ、閑行の氣貌輕忽多し、稼穡の艱難總に知らず、五帝三皇是れ何物ぞ。」雪竇道く、「屈、述するに堪へたり、明眼の禪僧も輕忽すること莫れ。」多少の人か蒼龍窟裏に向つて活計を作す、直饒ひ是れ頂門に眼を具し、肘後に符有つて明眼の禪僧、四天下を照破するも、這裏に到つて也た輕忽する莫れ、須らく是れ子細にして始めて得べし。

何物ぞと曰ふを以て、故に大藏に入るを許さず。  
⑤會元第十四に、鄧州清寂禪師、僧問ふ、「婆竭海を出でて云々、法を太陽の玄に嗣ぐ。」  
⑥遠録公、法を葉縣の省に嗣ぐ、會元十五に云く、「舒州浮山法遠圓鑑禪師云々。」  
⑦夾山抄に風節は又手のことなり、腕節を屈するなり、躬身風節又手富胸の義、風節は元來節義を、まげることなれども、こゝに借り用ひて、折腰のことにしたるなり。  
⑧蜀主王建實休に賜ふて、禪月大師と號す。  
⑨公子行は王子等の遊行。  
⑩仙道家護身の符なり、肘後に付すれば、都べて鬼神の畏れ無し、今本分の一著子を指す。

第四則

垂示に云く、青天白日、更に東を指し西を割すべからず。時節因緣、亦須らく病に應じて藥を與ふべし。且く道へ、放行するが好きか、把定するが好きか。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、徳山瀉山に到る。(擔板漢、野狐精。)複子を挟んで法堂上に於て、(妨げず人をして疑著せしむ、敗缺を納る。)東より西に過ぎ、西より東に過ぎ、(可煞だ禪有りて什麼をか作さん。)顧視して無無と云つて便ち出づ。(好し三十棒を與ふるに、可煞だ氣天を衝く、眞の師子兒善く師子吼す。)雪竇著語して云く、「勤破了也。」(錯、果然、點。)徳山門首に至り、卻つて云く、「也た草草なることを得ず。」(放去收來、頭上は太高生、末後は太低生、過を知りて必ず改む、能く幾人か有らん。)便ち威儀を具し、再び入つて相見す。(依前として這の去就を作す、已に是れ第二重の敗缺、嶮。)瀉山坐する次、(冷眼にして這の老漢を見る、虎鬚を捋づることは也た須らく是れ這般の人にして始めて得べし。)徳山坐具を提起して云く、「和尚。(頭を改め面を換ふ、風無きに浪を起す。)瀉山拂子を取らんと擬す。(須らく是れ那の漢にして、始めて得べし、籌を帷帳の中に運す、妨げず天下の人の舌頭を坐斷することを。)徳山便ち喝して、拂袖して出づ。(野狐精の見

【本則】東嶺禪師云く、第四に宗旨磨瑩する所を明す、徳山は是れ衲子の基、瀉山も亦師家の宗、此の則ち二老を以て手本と爲す。

解、這の一喝也た權有り也た實有り、也た照有り也た用有り、一等に是れ雲を拏ひ霧を攫む者、中に就いて奇特なり。雪竇著語して云く、「勘破了也」(錯、果然、點)。(德山法堂を背卻して、草鞋を著けて便ち行く。(風光愛しつべし、公案未だ圓かならず、頂上の笠を贏ち得て、脚下の鞋を失卻す、已に是れ喪身失命し了れり。) 瀉山晚に至つて首座に問ふ、「適來の新到、什麼の處にか在る。」(東邊に落節し西邊に抜本す、眼東南を觀て意西北に在り。) 首座云く、「當時法堂を背卻し、草鞋を著けて出で去れり。」(靈龜尾を曳く、好し三十棒を與ふるに、這般の漢腦後に多少をか喫すべき。) 瀉山云く、「此の子已後孤峰頂上に向つて、草庵を盤結して、佛を呵し祖を罵り去ること、在らん。」(賊過ぎて後弓を張る、天下の稍僧跳不出。雪竇著語して云く、「雪上に霜を加ふ。」)(錯、果然、點。)

【評唱】 夾山三箇の點の字を下す、諸人還つて會す麼。有る時は「一莖草を將て、丈六の金身と作して用ひ、有る時は丈六の金身を將て、一莖草と作して用ふ。」(德山は本是れ講僧、西蜀に在つて金剛經を講ず。教中に道ふに因らば、金剛喻定後得智の中に、千劫に佛の威儀を學し、萬劫に佛の細行を學し、然して後に成佛す、他の南方の魔子、便ち即心是佛と説くと。遂に發憤して、疏鈔を擔ふて行脚し、直に南方に往いて、這の魔子の輩を破せんと云ふ。看よ他の恁麼の發憤、也た是れ箇の猛利底の漢なることを。初め澧州に到る、路上に一婆子の油糞を賣るを見て、遂に疏鈔を放下して、

① 夾山は圓悟の自稱なり。  
 ② 德山宣鑑禪師は、龍潭崇信の法嗣なり。  
 ③ 油糞は「ごまもち」なり、事苑に胡麻、注に胡麻は即ち油麻なり。白胡麻であへたまふ。

且く點心を買つて喫せんとす。婆云く、「載する所の者は是れ什麼ぞ。」(德山云く、「金剛經の疏鈔。」) 婆云く、「我に一間有り、爾若し答へ得ば、油糞を布施して點心と作さん、若し答へ得ずんば、別處に買ひ去れ。」(德山云く、「但だ問へ。」) 婆云く、「金剛經に云く、「過去心も不可得、現在心も不可得、未來心も不可得」と、上座那箇の心をか點せんと欲す。」(山無語、婆遂に指して去つて。龍潭に參せしむ、纔に門に跨つて便ち問ふ、「久しく龍潭と嚮く、到來するに及んで、潭も又見えす、龍も又現せず。」) 龍潭和尚「屏風の後に於て身を引べて云く、「子親しく龍潭に到れり」と。師乃ち禮を設けて退く、夜間に至つて入室、侍立して更深けぬ。潭云く、「何ぞ下り去らざる。」(山遂に珍重して簾を掲げて出づ。外面の黒きを見て、卻回して云く、「門外黒し。」) 潭遂に紙燭を點じて山に度與す、山接するに方つて、潭便ち吹滅す。山豁然として大悟、便ち禮拜す。潭云く、「子箇の什麼を見てか便ち禮拜する。」(山云く、「某甲今より後、更に天下の老和尚の舌頭を疑著せず。」) 來日に至つて、潭上堂して云く、「可の中箇の漢有り、牙劍樹の如く、口血盆に似たり、一棒に打すれども頭を回さず、他時異日、孤峰頂上に向つて、吾が道を立し去ること、在らん。」(山遂に疏鈔を取つて、法堂前に於て、火炬を將て舉起して云く、「諸の玄辨を窮むるも、一毫を太虚に置くが若く、世の樞機を竭すも、一滴を巨壑に投するに似たり」と云つて、遂に之を焼く。後に瀉山の化を盛にするを聞いて、

④ 文公家禮に曰く、婦長彦か具するを點心と云ふ。  
 ⑤ 天王道悟禪師の法嗣。  
 ⑥ 屏風は「ついたて」なり、日本の屏風は榻屏なり、身を引べるとは、半身を出しかけるなり。

直に瀉山に造つて、便ち作家相見す。包も亦解かず、直に法堂に上つて、東より西に過ぎ、西より東に過ぎて、顧視して無無と云つて便ち出づ。且く道へ、意作麼生、是れ顛すること莫し麼。人多く錯つて會して、用て建立と作す、直に是れ交渉無し。看よ他の恁麼に、妨げず奇特なることを。所以に道ふ、群を出づることは須らく是れ英靈の漢なるべし、勝に敵することは他の獅子兒に還す。選佛若し是の如きの眼無くんば、假饒ひ千載にも又奚か爲んと。這裏に到つて、須らく是れ通方の作者にして、方に始めて見得すべし。何が故ぞ、佛法許多の事無し、那裏にか情見を著得し來らん。是れ他の心機、那裏にか如許多の阿勞有らん。所以に玄沙道く、「直に秋潭の月影、静夜の鐘聲、扣擊に随つて以て虧くること無く、波瀾に觸れて散せざるに似たるも、猶は是れ生死岸頭の事、這裏に到つて、亦得失是非無し、亦奇特玄妙無し。既に奇特玄妙無し、作麼生か會す」と。他東より西に過ぎ、西より東に過ぐる、且く道へ、意作麼生。瀉山老漢、也た他に管せず、若し是れ瀉山にあらすんば、也た他に折挫一上せられん。看よ他の瀉山老作家の相見、只管に坐ながら成敗を観ることを。若し深く來風を辨せすんば、争か能く此の如くならん。雪竇著語して云く、「勘破了也。」一へに鐵櫪に似て相似たり。衆中之を著語と謂ふ、然も兩邊に在り雖も、卻つて兩邊に住ませず、作麼生か他の勘破了也と道ふことを

①選は「わたす」なり、敵に勝つことは、平常の者はならぬ故、其れは獅子兒の手へ「わたす」なり。  
 ②阿勞は勞擾なり、事多く事「や」かましきを云ふ、阿は發語の助聲「とりみだす」を云ふ。  
 ③瀉山靈祐禪師は、百丈懷海の法嗣なり。

會せん。什麼の處か是れ勘破の處、且く道へ、徳山を勘破するか、瀉山を勘破するか、徳山遂に出でて門首に到つて、卻つて拔本せんことを要して、自ら云く、「也た草草なることを得じ」と。瀉山と五臟心肝を①揪出して、法戦一場せんことを要して、再び威儀を具して、卻回して相見す。瀉山坐する次で、徳山坐具を提起して云く、「和尚。」瀉山拂子を取らんと擬す、徳山便ち喝し、拂袖して出づ、可煞だ奇特なり。衆中多く道ふ、瀉山他を怕ると、甚の交渉か有らん、瀉山亦忙しからず。所以に道ふ、智、禽に過ぎて禽を獲得し、智、獸に過ぎて獸を獲得し、智、人に過ぎて人を獲得すと。這般の禪に參得せば、盡大地、森羅萬象、天堂地獄、草芥人畜、一時に一喝を作し來るも、他亦管せず、禪床に掀倒し、大衆を喝散すとも、他亦顧みず、天の高さが如く、地の厚きに似たり。瀉山若し天下の人の舌頭を坐斷する底の手腳無くんば、時に他を驗すること也た大いに難からん。若し是れ他の一千五百人の善知識にあらすんば、這裏に到つて也た分疎不下ならん。瀉山は是れ籌を帷幄に運し、勝つことを千里に決す、徳山法堂を背卻して、草鞋を着けて便ち出で去る。且く道へ、他の意作麼生。備道へ、徳山是れ勝つか是れ負くるか、瀉山恁麼、是れ勝つか是れ負くるか。雪竇著語して云く、「勘破了也」と、是れ他工夫を下して、古人の警訛極則の處を見透して、方に能く恁麼に妨げず奇

②本は本錢、拔本は「もとでな」とりかへす」なり。  
 ③揪出は「まけたす」と譯す。  
 ④祖庭事苑に曰く、警訛、上は正しく教に作る、漏教難なり、下は謬なり、公案の何んとも道理見分け難く、むづかしくあやしき「體」を形容せる語なり「ちがひめ」也。  
 ⑤五燈嚴統十九に、衢州天寧訥堂梵志禪師、圓悟の法嗣。

特なることを。① 訥堂云く、「雪竇兩箇の勘破を著け、三段の判を作して、方に此の公案を顯す、傍人の二人を斷るに似て相似たり。」後來這の老漢、緩緩地に晚に至つて方に首座に問ふ、「適來の新到、什麼の處にか在る。」首座云く、「當時法堂を背卻して、草鞋を着けて出で去れり。」瀉山云く、「此の子、已後孤峯頂上に向つて、草庵を盤結して、佛を呵し祖を罵り去ることたらん。」且く道へ、他の意旨如何。瀉山老漢、是れ好心にあらず、徳山後來佛を呵し祖を罵り、風を打し雨を打す、舊に依つて他の窠窟を出でず。這の老漢に平生の伎倆を見透せしむる。這裏に到つて、喚んで瀉山他に受記を與ふると作し得てん麼、喚んで澤廣うして山を藏し、② 理能く豹を伏すと作し得てん麼。若し恁麼ならば、且喜すらくは沒交涉。雪竇此の公案の落處を知つて、敢て他の興に斷じて更に道ふ、「雪上に霜を加ふ」と。又重ねて拈起し來つて人をして見せしむ。若し見得し去らば、偏に許す、瀉山徳山雪竇と同參なることを。若し也た見ずんば、切に忌む、妄に情解を生ずることを。

① 祖庭事苑雪竇拈古、「理能く豹を伏すの注に、豹當に動に作るべし、動は狼戾なり。」又大惠普說に、「所謂理能く動を伏す、纔に理上に到道せば、自然に你をして禮拜せしめん。」種々の説あれども狸や豹の説は取らず、倘は強情なるものをいふ。

【頌】 一勘破。(言猶ほ耳に在り、過) 二勘破。(兩重の公案) 雪上に霜を加ふ會て嶮墮す。(三段同じからず、什麼の處にか在る。) 飛騎將軍虜庭に入る。(嶮、敗軍の將再斬に勞すること無けん、喪身失命) 再び完全を得る能く幾箇ぞ。(死中に活と得たり) 急に走過す。(傍若無人、三十六策、偏が神通

を盡すも何の用を作すにか堪へん) 放過せず。(理能く豹を伏す、鼻孔を穿卻す) 孤峰頂上草裏に坐す。(果然、鼻孔を穿過するも也た未だ奇特と爲す、什麼と爲てか卻つて草裏に在りて坐す) 咄。(會すや、兩及相傷る、兩兩三三舊路に行く、唱 拍相隨ふ、便ち打たん)

【評唱】 雪竇一百則の公案を頌するに、一則則に香を焚いて拈出す。所以に大いに世に行はる、他更に文章を會し、公案を透得し、盤礴して熟することを得て、方に筆を下すに可なり。何が故ぞ此の如くなる、龍蛇は辨じ易く、衲子は瞞じ難し。雪竇這の公案を參透し、節角磬訛の處に於て、三句の語を著けて、撮し來つて頌出す、雪上に霜を加ふ、幾乎と嶮墮す。只だ徳山の如きんば、什麼にか似たる。一へに李廣が天性射を善するに似たり、天子封じて飛騎將軍と爲す、

② 即ち漢の孝文皇帝なり。

深く虜庭に入つて、單子に生獲せらる。廣時に傷病す、廣を兩馬の間に置いて、絡うて盛り臥せしむ。廣遂に詐つて死す。其の傍を睨るに、一の胡兒の善馬に騎る有り、廣身を騰げて馬に上り、胡兒を推墮して、其の弓矢を奪つて、馬に鞭ち南に馳せ、弓を彎いて追騎を射退す、故を以て脱するを得たり。這の漢這般の手段有つて、死中に活と得たり、雪竇引いて頌中に在いて用ひて、徳山再び入つて相見して、舊に依つて他の跳得出し去るに比す。看よ他の古人見到說到、行到用到、妨げず英靈なることを。人を殺すに眼を眨せざる底の手脚有つて、方に立地に成佛す可し。立地に成佛する底の人有つて、自然に人を殺すに眼を眨せず、方に自由自在の分有らん。如今の人、

有る底は問著すれば、頭上は一へに禪僧の氣槩に似たり。輕輕に抄著すれば、便ち腰段と做り、股截と做る、七支八離して、渾て些子相續の處無し。所以に古人道く、「相續也た大いに難し」と。看よ他の徳山、馮山此の如くなることを。豈に是れ滅滅掣底の見解ならんや。再び完全を得る能く幾箇ぞ、急に走過す。徳山喝して便ち出で去る、一へに李廣が捉れて後、計を設けて一箭に一箇の番將を射殺して、虜庭を出づることを得るに似て相似たり。雪竇頌して此に到つて大いに工夫有り、徳山法堂を背卻して、草鞋を著けて出で去る、便宜を得と道ふ。殊に知らず、這の老漢、舊に依つて他の出頭を放さざること在于ることを。雪竇道く、「放過せず」と。馮山晩間に至つて首座に問ふ、「適來の新到、什麼の處にか在る。」首座云く、「當時法堂を背卻して、草鞋を著けて出で去れり」と。馮山云く、「此の子他日、孤峰頂上に向つて、草庵を盤結して、佛を呵し祖を罵り去ること在于らん。」幾ぞ曾て是れ放過し來らん、妨げず奇特なることを。這裏に到つて、雪竇什麼と爲てか道ふ、「孤峰頂上草裏に坐す」と。又一喝を下す、且く道へ、什麼の處にか落在す、更に參せよ三十年。

第五則

垂示に云く、大凡宗教を扶豎せんには、須らく是れ英靈の漢なるべし。人を殺すに眼を眩せざる底の手脚あつて、方に立地に成佛すべし。所以に照用同時、卷舒齊しく唱へ、理事不二、權實並べ行ふ。

一著を放過して、第二義門を建立す。直下に葛藤を截斷せば、後學初機は、湊泊を爲し難し。昨日も恁麼、事已むことを得ず、今日も又恁麼、罪過彌天。若し是れ明眼の漢ならば、一點も他を護すること得ず。其れ或は未だ然らずんば、虎口裏に身を横へ、喪身失命を免れず。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、雪峰衆に示して云く、「一盲衆盲を引く、分外と爲さず。」

盡大地撮し來るに、粟米粒の大きさの如し。(是れ什麼の手段ぞ、山僧從來鬼眼睛を弄せず。)面前に抛向す。(只だ恐らくは抛不下ならんことを、什麼の伎倆か有らん。)漆桶不會。(勢に倚つて人を欺く、自領出去、大衆を護すること莫くんば好し。)鼓を打つて普請して看よ。(瞎、鼓を打つことは三軍の爲なり。)

【評唱】長慶、雲門に問ふ、①「雪峰與麼に道ふ、還つて出頭不得の處有り麼。」門云く、「有り。」慶云く、「作麼生。」門云く、「總に野狐精の見解を作す可らず。」雪峰云く、「匹上足らず、匹下餘有り、我れ更に懶が與に葛藤を打せん。」拄杖を拈じて云く、「還つて雪峰を見る麼。咄。王令稍嚴なり、行市を擔奪することを許さず。」大滂の喆云く、「我れ更に懶諸人の與に、土上に泥を加へん。」拄杖を拈じて云く、「看よ看よ、雪峰諸人の面前に向つて

【本則】東嶺禪師云く、第五に雲門言句の根を爲すを明す、此の五六則は、一等に言句の根元爲りと雖も、本末無きに非ず、雪峰雲門師と爲り責と爲る至れり、盡くせり、白隱先師曰く、圓悟若し左手を握りて下語せば大展三拜せん、若し又右手を握りて下語せば半文錢に直らずと、此の語以て規範と爲す可し。

①雪峰義存禪師は、徳山宣鑑の法嗣にして、雲門文偃の師なり。

②唐話纂要に、匹を比に作る、二字共に唇音なれば匹は比の轉音ならん、唐音匹はビ、比



放扇することを。咄、什麼と爲てか屎臭も也た知らざる。雪峰衆に示して云く、「盡大地撮し來るに、粟米粒の大きさの如し。」古人接物利生、奇特の處有り、只だ是れ妨げず辛勤なり、三たび投子に上り九たび洞山に到る。漆桶木杓を置いて、到る處に飯頭と作る、也た只だ此の事を透脱せんが爲なり。洞山に至つて飯頭と作るに及んで、一日洞山、雪峰に問ふ、「什麼をか作す。」峰云く、「米を淘る。」山云く、「沙を淘つて米を去るか、米を淘つて沙を去るか。」峰云く、「沙米一齊に去る。」山云く、「大衆箇の什麼をか喫せん。」峰便ち盆を覆す、山云く、「子が縁徳山に在り」と云つて、指して之れに見えしむ。纔に到つて便ち問ふ、「從上宗乘中の事、學人還つて分有りや也た無しや。」徳山打すること一棒して云く、「什麼と道ふ。」此れに因つて省有り、後鰲山に在つて雪に阻てらる、巖頭に謂つて云く、「我れ當時徳山の棒下に在つて、桶底の脱するが如くに相似たり。」巖頭喝して云く、「個道ふことを見すや、門より入る者は、是れ家珍にあらずと、須らく是れ自己智中より流出して、蓋天蓋地にして、方に少分の相應有るべし。」雪峰忽然として大悟す。禮拜して云く、「師兄、今日始めて是れ鰲山成道」と。如今の人口管に道ふ、「古人特地に做作して、後人をして規矩に依らしむ」と。若し恁麼ならば、正に是れ他の古人を謗す、之れを出佛身血と謂ふ。古人は如今の人の苟且なるに似ず、豈に一言半句を以て、以て平生に當てんや。若し宗教を扶堅し佛の壽命を續ぐことは、一言半句を吐くに、自然に天下の人の舌頭を坐斷する所以なり、個が意路を著け、

情解を作し、道理に渉る處無し。看よ他の此れ箇の示衆、蓋し他曾て作家に見え來るが爲に、所以に作家の鉗鎚有り。凡そ一言半句を出すも、是れ心機意識思量の鬼窟裏に活計を作さず、直に是れ超群拔萃、古今を坐斷して、擬議を容れず、他家の用處、盡く是れ此の如し。一日衆に示して云く、「南山に一條の鰲鼻蛇有り、汝等諸人、切に須らく好く看取すべし。」時に稜道者衆を出でて云く、「恁麼ならば則ち今日堂中、大いに人有つて喪身失命し去ることあらん。」又云く、「盡大地是れ沙門の一隻眼、汝等諸人、什麼の處に向つてか扇せん。」又云く、「望州亭に汝と相見了也。」烏石嶺に汝と相見了也、僧堂前に汝と相見了也。」時に保福、鵝湖に問ふ、「僧堂前は即ち且く置く、如何なるか是れ望州亭、烏石嶺相見の處。」鵝湖 驟歩して方丈に歸る。他常に這般の語を舉げて衆に示す、只だ道ふが如きんば、盡大地撮し來るに、粟米粒の大きさの如しと。這箇の時節、且く道へ、情識を以て卜度し得てん麼。須らく是れ羅籠を打破して、得失是非、一時に放下して、洒洒落落たらば、自然に他の 罔續を透得して、方に他の用處を見るべし。且く道へ、雪峰の意什麼の處にか在る、人多く情解を作して道ふ、「心は是れ萬法の主、盡大地一時に我が手裏に在り」と、且喜すらくは沒交涉。這裏に到つて、須らく是れ箇の眞實の漢にして、聊か擧著するを聞いて、徹骨

- ①望州亭は雪峰に在り、二十三日の一なり。
- ②福州烏石山浙江に有り。
- ③驟は韻會に、行くこと疾きななり。
- ④罔續は「わな」と譯す、事苑に云く、罔は風木なり、續は盡なり、「まげもの」也。
- ⑤俗呼小録に云く、人の類敗及び身病推廢なる者を郎當と云ふとあり、「おちぶれ、」又は「よぼける」と譯す。

徹髓、見得透して、且つ情思意想に落ちざるべし。若し是れ箇の本色行脚の衲子ならば、他の恁麼に已に是れ 郎當して人の爲にし了ることを見ん。看よ他の雪竇の頌に云く。

【頌】牛頭没し。閃電に相似たり、蹉過了也。馬頭回る。擊石火の如し。曹溪鏡裏塵埃を絶す。鏡を打破し來れ。彌伽が與に相見せん、須らく是れ打破して始めて得べし。鼓を打つて看せしめ來るに君見す。彌伽が眼睛を刺破す、輕易すること莫くんば好し、漆桶什麼の見難き處か有らん。百花春到つて誰が爲めにか開く。法相饒さす、一場の狼藉、葛藤窟裏より出頭し來る。

【評唱】雪竇自然に他の古人を見て、只だ他の命脈の上に去つて一箇して、他の與に頌出することを消す。牛頭没し馬頭回ると、且く道へ、箇の什麼をか説く、見得透する底は、早朝に粥を喫し、齋時に飯を喫するが如くに相似たり。只だ是れ尋常なり、雪竇の慈悲、當頭に一鏡に擊碎し、一句に截斷す、只だ是れ妨げず孤峻なることを。擊石火の如く、閃電光に似たり、鋒鏘を露さす、彌伽が湊泊の處無し。且く道へ、意根下に向つて、摸索し得てん麼。此の兩句、一時に道ひ盡し了れり。雪竇第三の句に、卻つて一線道を通じて、略些の風規を露す、早く是れ落草、第四の句、直下に更に是れ落草、若し言上に向つて言を生じ、句上に句を生じ、意上に意を生じ、解を作し會を作さば、唯だ老僧を帶累するのみにあらず、亦乃ち雪竇に辜負せん。古人の句は此の如しと雖も、意は此の如くならず、

①間に髪を容れざるなり、牛馬に用無し。あちらが、引つこむかと思へば、こちらが出るなり。

終に道理を作して人を繫縛せず。曹溪鏡裏塵埃を絶す、多少の人道ふ、靜心使ち是れ鏡と。且喜すらくは沒交渉、只管に計較道理を作さば、什麼の了期か有らん。這箇は是れ本分の説話、山僧敢て本分に依らざるにあらず、牛頭没し、馬頭回る、雪竇分明に説き了れり、自らは是れ人見す。所以に雪竇此の如く郎當して頌して道ふ、鼓を打つて看せしめ來るに君見す」と。癡人還つて見る麼、更に彌伽に向つて道ふ、「百花春至つて誰が爲にか開く」と。謂つ可し戸牖を豁開して、彌伽が與に一時に八字に打開し了れり。と。春の來るに及んで、幽谷野澗、乃至人無き處、百花競ひ發く。彌伽且く道へ、更に誰が爲にか開く。

第六則

【本則】舉す、雲門垂語して曰く、「十五日已前は汝に問はず、(半は河内半は河北、這裏舊曆日を收めず。)十五日已後、一句を道ひ將ち來れ。」(免れず朝より暮に至ることを。切に忌む道著することを。來日はれ十六、日月流るゝが如し。)自ら代つて云く、「日は是れ好日。」(收、鰈跳れども斗を出でず、誰が家にか明月清風無からん。還つて知るや、海神貴きことを知りて價を知らず。)

【本則】東嶺禪師云く、第六は則ち雲峰、雲門、師と爲り資と爲るの妙を明す、此の頌先師特に評語を加ふ、初めの二句は圓融無碍自在爲るの意を論ず、次の六字は設ひ此の時節に至るも、祖師門下に於て、便ち是れ重々の繫縛、終りの二句は天下の宗匠皆此の無一物を

【評唱】雲門初め睦州に參す、州旋機電轉して、直に是れ湊泊し難し。

尋常人を接するに、纔かに門に跨れば、便ち拘住して曰く、「道へ道へ。」擬議不來なれば、便ち推し出して曰く、「秦時の轆轤鐵」と。雲門凡そ去つて見ゆ、第三回に至つて、纔かに門を敲く。州云く、「誰ぞ。」門云く、「文僂。」纔かに門を開く、便ち跳り入る、州掬住して云く、「道へ道へ。」門擬議す、便ち推し出さる。門の一足門闔の内在り、州に急に門を合せられて、雲門の脚を撻折す。門忍痛して聲を作して、忽然として大悟す。後來語脈人を接するに、一摸に睦州を脱出す。後陳操尙書が宅に於て住すること三年、睦州指して雪峰の處に往いて去らしむ。彼に至つて衆を出でて便ち問ふ、「如何なるか是れ佛。」峰云く、「寐語すること莫れ。」雲門便ち禮拜す。一住三年、雪峰一日問ふ、「子が見處如何。」門云く、「某甲が見處、從上の諸聖と、一絲毫許りも移易せず。」靈樹二十年、首座を請せず、常に云く、「我が首座生せり。」又云く、「我が首座 牧牛せり。」復云く、「我が首座行脚せり。」忽ち一日鐘を撞かして、三門前に首座を接す、衆皆之れを訝る、雲門果して至る、便ち請じて首座寮に入つて包を解かしむ。靈樹人號して知聖禪師と曰ふ、過去未來の事預め皆知る。一日 廣主劉王

三二二

認めて宗旨と爲す、悲しむ可し笑ふ可し、末後の八字は是れ則ち雲門の妙處にして、他師の及ぶ可らざる大事のみ、雲門宗の大事最も五六兩則の中に在り。

① 雲門論は文僂、雪峰の法嗣にして、吾が宗五家中雲門宗の開祖なり。

② 不の字「きびしく云ふ」辭なり。

③ 方言に你が入頭の處無きを云ふ、所謂老古錘鈍うして了に讀ること無く、用ふる處無きなり、「もみきり」也。秦時は「久しい」也。

④ 摸は摸範なり、睦州の「我が首座を接す、衆皆之れを訝る」なり。

⑤ 靈樹如敏禪師は法を大安の明に嗣ぐ。

⑥ 牧牛は修行することなり。

⑦ 歷代世紀に南漢と號す、諱は隱姓は劉、後廣州に據るが故

將に兵を興さんとす、躬ら院に入つて、師に臧否を決せんことを請はんとす、靈樹已に先づ知つて、怡然として坐化す。廣主怒つて曰く、「和尚何の時か疾を得たる。」侍者對へて曰く、「師曾て疾有らず、適に一合子を封じて、王の來らんを俟つて之を呈せしむ。」廣主合を開いて一帖子を得るに云く、「人天の眼目、堂中の首座」と。廣主旨を悟つて遂に兵を寢む。雲門を請じて、出世して靈樹に住せしむ。後來方に雲門に住す、師開堂說法、鞠常侍と云ふもの有つて問を致す、「靈樹の果子熟するや也た未しや。」門云く、「什麼の年中にか生と道ふ。」信を得たる。「復劉王の昔賣香の客と爲る等の因縁を引く、劉王後に靈樹に諡して知聖禪師と爲す。靈樹は生生通を失はず、雲門は凡そ三生王と爲る、所以に通を失す。一日劉王師を詔して、内に入れて夏を過さしむ、數人の尊宿と共に、皆内人の問訊を受けて說法す。唯だ師一人言はず、亦人の親近する無し。一の直殿使有つて、一偈を書して、碧玉殿上に貼在して云く、「大智の修行始めて是れ禪、禪門は黙に宜しく喧に宜しからず、萬般の巧說争か實に如かん。」雲門の總に言はざるに輪卻す、雲門尋常愛して三字の禪を説く、顧、鑿、咳、又一字の禪を説く。僧問ふ、「父を殺し母を殺しては佛前に懺悔す、佛を殺し祖を殺しては、什麼の處に向つてか懺悔せん。」門云く、「露。」又問ふ、「如何なるか是れ正法眼藏。」門云く、「普。」直に是れ擬議を容れず、平鋪處に到つて、又卻つて人を罵

に廣主と曰ふ。

① 正約に合子は物を盛る器、又盒にも作る。

② 信は信息、即ち「たより」なり。

③ 客は商客、たびあきうどなり。

④ 内は禁裏なり。

⑤ 劉主の殿の名なり。

る、若し一句語を下せば、鐵櫃子の如くに相似たり。後四哲を出す、乃ち洞山の初、智門の寛、  
 德山の密、香林の遠、皆大宗師爲り。香林十八年侍者と爲る、凡そ他を接するに、只だ遠侍者と  
 叫ぶ、遠云、「諾。門云く、是れ什麼ぞ。」此の如きこと十八年。一日方に悟る、門云く、「我れ今より  
 後更に汝を叫ばじ。」雲門尋常人を接するに、多く睦州の手段を用ふ、只だ是れ湊泊を爲し難し、釘を  
 抽き楔を抜く底の鉗鏈有り、雲竇道く、「我れは愛す韶陽新定の機、一生人の與に釘を抽き楔を抜くし  
 と。箇の門頭を垂れて衆に示して云く、「十五日已前は汝に問はず、十五日  
 已後一句を道將し來れ。」千差を坐斷して凡聖を通せず、自ら代つて云く、  
 「日日是れ好日。」十五日已前、この語已に千差を坐斷す、十五日已後、這  
 の語也た千差を坐斷す。是れ他明日は是れ十六と道はず、後人只管に語に  
 随つて解を生ず、什麼の交渉か有らん。他の雲門箇の宗風を立す、須らく是れ箇の爲人の處有るべし。  
 垂語了つて、卻つて自ら代つて云く、「日日是れ好日」と。此の語古今を通貫して、從前至後、一時  
 に坐斷す。山僧此の如きの說話、也た是れ語に隨つて解を生ず。他殺せんより自殺せんには如かず、  
 繩に道理を作さば、坑に墮ち墮に落つ。雲門一句の中に、三句俱に備る、蓋し是れ他家の宗旨此の如  
 し。一句語を垂るゝに、須らく宗に歸せんことを要すべし。若し此の如くならずんば、只だ是れ杜撰、  
 此の事許多の論說無し。而も未透の者は、卻つて此の如くならんことを要す。若し透得せば、便ち古

①襄州洞山守初宗禪師。

②睦州智門師寬禪師。

③益州青城香林院激遠禪師。

人の意旨を見ん、雪竇の葛藤を打するを看取せよ。  
 【頌】一を去卻し、(七穿八穴、什麼の處に向つてか去る。一著を放過す。七を拈得す。(拈不出、卻  
 つて放過せず。)上下四維等匹無し。(何似生、上は是れ天、下は是れ地、東南西北と四維と、什麼の  
 等匹か有らん。爭奈せん拄杖我が手裏に在ることを。)徐に行いて踏斷す流水の聲。(脚跟下を問ふこ  
 と莫れ、體究を爲し難し、葛藤窟裏に打し去り了れり。)縦に觀て寫し出す飛禽の跡。(眼裏亦此の  
 消息無し、野狐精の見解、依前として只だ舊窠窟裏に在り。)草茸茸。(腦後に箭を抜く、是れ什麼の  
 消息ぞ、平實の處に墮在す。)煙霧霧。(未だ這の窠窟を出でず、足下雲生す。)空生巖畔花狼藉。(什麼  
 の處にか在る、不啻喙の漢、勘破了也。)彈指して悲むに堪へたり舜若多。(四方八面盡法界、舜若多  
 の鼻孔裏に向つて一句を道ひ將ち來れ、什麼の處にか在る。)動著すること莫れ。(前言何にか在る、  
 動著する時如何。)動著せば三十棒。(自領出去、便ち打たん。)

【評唱】雪竇の頌古、偏に能く此の如し、當頭に金剛王寶劍を以て、揮ふこと一了了つて、然して後  
 略些の風規を露す。然も此の如しと雖も、畢竟二解有ること無し、一を去卻し、七を拈得す。人多く  
 算數の會を作して道ふ、一を去卻するは、是れ十五日已前の事」と。雪竇慈頭に兩句の言語を下し印  
 破し了つて、卻つて露出して人をして見せしむ。一を去卻し、七を拈得す、切に思む言句の中に向つ  
 て活計を作すことを。何が故ぞ、胡餅什麼の汁か有らん、人多く意識の中に落在す、須らく是れ語句

未生已前に向つて、會取して始めて得べし、大用現前、自然に見得せん。所以に釋迦老子、成道の後、摩竭提國に於て、三七日中、是の如きの事を思惟す。諸法寂滅の相、言を以て宣ふ可らず、我れ寧ろ説法せず、疾かに涅槃に入らんと。這裏に到つて、箇の開口の處を覓むるに得ず、方便力を以ての故に、五比丘の爲に説き已る。三百六十會に至つて、一代時教を説く、只だ是れ方便なり。所以に珍御の服を脱し、弊垢の衣を着け、已むことを得ずして第二義門の中、淺近の處に向つて、諸子を誘引す。若し他をして向上に全提せしめば、盡大地一箇半箇無けん。且く道へ、作廢生か是れ第一句、這裏に到つて、雪竇些の意を露して、人をして見せしむ。彌但だ上諸佛有ることを見ず、下衆生有ることを見ず、外山河大地有ることを見ず、内見聞覺知有ることを見ず、大死底の人の卻つて活くるが如くに相似て、長短好惡、打成一片にして、一々拈じ來るに、更に異見無し。然して後應用其の宜しきを失はず、方に他の一を去卻し七を拈得す、上下四維等匹無しと道ふことを見ん。若し此の句に於て透得せば、直に得たり上下四維等匹有る無きことを。森羅萬象、草芥人畜、著著全く自己の家風を彰す。所以に道ふ、萬象の中獨露身、惟だ人自ら肯ふて乃ち方に親し。昔年謬つて途中に向つて覓む、今日看來れば火裏の冰、天上天下惟我獨尊、人多く末を逐ふて、其の本を求めず、先本正しきを得れば、自然に風行けば草偃し、水到れば渠成る。徐に行いて踏斷す流水の聲、徐徐として行動する

①佛成道の後、初めて鹿苑に於て、四諦の法を説いて憺陳如等を度す。  
②五時八教。

時、浩浩たる流水の聲も、也た應に踏斷すべし。縦に觀て寫し出す飛禽の跡、目を縦にして一觀するに、直饒ひ是れ飛禽の跡も、亦寫し出すが如くに相似たり。這裏に到つて、鏝湯爐炭も吹いて滅せしめ、劍樹刀山も喝して便ち摧く、難事と爲さず。雪竇此に到つて慈悲の故に、人の無事界中に坐せんことを恐れて、復た道ふ、「草茸茸、煙霧霧。」蓋覆卻する所以なり。直に得たり草茸茸、煙霧霧たることを。且く道へ、是れ什麼人の境界ぞ、喚んで日日は是れ好日と作り得てん麼、且喜すらくは沒交涉。直に得たり徐に行いて踏斷す流水の聲も也た不是、縦に觀て寫し出す飛禽の跡も也た不是、草茸茸も也た不是、煙霧霧も也た不是、直饒ひ總に不恁麼なるも、正に是れ空生巖畔花狼藉、也た須らく是れ那邊を轉過して始めて得べし。豈見すや須菩提巖中に宴坐す、諸天花を雨らして讚嘆す。尊者曰く、「空中に花を雨らして讚嘆するは、復た是れ何人ぞ。」天曰く、「我れは是れ天帝釋。」尊者曰く、「汝何をか讚嘆す。」天曰く、「我れ尊者の善く般若波羅蜜多を説き玉ふを重んず。」尊者曰く、「我れ般若に於て未だ嘗て一字をも説かず、汝云何が讚嘆せん。」天曰く、「尊者無説、我れ乃ち無聞、無説無聞、是れ眞の般若」と云つて、又復た地を動して花を雨らす。雪竇亦曾て頌有り、云く、「雨過ぎ雲凝つて曉半ばは開く、數峰畫くが如く碧崔嵬、空生解せず巖中に坐することを、天花動地を惹き得來る、天帝既に地を動して花を雨らす、這裏に到つて、更に那裏にか藏れ去らん。」雪竇、又道く、「我れ恐らくは之を逃るれども逃るゝこと得ず、大方の外皆充塞す、忙忙擾擾知んぬ何ぞ窮らん、八面の清風衣袂を惹く」と。

直に淨裸赤洒洒として、都て纖毫の過患無きことを得るも、也た未だ極則と爲さず。且く畢竟如何が即ち是ならん、下文を看取せよ。云く、「彈指して悲むに堪へたり舜若多。」梵語に舜若多、此には虚空神と云ふ、虚空を以て體と爲し、身無うして觸を覺す、佛光の照すを得て、方に身を現得す。爾若し舜若多神に似たることを得ん時、雪竇正に好し彈指して悲歎するに。又云く、「動著すること莫れ、動著する時如何、白日青天、眼を開いて瞌睡す。」

第七則

垂示に云く 聲前の一句、千聖不傳。未だ曾て親覲せざれば、大千を隔つるが如し。設使聲前に向つて辨得して、天下人の舌頭を截斷するも、亦未だ是れ性燥の漢にあらず。所以に道ふ、天も蓋ふこと能はず、地も載すること能はず、虚空も容るゝこと能はず、日月も照すること能はず、無佛の處獨り尊と稱して、始めて些子に較れり。其れ或は未だ然らずんば、一毫頭上に於て透得して、大光明を放つて、七縱八橫、法に於て自在自由ならば、手に信せて拈じ來るに、不是あること無し。且く道へ、箇の什麼を得てか、此の如く奇特なる。復云く、大衆會すや、從前の汗馬人の識る無し、只重ねて蓋代の功を論せんことを要す。即今の事は且く致く、雪竇の公案、又作麼生。下文を看取せよ。

【本則】 擧す、僧、法眼に問ふ、(什麼と道ふぞ、擔枷過狀。)「慧超、和尚に咨す如何なるか是れ

佛。(什麼と道ふぞ、眼睛突出す。) 法眼云く、「汝は是れ慧超。」(模に依つて脱出す、鐵餞、就身打劫。)

【評唱】 法眼禪師、啐啄同時底の機有り、啐啄同時底の用を具して、方に能く此の如く答話す。所謂聲を越え色を越えて、大自在を得たり。縱轉時に臨み、殺活我れに在り、妨げず奇特なり。然れども此れ箇の公案、諸方に商量する者多く、情解の會を作す者少からず。知らず古人凡そ一言半句を垂示すること、擊石火の如く、閃電光に似て、直下に一條の正路を撥開することを。後人只管に言句上に去つて、解會を作して道く、「慧超は便ち是れ佛、所以に法眼慧慶に答ふしと。有る者は道ふ、大いに牛に騎つて牛を覓むるに似たり。有る者は道ふ、問處便ち是と、什麼の交渉か有らん。若し慧慶に會し去らば、惟だ自己に辜負するのみにあらず、亦乃ち深く古人を屈せん。若し他の全機を見んと要せば、是れ一棒に打せども頭を回さざる底の漢、牙劍樹の如く、口血盆に似て、言外に向つて歸を知つて、方に少分の相應有るを除非す。若し一々情解を作さば、盡大地是れ胡種族を滅する底の漢ならん。只だ超禪客此に於て悟り去るが如きんば、也た是れ他尋常帶參究す。所以に一言の下に桶底の脱するが如くに相似たり。只だ 則監院の如きは、法眼の會中に

【本則】 東嶺禪師云く、第七に爲人方便を明す、法眼宗の臨機應變、敢て別人の企及する處の事に非ず、法眼はもと覺峰より出づ、此の則最も本と爲すか。  
①法眼禪師は文登、地藏、珠環の法嗣にして、五百人の善知識と稱せられ、禪宗五家中法眼宗の開祖なり。  
②風は寃風「むじつ」なり。  
③會元に金陵報恩院の支則禪師は、滑州衛南の人なり。

在つて、也た曾て參請入室せず。一日法眼問うて云く、「則監院何ぞ來り入室せざる。」則云く、「和尚豈に知らずや、某甲青林の處に於て、箇の入頭有り。」法眼云く、「汝試みに我が爲に擧せよ看ん。」則ち云く、「某甲問ふ、如何なるか是れ佛。」林云く、「丙丁童子來求火。」法眼云く、「好語、恐らくは偏錯つて會せんことを、更に説く可し看ん。」則云く、「丙丁は火に屬す、火を以て火を求む、某甲が如きは是れ佛、更に去つて佛を覓む。」法眼云く、「監院果然錯つて會し了れり。」則ち不憤して、便ち起單して江を渡り去る。

① 不憤は只だ憤る意なり、不の字を付するは「つよく」云ひしなり、俗語に「つよく熱するを好不熱、つよくひゆるを好不冷」と云ふ。

② 江は揚子江なり。

③ 臨濟大師人を接する手段。

④ 會元第十に、天台山の德韶國師は處州龍泉陳氏の子なり云云。

⑤ 疎山は江西に在り、匡仁禪師なり。

法眼云く、「此の人若し回らば救ふ可し、回らずんば救ふことを得じ。」則中路に到つて、自ら付つて云く、「他は是れ五百人の善知識、豈に我れを賺す可けん耶。」遂に回つて再び參す。法眼云く、「爾但だ我れに問へ、我れ爾が爲に答へん。」則便ち問ふ、「如何なるか是れ佛。」法眼云く、「丙丁童子來求火。」則言下に於て大悟す。如今有る者は只管に瞠眼して解會を作す。所謂彼れ既に瘡無し、之を傷ること勿れ。這般の公案、久參の者は、一擧すれば便ち落處を知る、法眼下に之を箭鋒相拄ふと謂ふ、更に五位君臣、四料簡を用ひず、直に箭鋒相拄ふことを論す。是れ他家風此の如し、一句下に便ち見ば、當陽に便ち透らん。若し句下に向つて尋思せば、卒に摸索不着ならん。法眼出世して、五百の衆有り、是の時佛法大いに興る。時に韶國

師、久しく疎山に依る、自ら謂へり旨を得と。乃ち疎山平生の文字頂相を集めて、衆を領じて行脚す。法眼の會下に至つて、他亦去つて入室せず、只だ參徒をして衆に隨つて入室せしむ。一日法眼陸座す、僧有り問ふ、「如何なるか是れ曹源の一滴水。」法眼云く、「是れ曹源の一滴水。」其の僧惘然として退く。韶衆に在つて之を聞き、忽然として大悟す。後出世して法眼に承嗣す、頌有り、呈して云く、「通玄峰頂、是れ人間にあらず、心外無法、滿目青山。」法眼印して云く、「只だ這一頌、吾宗を繼ぐ可し、子後に王侯の敬重する有らん、吾汝に如かず」と。看よ他の古人、恁麼に悟り去ることを。是れ什麼の道理ぞ、只だ山僧をして説かしむ可らず、須らく是れ自己、二六時中精神を打辨す。恁麼に他と承當するに似たらば、他日十字街頭に向つて、垂手爲人せんこと、也た難事と爲す。所以に僧、法眼に問ふ、「如何なるか是れ佛。」法眼云く、「汝は是れ慧超」と、甚の相辜負する處か有らん。見すや雲門道く、「擧するに顧みざれば即ち差互す、思量せんと擬せば何の劫にか悟らん」と。雪竇後面に頌し得て、妨げず顯赫なることを。試みに擧す看よ。

【頌】 江國の春風吹き起たす。(盡大地那裏よりか這の消息を得たる、文彩已に彰る。) 鷓鴣啼いて深花裏に在り。(喃喃たること何ぞ用ひん、又風に別調の中に吹かる。豈に恁麼の事有らんや。) 三級浪

高うして魚龍と化す。(這の一路を通ず、大衆を護すること莫くんば好し、龍頭に踏著す。)癡人猶は辱む夜塘の水。(扶難摸壁、門を挨し戸に傍ふ、衲僧什麼の用處か有らん、株を守りて兔を待つ。)

【評唱】雪竇は是れ作家、古人の咬み難く嚼み難き、透り難く見難き、節角詭訛の處に於て、頌出して人をして見せしむ、妨げず奇特なることを。雪竇法眼の關候子を識得し、又慧超の落處を知る、更に後人の法眼の言句下に向つて、錯つて解會を作さんことを恐る。所以に頌出す、這の僧此の如く問ひ、法眼是の如く答ふ。便ち是れ江國の春風吹き起たす、鷓鴣啼いて深花裏に在り。此の兩句只だ是れ一句なり。且く道へ、雪竇の意什麼の處にか在る、江西江南、多く兩般の解會を作して道ふ、「江國の春風吹き起たすとは、用て汝は是れ慧超と云ふを頌す。只だ這箇の消息、直饒江國の春風も也た吹き起たす、鷓鴣啼いて深花裏に在りとは、用て諸方這の話を商量して浩浩地なること、鷓鴣の啼いて深花裏に在るに似て相似たることを頌すと、什麼の交渉か有らん。殊に知らず、雪竇の這の兩句、只だ是れ一句なることを。縫無く罅無きことを得んと要せば、明明に汝に向つて道ふ、「言も也た端、語も也た端、蓋天蓋地、他問ふ如何なるか是れ佛。」法眼云く、「汝は是れ慧超。」雪竇道く、「江國の春風吹き起たす、鷓鴣啼いて深花裏に在り。」這裏に向つて薦得し去らば、以て丹青に獨歩す可し。爾若し情解を作さば、三生六十劫、雪竇の第三第四の句、忒煞だ傷慈なり、人の爲に一時に説破す。超禪師當下に大悟の處、三級浪高うして魚龍と化するが如し、癡人猶

① 傷慈は、慈悲過ぎて、慈悲にきずか付くの義なり。

は辱む夜塘の水。禹門三級の浪、孟津は即ち是れ龍門なり、禹帝鑿つて三級し爲す。今三月三、桃花開く時、天地の感する所にして、魚有り龍門を透得すれば、頭上に角を生じ、鬚鬣尾を昂げて、雲を撃らうて去る、跳り得ざる者は、點頭して回る。癡人言下に向つて咬嚼するは、夜塘の水を辱んで魚を求むるに似て相似たり。殊に知らず、魚已に化して龍と爲ることを。端師翁頌有り、云く「一文の大光錢、箇の油糞を買ひ得たり、肚裏に喫向し了つて、當下に飢を聞かず。此の頌極めて好し、只だ是れ太だ拙なり。雪竇頌し得て極めて巧なり、鋒を傷り手を犯さず。舊時慶藏主愛して人に問ふ、「如何なるか是れ三級浪高うして魚龍と化す」と。我れは也た必とせざることあり、我れ且く爾に問はん、「化して龍と作り去る、即今什麼の處にか在る。」

② 大光年中の製故に云ふ。

第八則

垂示に云く、會するときは途申受用。龍の水を得るが如く、虎の山に靠るに似たり。會せざるときんば世諦流布、羝羊藩に觸れ、株を守つて兔を待つ。有る時の一句は、金剛王寶劍の如く、有る時の一句は、天下の人の舌頭を坐斷し、有る時の一句は、隨波逐浪。若し也た途中受用ならば、知音に遇うて機宜を分ち休咎を識り、相共に證明せん。若し也た世諦流布ならば、一隻眼を具して、以て十方を



坐斷して、壁立千仞なるべし。所以に道ふ、大用現前、軌則を存せず、有る時は一莖草を將て、丈六の金身と作して用ひ、有る時は丈六の金身を將て、一莖草と作して用ふ。且く道へ、什麼の道理にか憑る。還つて委悉すや、試みに擧す看よ。

【本則】擧す、翠巖夏末に衆に示して云く、「一夏以來、兄弟の爲めに說話す。(口を開かば焉ぞ恁麼なることを知らん。)看よ翠巖が眉毛在りや。」(只だ眼睛も也た地に落つることを贏ち得たり。鼻孔に和して也た失し了れり。地獄に入ること箭の射るが如し。)保福云く、「賊と作る人心虚なり。」(灼然、是れ賊賊を識る。)長慶云く、「生せり。」(舌頭地に落つ、錯を將て錯に就く、果然。)雲門云く、「關。」(什麼の處にか走在し去る、天下の衲僧跳不出、敗也。)

【評唱】古人晨參暮請有り、翠巖夏末に至つて、卻つて恁麼に衆に示す。然れども妨げず孤峻、妨げず天を驚し地を動すことを。且く道へ、「大藏教、五千四十八卷、免れず心と説き性と説き、頓と説き漸と説くことを。還つて這箇の消息有り麼、一等にはれ恁麼の時節、翠巖中に就いて奇特なり、看よ他の恁麼に道ふことを。且く道へ、他の意什麼の處にか落在す。古人一鈎を垂るるに、終に虚に設けず、須らく是れ箇の道理の人の爲にする有るべし。

【本則】東嶺禪師云く、第八に宗師頭を衆め互に祖庭春色を成すを明す、翠巖本と成り保福長慶左右に扶持し、雲門結成して一宗の秘旨奥義を留示す、是の故に大應の大燈に於ける大燈の闕山に於ける、此の則を以て宗旨を定む。  
① 明州翠巖の令儀禪師は、保福從展、長慶惠種、雲門文偃と共に雪峰義存の法嗣なり。

人多く錯り會して道く、「白日青天、無向當の話を説いて、無事に事を生ず、夏末に先づ自ら過を説き、先づ自ら點檢し、別人の他を點檢せんことを免れ得ることを。」且喜すらくは沒交渉。這般の見解、之を胡種族を滅すと謂ふ。歷代の宗師出世、若し人に垂示せずんば、都て利益無し。箇の什麼をか圖らん、這裏に到つて、見得透せば、方に古人耕夫の牛を驅り、飢人の食を奪ふ手段有ることを。如上の人間著すれば、便ち言句下に向つて咬嚼し、眉毛上に活計を作す。看よ他の屋裏の人、自然に他の行履の處を知つて、千變萬化、節角磬詛、著著出身の路有り、便ち能く此の如く他と酬唱することを。此の語若し奇特無くんば、雲門・保福・長慶三人、嘔々地に他と酬唱して什麼か作ん。保福云く、「賊と作る人心虚なり。」只だ此の語に因つて、適來の許多の情解を説くことを惹き得たり。且く道へ、保福の意作麼生、切に忌む句下に向つて他の古人を覓むることを。爾若し情を生じ念を起さば、則ち爾が眼睛を換へん。殊に知らず、保福一轉語を下して、翠巖の脚跟を截斷することを。  
① 楞伽云く、來由没く、向ふ所無き話なり、「韓子に、玉應當無し、」注に「底無きなり。」  
② 「理に當らぬ。」  
③ 睡々は「わちや、くちや」と譯す。犬の多く集りて、くいなふ也。  
④ 虚は、虚怯なり、「びくびく」、  
⑤ 非ず、慢世恒言に言く、「古へより道ふ、賊人心虚なり」と、又西遊記に「心虚し膽戰く、」  
⑥ 「心がおろすになる」意なり。

長慶云く、「生也。」人多く道ふ、長慶翠巖の脚跟に隨つて轉す、所以に生也と道ふ、且得沒交渉。知らず長慶自ら他の見解を出して生也と道ふことを。各出身の處有り、我れ且く爾に問はん、「是れ什麼の處か是れ生處。」一に作家面前に、金剛王寶劍を、直下に即ち用ふるに似たり。若し能く常流の見

解を打破し、得失是非を截斷せば、方に長慶他と酬唱する處を見ん。雲門云く、「關。」妨げず奇特なることを、只だ是れ參じ難し。雲門大師、多く一字の禪を以て人に示す、一字の中と雖も、須らく三句を具すべし。看よ他の古人機に臨んで酬唱することを、自然に今時の人と迥かに別なり。此れ乃ち句を下す底の様子なり、他此の如く道ふと雖も、意決して那裏に在らず。既に那裏に在らず、且く道へ、什麼の處にか在る、也た須らく子細に自ら參じて始めて得べし。若し是れ明眼の人ならば、天を照し地を照す底の手脚有つて、直下に八面玲瓏たらん。雪竇他の一箇の關の字の爲に、他の三箇を和して、穿つて一串と作して頌出す。

【頌】翠巖徒に示す。(這の老賊、人家の男女を教壞す。)千古對無し。(千箇萬箇、也た一箇半箇有り、分一節。)關字相酬ゆ。(道ふことを信せずや、妨げず奇特なることを、若し是れ慈愍の人ならば方に慈愍に道ふことを解せん。)失錢遭罪。(氣を飲み聲を吞む、雪竇も也た少からず、聲に和して便ち打たん。)潦倒たる保福。(同行道伴、猶ほ這の去就を作す、兩箇三箇。)抑揚得難し。(放行把住、誰か是れ同生同死、他を誘ふること莫くんば好し、且喜すらくは沒交涉。)嚙々たる翠巖。(這の野狐精、口を合取せば好し。)分明に是れ賊。(道著するも也た妨げず、捉敗つた也。)白圭玷無し。(還つて辨得するや、天下の人價を知らず。)誰れか眞假を辨せん。(多くは只だ是れ假、山僧從來眼無し、碧眼の胡僧。)長慶相詰んず。(是れ精精を識る、須らく是れ他始めて得べし、未だ一半を得ざること有り。)眉毛生せり。(什

麼の處にか在る、頂門上より脚眼下に至るまで一莖草も也た無し。)

【評唱】雪竇若し慈愍に頌出して人をして見せしめずんば、争か善知識と名くることを得ん。古人此の如し、一一皆是れ事已むことを獲す。蓋し後學他の言句に著して、轉た情解を生ずるは古人の意旨を見ざる以所の爲なり。如今忽ち箇の出で來つて、禪床を掀倒し、大衆を喝散する有らば、他を恠しむこと得じ。然も此の如くなりと雖も、也た須らく實に這の田地に到つて始めて得べし。雪竇道く、「千古對無し」と、他只だ道ふ「看よ翠巖が眉毛在り麼」と。什麼の奇特の處有つてか、便乃ち千古對無き、須らく知るべし古人一言半句を吐き出し來るも、是れ造次ならず。須らく是れ乾坤を定むる底の眼有つて始めて得べし。雪竇一言半句を著く、金剛王寶劔の如く、踞地獅子の如く、擊石火の如く、閃電光に似たり。若し是れ頂門に眼を具せずんば、争か能く他の古人の落處を見ん。這箇の示衆、直に得たり千古對無きことを、徳山の棒、臨濟の喝に過ぎたり。且く道へ、雪竇爲人の意、什麼の處にか在る。爾且く作麼生か會せん、他の千古對無しと道ふことを。關字相酬ゆ、失錢遭罪、這箇の意如何。直饒ひ是れ透關底の眼を具するも、這裏に到つて、也た須らく子細にして始めて得べし。且く道へ、是れ翠巖失錢遭罪か、是れ雪竇失錢遭罪か、是れ雲門失錢遭罪か、爾若し透得せば、爾に許す眼を具することを。潦倒たる保福、抑揚得難し。自己を抑するか、古人を揚するか。且く道へ、保福什麼の處

①潦倒は是れ反切語なり、潦倒の切は老なり「よぼくしたる保福」と云ふ義なり。

か是れ抑、什麼の處か是れ揚。嘯々たる翠巖、分明に是れ賊。且く道へ、他什麼をか偷み來つてか、雪竇卻つて道ふ是れ賊と。切に忌む他の語脈に隨つて轉却することを。這裏に到つて、須らく是れ自ら操持有つて始めて得べし。白圭玷無し、翠巖の大に白圭に似て相似て、更に些の瑕翳無きを頌す、誰か真假を辨せん。謂つべし人の辨得する有ること罕なりと。雪竇大才有り、所以に頭より尾に至つて、一串に穿卻して、末後卻つて方に道ふ、「長慶相諳んず、眉毛生也」と。且く道へ、生や什麼の處にか在る、急に眼を著けて看よ。

第九則

垂示に云く、明鏡臺に當つて、妍醜自ら辨す。鏡鄒手に在つて、殺活時に臨む。漢去り胡來り、胡來り漢去る。死中に活を得、活中に死を得。且く道へ、這裏に到つて又作麼生。若し透關底の眼、轉身の處無くんば、這裡に到つて灼然として奈何ともせず。且く道へ、如何なるか是れ透關底の眼、轉身の處、試みに舉す看よ。

【本則】 舉す、僧、趙州に問ふ、「如何なるか是れ趙州。」(河北河南、總に説不著、爛泥裏に刺有り。河南に在らすんば正に河北に在らん。) 州云く、「東門西門南門北門。」(開

○嘯々は喧しきなり。

【本則】

東嶺禪師云く、第九、五家の大事都て根本の大徹を以て、是れ基と爲すを明す、趙州平生尤も獎む可きの作用なり。

也、相罵ることは爾に饒す背を接げ、相唾することは爾に饒す水を潑げ、見成公案、還つて見るや、便ち打たん。

【評唱】 大凡そ參禪問道は、自己を明究す、切に忌む言句を揀擇すること。何が故ぞ、見すや、趙州舉して道く、「至道無難、唯嫌揀擇。」又見すや、雲門道く、「如今の禪和子、三箇五箇頭を聚めて口、喃喃地にして便ち道ふ、這箇は是れ上才の語句、那箇は是れ身處に就いて打出する語」と。知らず古人方便門の中、初機後學の、未だ心地を明めず、未だ本性を見ざるが爲に、已むことを得ずして、箇の方便の語句を立することを。祖師西來、單傳心印、直指人心、見性成佛の如きは、那裏にか此の如く葛藤せん。須らく是れ語言を斬斷し、格外に見諦して、透脱得し去るべし。謂つべし龍の水を得るが如く、虎の山に靠るに似たりと。久參の先德、見て未だ透らず、透つて未だ明めざる有り、之を請益と謂ふ。若し是れ見得透する請益は、却つて語句上に周旋して、凝滯有る無きことを要す。久參の請益は、賊の與に梯を過ぐ、其の實は此の事言句上に在らず。所以に雲門道く、「此の事若し言句上に在らば、三乘十二分教、豈是れ言句無からん

① 玉篇に呢喃は、小聲多言なり。

② 鄭云く、一には聲聞、二には緣覺、三には菩薩、乘は以て運載して無窮に進趣するなり。

③ 鄭云く、一には梵語修多羅、此に契經と云ふ、二には祇夜、應頌、三には私伽羅經、四には伽藍誦頌、五には尼陀羅因緣、六には優陀那自說、七には伊帝目多本事、八には闍陀伽本生、九には毘舍略方廣、十には阿浮達磨未有、十一に婆陀譬喻、十二に優婆塞論議。

④ 請益問、呈解問、察辨問、投機問、偏僻問、心行問、探拔問、不會問、擊擲問、置問、故問、借問、實問、假問、審

や、何ぞ達磨の西來を須ひん」と。汾陽の十八問の中に、此の問之を驗主問と謂ひ、亦之を採抜問と謂ふ。この僧箇の間頭を致す、也た妨げず奇特なり、若し是れ趙州にあらすんば、也た他に祇對し難し。この僧問ふ、「如何なるか是れ趙州。」趙州是れ本分の作家、便ち向つて道ふ、「東門西門南門北門」と。僧云く、「某甲這箇の趙州を問はず。州云く、「爾那箇の趙州を問ふ。」後人喚んで無事禪の人を賺すこと少からずと作す。何が故ぞ、他趙州を問ふ、州答へて云く、「東門西門南門北門」と。所以に只だ他の趙州を答ふと。爾若し恁麼に會せば、三家村裏の漢も、更に是れ佛法を會し去らん。只だ這れ便ち是れ佛法を破滅す、魚目を將て明珠に比況するが如し、似たることは則ち似たり、是なることは則ち是ならず。山僧道ふ、「河南に在らすんば、正に河北に在らん」と。且く道へ、是れ有事か、是れ無事か、也た須らく是れ子細にして始めて得べし。遠錄公云く、「最後の一句、始めて牢關に到る、指南の旨、言詮に在らず、十日一風、五日一雨、邦を安んじ業を樂み、腹を鼓して謳歌す、之を太平の時節と謂ひ、之を無事と謂ふ」と。是れ拍盲にして便ち無事と道ふにあらす、須らく是れ關楸子を透過し、荆棘林を出得して、淨裸々赤灑々たるべし。依前として平常の人に似たらば、爾に由つて有事も也た得たり、無事も也た得たり。七縱八橫、終に無を執し有を定めず、有般底の人

問、徵問、明問、驗主問。  
 堅牢の關鎖なり。  
 王充が論衡に曰く、「太平の瑞應、十日一風五日一雨、風條を鳴さず、雨壤を壞さず。」  
 拍は「手のひらにて、物をうつこと」なり、盲人は、獨行できぬゆゑ、人の肩に手のひらを、打ちかけてあるくを拍盲と云ふ、今は「たゞむかう見ず」と云ふ義なり。

は道く、「本來一星事無し、但だ只だ茶に遇うては茶を喫し、飯に遇うては飯を喫す」と。此れは是れ大妄語、之を未得謂得、未證謂證と謂ふ。元來會て參得透せず、人の心と説き性と説き、玄と説き妙と説くを見ては、便ち道ふ只だ是れ狂言なり、本來無事と。謂つ可し一盲衆盲を引くと。殊に知らず、祖師未だ來らざる時、那裏にか天を喚んで地と作し、山を喚んで水と作し來らん。什麼の爲にか祖師更に西來す。諸方陸堂入室、箇の什麼をか説く、盡く是れ情識の計較なり。若し是れ情識計較の情盡くれば、方に見得透せん。若し見得透せば、舊に依つて天は是れ天、地は是れ地、山は是れ山、水は是れ水。古人道く、「心は是れ根、法は是れ塵、兩種猶し鏡上の痕の如し。這箇の田地に到らば、自然に淨裸々赤灑々たらん。若し極則に理論せば、也た未だ是れ安穩の處にあらざること存らん。這裏に到つて、人多く錯り會して、無事界裏に打在して、佛も也た禮せず、香も也た焼かず、似たることは則ち也た似たり、爭奈せん脱體不是なることを。纔かに問著すれば、却つて是れ極則に相似たり、纔かに撻著すれば、七花八裂、空腹高心の處に存在す。蒲月三十日に到るに及んで、手を換へ骨を槌つも、已に是れ遅れ了れり。この僧恁麼に問ひ、趙州恁麼に答ふ、且く道へ、作麼生か摸索せん。恁麼も也た得ず、不恁麼も也た得ず、畢竟如何。この些子は難處なり、所以に雪竇拈出し來つて、當面に人に示す。趙州一日坐する次で、侍者報じて云く、「大王來也。」趙州巽然として云く、「大王萬福。」侍者云く、「未到和

①永嘉證道歌の語なり。  
 ②巽然は、左右驚き顧みるなり、一説に視ること速かなる貌。

尙。州云く、「又來也と道ふ」と。這裏に參到し、這裏に見到せば、妨げず奇特なり。南禪師拈じて云く、「侍者只だ客を報ずることを知つて、身の帝郷に在ることを知らず、趙州草に入つて人を求む、覺えず渾身泥水なることを。」この些子の實處、諸人還つて知る處。雪竇の頌を看取せよ。

【頌】 句裏に機を呈して劈面に來る。響、魚行けば水濁る、趙州を誘する莫くんば好し。爍迦羅眼織埃を絶す。(沙を撒し土を撒す、趙州を帶累すること莫れ、天を撈し地を摸して什麼か作ん。)東西南北門相對す。(開也、那裏にか許多の門有らん、趙州城を背却して什麼の處に向つてか去る。)限無き輪鎚擊てども開けず。(自らはれ備が輪鎚到らず、開也。)

【評唱】 趙州機に臨んで、一に金剛王寶劔に似たり。擬議せば即ち備が頭を截却し、往往に更に當面に備が眼睛を換却す。この僧也た敢て虎鬚を拏で、箇の間頭を致す、大いに無事に事を生ずるに似たり。爭奈せん句中に機有ることを、既に機を呈し來る、趙州也た他の問頭に辜負せず。所以に亦機を呈して答ふ、是れ他特地に此の如くならず、蓋し透底の人なるが爲に、自然に轍に合し、一に安排し來るに似て相似たり。見すや一の外道有り、手に雀兒を握り來つて、世尊に問うて云く、「且く道へ、某甲が手中の雀兒、是れ死耶、是れ活耶。」世尊遂に門闔に騎つて云く、「備道へ、我れ出耶入耶。」(一本に云く、世尊拳頭を堅起して云く、開也合也。)外道無語、遂に禮拜す。此の語使ち這の公案に似たり。古人自らはれ血脈不斷。所以に道ふ、「問は答處に在り、答は問處に在り。」雪竇此の如く見得透して使

ち道ふ、「句裏に機を呈して劈面に來る」と。句裏に機有り、兩意を帶ぶるが如し、又人に問ふに似、又境を問ふに似て相似たり。趙州一絲毫を移易せず、便ち他に向つて道ふ、「東門西門南門北門」と。爍迦羅羅織埃を絶す、此れは趙州の人境俱に奪つて、句裏に向つて機を呈して他の與に答ふるを頌す、此れ之れを機有り境有りと謂ふ。纔かに轉すれば便ち他の心膽を照破す、若し此の如くならずんば、他の問頭を塞ぎ難からん。爍迦羅眼は、是れ梵語、此に堅固眼と云ひ、亦金剛眼と云ふ。照見無碍、唯だ千里に明かに秋毫を察するのみにあらず、亦乃ち邪を定め正を決し、得失を辨じ、機宜を別ち、休咎を識る。雪竇云く、「東西南北相對す、限り無き輪鎚擊てども開けず。」既に是れ限り無き輪鎚、何が故ぞ、擊てども開けざる。自らはれ雪竇の見處此の如し、備諸人又作麼生か、此の門の開くを得去らん。請ふ參詳して看よ。

第十則

垂示に云く、恁麼恁麼、不恁麼不恁麼。若し戰を論せば、箇箇轉處に立在す。所以に道ふ、若し向上に轉じ去らば、直に得たり釋迦彌勒、文殊普賢、千聖萬聖、天下の宗師、普く皆氣を飲み聲を呑むことを。若し向下に轉じ去らば、醜雞蠅蟻、蠢動含靈、一一大光明を放つて、壁立萬仞ならん。儘し或は不上不下ならば、又作麼生か商量せん。條有れば條を攀ち、條無ければ例を攀づ。試みに舉

す看よ。

【本則】 擧す、睦州、僧に問ふ、「近離甚の處ぞ。」(探竿影草)僧便ち喝す。(作家の禪客且く詐明頭なること莫れ、也た恁麼にし去ることを解す)州云く、「老僧汝に一喝せらる。」(陷虎の機、人を獲して作麼せん)僧又喝す。(頭角を看取せよ、似たることは則ち似たり、是なることは則ち未だ是ならず、只だ恐らくは龍頭蛇尾ならんことを)州云く、「三喝四喝の後作麼生。」(逆水の波、未だ曾て一人の出得頭する有らず、那裏にか入り去る)僧無語。(果然として摸索不着)州便ち打つて云く、「若し睦州をして令を盡して行せしめば、盡大地の草木斬つて三段と爲さん。」(この掠虚頭の漢)、「一着を放過すれば第二に落在す。)

【評唱】 大凡そ宗教を扶堅せんには、須らく是れ本分宗師の眼目、本分宗師の作用有るべし。睦州の機鋒閃電の如くに相似たり、愛して座主を勘す、尋常一言半句を出すに、箇の荆棘叢に似て相似たり。脚手を著くること得ず、他纒かに僧の來るを見て、便ち道ふ、「見成公案、爾に三十棒を放す。」又僧を見て云く、「上座。」僧首を回す、州云く、「擔板漢。」又衆に示して云く、「未だ箇の入頭の處有

【本則】 東嶺禪師云く、第十、睦州の大機大用、是れ大道の根本爲ることを明す、僧の來るを見て便ち道ふ、「見成公案、爾に三十棒を放す」等の三則、此の師を見るに堪へたり、又僧を見て云く、「上座」と、僧首を回す、州云く、「擔板漢」と、又衆に示して云く、「未だ箇の入頭の處有らざれば、須らく箇の入頭の處を得べし、既に箇の入頭の處を得れば、老僧に辜負することを得ざれ、睦州人の爲に多く是くの如し。①現今成就の義にて、「できあひ」と譯す。

らすんば、須らく箇の入頭の處を得べし、既に箇の入頭の處を得ば、老僧に辜負することを得ざれ。睦州人の爲にすること多く此の如し。この僧也た善く雕琢す、争奈せん龍頭蛇尾なることを。當時若し是れ睦州にあらずんば、也た他に惑亂一場せられん。只だ他近離什麼の處と問ひ、僧便ち喝するが如きんば、且く道へ、他の意作麼生。この老漢也た忙しからず、緩緩地に他に向つて道ふ、「老僧汝に一喝せらる」と。他の話を傾して一邊に在くに似、又他を驗するに似て相似たり。身を斜にして他を如何と看る、この僧又喝す。似たることは則ち似たり、是なることは未だ是ならず、この老漢の鼻孔を穿卻し來らる。遂に問うて云く、「三喝四喝の後作麼生。」この僧果然として無語、州便ち打つて云く、「この掠虚頭の漢」と。人を驗する端的の處、口を下せば便ち知音、可惜許。この僧無語、睦州の掠虚頭の漢と道はるることを惹き得たり。若し是れ諸人ならば、睦州に三喝四喝の後作麼生と道はれんに、合に作麼生か祇對して、他に掠虚頭の漢と道はるることを免れ得ん。這裏若し是れ存亡を識り、休咎を別ち、脚實地を踏む漢ならば、誰か三喝四喝の後作麼生と云ふを管せん。只だこの僧無語の爲に、この老漢に便ち欸に據つて案に結せらる。雪竇の頌出するを聽取せよ。

①睦州記興寺の道明禪師なり。  
 ②事苑に、「掠は奪取なり」、又昌黎集の序に、「悉く易より已下を謂うて、古文と爲す、剽掠潛竊するを工と爲すのみ、」  
 「人の云ひたる言句を奪ひ取り、我が胸中より出でたるやうに、いつはり云ふなり。」  
 ③内はからにて、外から奪ひ取りて來た物ばかり、それを我が物がほに、云つたり、したりする「義なり」。  
 ④惹得は、事を仕出すを云ふ、又「すなかひ。そびき出す」意にもなる。

【頌】 兩喝と三喝と。(雷聲浩大にして雨點全く無し、古より今に至るまで人の恁麼なる有ること罕なり。) 作者機變を知る。(若し是れ作家にあらずんば争か驗し得ん。只だ恐らくは不恁麼ならんことを。) 若し虎頭に騎ると謂はゞ、(因、瞎漢、虎頭如何が騎らん、多少の人恁麼に會す、也た人有り這の見解を作す。) 二り俱に瞎漢と成らん。(親言は親口より出づ、何ぞ止だ兩箇のみならん、自領出去。) 誰か瞎漢。(誰をして辨せしめん、頼に末後の句有り、泊乎ど人を賺殺す。) 拈じ來つて天下人に與へて看せしむ。  
 (看ることとは即ち無きにあらず、觀着せば即ち瞎す、闇梨若し眼を着けて看ば則ち兩手空を拈る。恁麼に擧す且く道へ是れ第幾機ぞ。)

【評唱】 雪竇妨げず爲人の處有り、若し是れ作者にあらずんば、只だ是れ胡喝亂喝せん。所以に古人道く、「有る時の一喝は、一喝の用を作さず、有る時の一喝は、卻つて一喝の用を作す、有る時の一喝は、踞地獅子の如く、有る時の一喝は、金剛王寶劍の如し」と。興化道く、「我れ爾諸人を見るに、東廊下にも也た喝し、西廊下にも也た喝す、且く胡喝亂喝すること莫れ。直饒興化を喝し得て、三十三天に上せて、卻つて撲下來して、氣息一點も也た無くとも、我が甦醒し起き來らんを待つて、汝に向つて未在と道はん。何が故ぞ、興化未だ曾て紫羅帳裏に向つて眞珠を撒して、爾諸人

①魏府の興化存非禪師なり。  
 ②梵語初利、此に三十三天と云ふ、即ち帝釋所居の天なり。  
 ③方語に、情を盡して揭示すといへば、心底をのこさず、打ち出して、見せるの義なり、羅は「うすきものゆゑ、はつきりとは見えれども、見えなくものなり、眞珠は光るものなれば外から見えず、故に情を盡して揭示するに、喻へたるなり。

に與へざること有り、只管に胡喝亂喝して什麼をか作ん。臨濟道く、「我れ聞く、汝等は總に我が喝を學ぶ」と。我れ且く爾に問はん、「東堂に僧有り出で、西堂に僧有り出でて、兩箇齊しく喝と下す、那箇か是れ寶、那箇か是れ主、爾若し寶主を分ち得ずんば、已後老僧を學ぶことを得ざれ」と。所以に雪竇頌して道く、「作者機變を知る」と。この僧睦州に收へらると雖も、他卻つて機變を識る處有り。且く道へ、什麼の處か、是れこの僧の機變を識る處。鹿門の智禪師、この僧を點じて云く、「法を識る者は懼る。」岳頭道く、「若し戰を論せば、箇箇轉處に立在す。」黃龍の心和尙道く、「窮すれば則ち變じ、變すれば則ち通す」と。這箇の些子、是れ祖師天下の人の舌頭を坐斷する處なり、爾若し機變を識らば、擧著せば使ち落處を知らん。有般の漢は云ふ、他の三喝四喝と道ふことを管して什麼をか作さん、只管に喝し將ち去らん。什麼の三十二喝とか説かん、喝して彌勒佛下生に到らん、之を虎頭に騎ると謂ふと。若し恁麼の知見ならば、睦州を識らざることとは則ち故に是、この僧を見んと要すとも、太だ遠きこと有らん。人の虎頭に騎るが如きんば、須らく是れ手中に刀有り、兼ねて轉變有つて始めて得べし。雪竇道く、「若し恁麼ならば、二り俱に瞎漢と成らん。雪竇天に倚る長劍、凜凜たる全威に似たり。若し雪竇の意を會得せば、自然に千處萬處一時に會して、便ち他の雪竇後面の頌は、只だ是れ注脚を下すことを見ん。又道く、「誰か瞎漢。」且く道へ、是

④天童の覺、大隋の公案を拈じて云く、「法を識る者は懼る、敵を欺く者は亡ぶ、水中乳を辨するは須らく是れ鷓鴣王なるべし。」  
 ⑤易下繫辭の語なり。

れ賓家詰するか、是れ主家詰するか、是れ賓主一時に詰すること莫し麼。拈じ來つて天下人に與へて看せしむと。此れは是れ活處、雪竇一時に頌し了れり。什麼と爲てか卻つて道ふ、拈じ來つて天下人に與へて看せしむと。且く道へ、作麼生か看ん、開眼も也た著たり、合眼も也た著たり。還つて人の免れ得る有り麼。

國譯佛果園悟禪師碧巖錄卷第一終

夾山無礙禪師降魔表

慧芳附刊

臣聞く、三乘路廣うして法界涯り無く、智海晏清にして十方安泰なり。時に魔軍有り競ひ起つて、心田を侵撓す、六賊既に強うして、心王驚動す。朝に百恠を生じ、暮に千邪を起し、眞如を撼惑し、法體を困勞す。菩提の道路、隔絶して通せず、涅槃を破壊し、三寶を傷殘す。無爲の珠玉、悉く偷將せられ、大藏の法財、皆劫奪せらる。塵勞日に翳し、欲火天に亘り、法城を飄蕩し、聖境を焚燒す。臣乃ち斯の如きの暴亂を見て、恐らくは佛法以て存し難からんことを。遂に六波羅密と商量して同じく剪滅と爲し、性空を遣して密使と爲して、魔軍を聽探す。見今屯して五蘊山中に在り、八萬四千餘衆有り、既に體勢を知る、計剎那に在り、遂に十八界の雄兵を點じて、並に體空を立して號と爲す。人々無礙の力有り、箇箇勇健の能を懷く、直心見性の功を爲し、一正百邪の亂を

①或る説に云く、「圓悟此の碧巖集を評唱する時、萬般障碍多し、故に此の降魔表を作るなり」と、復た作者を詳にせずと云ふ説もあり。  
②慧芳是れ何人なるや、宗派の圖に之れ無し。  
③聲聞、緣覺、菩薩。  
④六賊は眼、耳、鼻、舌、身、意の六識なり。  
⑤心王は八識なり。  
⑥菩提は正道と譯す。  
⑦涅槃は、不生不滅。  
⑧八萬の塵勞。  
⑨六欲の火なり、六識の欲火なり。



去る。堅固の甲を擐り三昧の鎧を執る。智箭禪弓、光明の慧劍、大乘門中に向つて訓練し、寂滅山内に安營し、<sup>①</sup>三明嶺上に旗を開き、<sup>②</sup>八正路邊に排布す。大覺の性を遣して、捉生の將と爲し、四方に遊歴して、妄想の跡を捜求して、無明の蹟を抄截す。復た慈悲王を使して、<sup>③</sup>三毒の寨を破り、忍辱の帥曠怒の城を伐ち、精進の軍傲慢の妖を除き、<sup>④</sup>喜捨の士慳貪の賊を捉ふ。逡巡として魔軍大いに起つて、殺氣天を衝く。臣乃ち摩訶を部領して、一時に齊しく入る。爾の時に當つて眼色を觀ず、耳聲を聽かず、鼻香を嗅がず、舌味を了せず、身觸を受けず、意縁を攀ぢず、一志前に向つて、念念退かず、倏忽として魔軍大いに敗る、六賊全く輸く。殺戮無邊、掃除蕩盡、妄想を生擒し、無明を活捉して、領して涅槃場中に向つて、慧劍を以て斬つて三段と爲す。煩惱の林當時に摧折し、人我の山化して微塵と作り、癡愛の網智火に焚燒せられ、邪見の林慧風に吹塌せらる。茲に因つて三明再び朗かに、<sup>⑤</sup>四智重ねて圓かにして、内外瑕無く、廓然として清淨なり。心王權喜の殿に坐し、眞如解脫の樓に登り、自性無礙の堂に遊び、<sup>⑥</sup>三身法空の座に踞す。茲より法界寧靜にして、永

六〇

① 臣聞くより此に至りて一段なり、此の一段は表中の序段なり。

② 性空は第七識を指す。

③ 十八界は、六根、六識、六塵なり、迷へば十八界、悟れば直に六賊を平ぐる雄兵となるなり。

④ 法華授記品抄に云く、一には無數劫量の法門に於て、一時に明達して即佛道を成ずるを謂ふ、二には、是の如きの劫量の法門に明達して、總て清淨なるを謂ふ、三には、妙明の紫金光聚を謂ふ。」

⑤ 一に正見、二に正思惟、三に正語、四に正業、五に正命、六に正精進、七に正念、八に正定。

⑥ 三毒は、貪、嗔、癡。

⑦ 喜捨は施す心、是れを四無量心と云ふ。

⑧ 四智は、大圓鏡智、平等性智、

く罽座を絶し、共に生死の河を渡り、齊しく菩提の岸に到つて、魔軍既に退いて合に具に奏聞すべし。

妙觀察智、成所作智。  
⑨ 三身は、法、報、應。

# 國譯佛果園悟禪師碧巖錄卷第二

## 第十一則

垂示に云く、佛祖の大機、全く掌操に歸し、人天の命脈、悉く指呼を受く。等閑の一句一言、群を驚し衆を動す。一機一境、鎖を打し枷を敲く。向上の機を接し、向上の事を提ぐ。且く道へ、什麼人か曾て恁麼にし來る。還つて落處を知るありや。試みに舉す看よ。

【本則】 舉す、黄檗、衆に示して云く、「水を打して盆に碍へらる、一口に吞盡す、天下の衲僧跳不出。」汝等諸人、盡く是れ唾酒糟の漢。恁麼に行脚せば、(道着す、草鞋を踏破す、天を掀し地を搖す。)何の處にか今日あらん。(今日を用て什麼にか作ん、妨げず群を驚し衆を動すことを。)還つて大唐國裡に禪師無きことを知るや。(老僧不會、一口に吞盡す、也た是れ雲居の羅漢。)時に僧あり出でて云く、「只諸方の徒を匡し衆を領するが如きんば、又作麼生。」(也た好く一拶を與ふ、機に臨んで得て恁麼ならずんばあらず。)檗云く、「禪無しとは道はず、只是れ師無し。」(直に

【本則】 東嶺禪師云く、十一に、黄檗天性禪を會し、没量大の機格最も依學す可きに堪ふるを明す、古より道ふ岩頭末後の句の根基は尙ほ可なり、最も苦は黄檗禪無師の一著」と。五家臨濟、本、此の宗より出づ、是の故に他道ふ我れ此に於て黄檗の宗風を建立すと、實實、又曰く「斷際的全

得たり分疎不下なることを、瓦解氷消、龍頭蛇尾の漢。)

【評唱】 黄檗身の長七尺、額に圓珠有り、天性禪を會す。師昔天台に遊ぶ、路に一僧に逢ふ、之と談笑すること故相識の如し。熱之を視るに、目光人を射る、頗る異相有り。乃ち偕に行く、溪水の暴漲するに屬うて、乃ち杖を植て笠を捐て止る。其の僧、師を率ゐて同じく渡らんとす。師曰く、「請ふ渡れ。」彼れ即ち衣を褰げて波を躡むこと、平地を履むが如し、回顧して云く、「渡來渡來。」師咄して云く、「這の自了の漢、吾早く捏怪なることを知らば、當に汝が脛を斫るべし。」其の僧歎じて曰く、「眞の大乗の法器なり」と言ひ訖つて見えず。初め百丈に到る、丈問うて云く、「巍巍堂堂として什麼の處より來る。」檗云く、「別事の爲ならず。」百丈深く之を器とす。次の日百丈を辭す、丈云く、「什麼の處にか去る。」檗云く、「江西に馬大師を禮拜し去らん。」丈云く、「馬大師已に遷化し去れり。徧道へ、黄檗恁麼に問ふ、是れ知り來つて問ふか、是れ知り來らずして問ふか。」卻つて云く、「某甲特地に去つて禮拜せんとす、福縁淺薄にして、一見するに及ばず、未審平日何の言句か有る、願はくは舉示を聞かん。」丈遂に再び馬祖に參する因縁を舉す。祖我が來るを見て、便ち拂子を豎起す。我れ問うて云く、「此の用に即するか、此の用を離するか。」祖

機後難を續ぐ」と、又先師の牛頭の融大師、横説整設、猶ほ向七の關候子を知らざることと在りといふを評して曰く、「此の示衆は微妙不思議の關候子有り、是れ鶴林が講釋」と。

①黄檗希運禪師は、百丈懷海の法嗣にして、臨濟義玄の師なり、斷際禪師の賜號を受く。

②唐の貞元四年二月四日馬大師示寂、此時黄檗二十一歳なり。

祖我が來るを見て、便ち拂子を豎起す。我れ問うて云く、「此の用に即するか、此の用を離するか。」祖

遂に拂子を禪床角に掛けて、良久。祖卻つて我れに問ふ、「汝已後兩片皮を鼓して、如何が人の爲にせん。」我れ拂子を取つて堅起す、祖云く、「此の用に即するか、此の用を離するか。」我れ拂子を取つて禪床角に掛く、祖威を振つて一喝す。我れ當時直に得たり三日耳聾することを。黄蘗覺えず。悚然として舌を吐く。丈云く、「子已後馬大師に承嗣すること莫し麼。」蘗云く、「然らず、今日師の擧するに因つて、馬大師の大機大用を見ることを得たり、若し馬師に承嗣せば、他日已後、我が兒孫を喪せん。」丈云く、「如是如是。見師と齊しきときは、師の半徳を減す、智師に過ぎて、方に傳授するに堪へたり、子が今の見處、宛も超師の作有り。」諸人且く道へ、黄蘗恁麼に問ふ、是れ知つて故に問ふ耶、是れ知らずして問ふ耶、須らく是れ親しく他家の父子。行履の處を見て始めて得べし。黄蘗一日、又百丈に問ふ、「從上の宗乘如何が指示せん。」百丈良久。蘗云く、「後人をして斷絶し去らしむ可らず。」百丈云く、「將に謂へり汝は是れ箇の人」と、遂に乃ち起つて方丈に入る。蘗、裴相國と方外の友爲り、裴宛陵に鎮たり、師を請じて郡に至らしむ、所解一編を以て師に示す。師接して座に置いて、略披閱せず、良久して乃ち云く、「會す麼。」蘗云く、「不會。」蘗云く、「若し便ち恁麼に會得せば、猶ほ些子に較らん、若し也た紙墨に形さば、何の處にか更に吾宗有らん。」裴乃ち頰を以て賛して云く、「大士心印を傳へて自從り、額に圓珠有り七尺の身、錫を掛けて十年蜀水に棲む、盃を浮べて今日

●悚は説文に「懼るるなり」と。  
●履踐し行ふ用處を云ふ。  
●拈華以來宗門所乘の大法。  
●黄蘗の法嗣裴休字は公美。

漳濱を渡る、八千の龍象高歩に隨ひ、萬里の香花勝因を結ばんとす。師に事へて弟子と爲らんことを擬欲す、知らず法を將て何人にか付せん。師亦喜べる色無うして云く、「心は大海の邊際無きが如し、口紅蓮を吐いて病身を養ふ、自ら一雙無事の有り、曾て等閑の人を祇揖せず。」蘗住して後、機鋒峭峻なり、臨濟會下に在り、睦州首座爲り、問うて云く、「上座此に在ること多時、何ぞ去つて問話せざる。」濟云く、「某甲をして什麼の話を問はしめてか即ち得てん。」座云く、「何ぞ去つて如何なるか是れ佛法的の大意と問はざる。」濟便ち去つて問ふ、三度打出さる。濟、座を辭して曰く、「首座の三番去つて問はしむることを蒙つて、打出さる、恐らくは因縁這裏に在らざらんことを、暫く且つ山を下らん。」座云く、「子若し去らば、須らく和尚を辭し去つて方に可なるべし。」首座預め去つて蘗に白して云く、「問話の上座、甚だ不可得なり、和尚何ぞ穿鑿して一株の樹と成し去らしめて、後人の與に陰涼と爲さざる。」蘗云く、「吾れ已に知れり。」濟來り辭す、蘗云く、「汝別處に向つて去ることを得ざれ、直に高安灘頭に向つて、大愚に見え去れ。」濟、大愚に到つて、遂に前話を擧す、「知らず某甲過什麼の處にか在る。」愚云く、「蘗與麼に老婆心切、爾が爲にするに微困なり、更に什麼の有過無過とか説かん。」濟、忽然大悟して云く、「黄蘗の佛法多子無し。」大愚拈住して云く、「爾適來又過有りやと道ひ、今卻つて佛法外子無しと道ふ。」濟、大愚の脇下に於て壑くこと三拳、愚拓開して云く、「汝が師は黄蘗なり、我が事に干るに非ず」と。一日蘗、衆に示して

●歸宗常の法制。

云く、「牛頭の融大師、横説堅説、猶ほ未だ向上の關楨子を知らざることに在り」と。是の時<sup>①</sup>石頭馬祖下の禪和子、浩浩地に禪を説き道を説く。他何が故ぞ卻つて與麼に道ふ、所以に衆に示して云く、「汝等諸人、盡く是れ<sup>②</sup>唾酒糟の漢、恁麼に行脚せば、笑を人に取らん。但だ八百一千人の處を見て便ち去る。只だ熱鬧を圖る可らず、可の中總に汝が此の如く容易なるに似たらば、何の處にか更に今日<sup>③</sup>の事有らん」と。唐の時愛して人を罵るに、唾酒糟の漢と作す、人多く喚んで黃檗人を罵ると作す、具眼の者は自ら佗の落處を見ん。大意一鉤を垂れて人の間を釣る、衆中に身命を惜しまざる底の禪和有つて、便ち恁麼に衆を出でて佗に問ふを解して道ふ、只だ諸方に徒を匡し衆を領するが如きんば、又作麼生。也た好し一撥するに、這の老漢果然として<sup>④</sup>分疎不下。便ち卻つて漏逗して云く、「禪無しとは道はず、只だ是れ師無し」と。且く道へ、意什麼の處にか在る、佗の從上の宗師、有る時は擒、有る時は縦、有る時は殺、有る時は活、有る時は放、有る時は收、敢て諸人に問ふ、作麼生か是れ禪中の師。山僧恁麼に道ふ、已に是れ頭に和して没卻し了れり、諸人の鼻孔、什麼の處にか在る。良久して云く、「穿卻し了れり。」

【頌】 凛凛たる孤風自ら誇らす。(猶ほ自ら有ることを知らず、也た是れ雲居の羅漢。) 寰海に端居し

て龍蛇を定む。(也た縹素を別たんことを要す、也た皂白分明ならんことを要す。) 大中の天子曾て輕觸す。(什麼の大中天子とか説かん。任ひ大なるも也た須らく地より起るべし、更に高きも天有ることとを爭奈何せん。) 三度親しく爪牙を弄するに遭ふ。(死蝦蟇多口にして什麼か作ん。未だ奇特と爲す猶ほ是れ小機巧、若し是れ大機大用現前せば、盡十方世界乃至山河大地、盡く黃檗の處に在りて命を乞はん。)

【評唱】 雪竇此の一頌、一に黃檗の眞贊に似て相似たり。人卻つて眞贊の會を作すことを得ざれば、他底の句下に、便ち出身の處有り。分明に道ふ、「凛凛たる孤風自ら誇らす」と。黃檗恁麼に衆に示す、且つ是れ人を争ひ我れを負み、自ら逞しうし自ら誇るにあらず、若し這箇の消息を會せば、七縱八横に一任す。有る時は孤峯頂に獨立し、有る時は關市裏に身を横ふ、豈に偏に一隅を守る可けんや。愈捨つれば愈歇まず、愈尋ぬれば愈見えず、愈擔荷すれば愈沒溺す。古人道く、「翼無うして天下に飛び、名有つて世間に傳ふ」と。情を盡して佛法の道理、玄妙奇特を捨卻して、一時に放下せば、卻つて些子に較れり、自然に觸處現成せん。雪竇道く、「寰海に端居して龍蛇を定む」と。是れ龍是れ蛇、門に入り來れば便ち驗取す、之を龍蛇を定むるの眼、虎兇を擒ふるの機と謂ふ。雪竇又道く、「龍蛇を定むる眼何ぞ正しからん、虎兇を擒ふるの機全からず。」又道く、「大中の天子曾て輕觸す、

① 影像の眞贊。  
 ② 管子、桓公に復して曰く、「翼無くして飛ぶ者は聲なり。」  
 ③ 以下二句、祖集集昭教首座を送る長篇の中にある。

三度親しく爪牙を弄するに遭ふ。黄檗豈に是れ如今惡<sup>①</sup>乎。手のみならんや、從來此の如し。大中天子は續成通傳の中に載す。唐の憲宗二子有り、一を穆宗と曰ひ、一を宣宗と曰ふ。宣宗は乃ち大中なり、年十三、少うして敏黠なり、常に跣趺坐を愛す。穆宗在位の時、早朝罷むに因つて、大中乃ち戯れに龍床に登つて群臣を揖する勢を作す、大臣見て之を心風と謂へり。乃ち穆宗に奏す、穆宗見て撫歎して曰く、「我が弟は乃ち吾宗の英胄なり。」穆宗、長慶四年に於て晏駕す、三子有り、敬宗、文宗、武宗と曰ふ。敬宗父の位を繼いで二年にして、内臣謀つて之を易ふ。文宗位を繼いで一十四年にして、武宗即位す、常に大中を喚んで癡奴と作す。一日武宗、大中の昔日戲に父の位に登りしことを恨んで、遂に打殺して後苑の中に致く、不潔を以て灌いて復た甦らしむ。遂に潛かに逃れて香殿の閑和尚の會下に在り、後剃度して沙彌と爲る。未だ具戒を受けず、後智閑と遊方して廬山に到る。因に智閑瀑布に題する詩に云く、「雲を穿ち石を透つて勞を辭せず。地遠くして方を知る出處の高きことを。」閑此の兩句を吟じて、佇思すること久し、之れ他の語脈を釣つて如何と看んと欲す。大中續いて云く、「溪澗豈能く留むれども住ることを得んや。終に大海に歸して波濤と作る。」閑方には

①續成通傳は、道宣律師の撰述なり。  
 ②敏黠點諳。  
 ③天子の御座。  
 ④心風は狂心なり。  
 ⑤吾宗族。  
 ⑥英傑胄胤、増韻に「裔なり嗣なり」。  
 ⑦唐制に天子の居を衛と曰ひ、行を駕と曰ふ、章昭曰く「凡そ崩するを晏駕と爲すこと」は、臣子の心猶ほ宮車駕に當つて出づると謂へるがごとし。晏は晩なり。  
 ⑧鴻山祐の法嗣。

れ尋常の人にあらざることを知る、乃ち默して之を識る。後に職官の會中に到つて、大中を請じて書記と作す、黄檗彼に在つて首座と作る。榮一日佛を禮する次、大中見て問うて曰く、「佛に著いても求めず、法に著いても求めず、衆に著いても求めず、禮拜して當に何の求むる所ぞ。」榮云く、「佛に著いても求めず、法に著いても求めず、衆に著いても求めず、常に禮することは是の如し。」大中云く、「禮することを用ひて何か爲ん。」榮便ち掌す、大中云く、「大龕生。」榮云く、「這裏什麼の所在ぞ、龕と説き細と説く」と云つて、榮又掌す。大中後に國位を繼ぐ、黄檗に賜ふて龕行の沙門と爲す、裴相國朝に在り、後に奏して斷際禪師と賜ふ。雪竇他の血脈の出處を知つて、便ち用ひ得て巧なり、今還つて爪牙を弄する底有り麼、便ち打たん。

①職官、齊安國師は馬大師に嗣ぐ。

第十二則

垂示に云く、殺人刀、活人劍、乃ち上古の風規、亦今時の樞要なり。若し殺を論せば、一毫を傷らす、若し活を論せば、喪身失命す。所以に道ふ、向上の一路、千聖不傳。學者形を勞すること、猿の影を捉ふるが如し。且く道へ、既に是れ不傳、什麼としてか卻つて許多の葛藤公案ある。具眼の者は試みに擧す看よ。

【本則】 擧す、僧、洞山に問ふ、「如何なるか是れ佛。」(鐵蒺藜、天下の禱僧跳不出。)山云く、「麻三斤。」(灼然破草鞋、槐樹を指して柳樹を罵つて秤鎚と爲す。)

【評唱】 這箇の公案、多少の人錯つて會す、直に是れ咬嚼し難し、爾が口を下す處無けん。何が故ぞ、淡うして味無し。古人多少佛に答ふる話有り。或は云く、「殿裏底。」或は云く、「三十二相。」或は云く、「杖林山下の竹筋鞭」と。洞山に至るに及んで卻つて道ふ、「麻三斤」と。妨げず古人の舌頭を截斷することを。人多く話會を作して道ふ、「洞山是の時庫下に在つて麻を秤る、僧有り問ふ、所以に此の如く答ふ」と。有る底は道ふ、「洞山東を問へば西を答ふ」と。有る底は道ふ、「爾是れ佛、更に去つて佛を問ふ、所以に洞山遠路に之を答ふ」と。死漢更に一般有つて道ふ、「只だ這の麻三斤便ち是れ佛」と。且得没交涉、爾若し恁麼に洞山の句下に去つて尋討せば、參じて彌勒佛の下生に到るも、也た未だ夢にだも見ざること有り。何が故ぞ、言語は只だ是れ載道の器なり、殊に古人の意を知らず、只管に句中に去つて求めば、什麼の巴鼻か有らん。見ずや古人道く、「道本言無し、言に因つて道を顯す、道を見れば即ち言を忘す」と。若し這裏に到らば、我れに第一機を還し來つて始めて得

【本則】 東嶽禪師云く、十二に雲門宗は言句彌す意有り、參詳若し歳を歴さんば、夢にだも曾て見及す可らざるの大事を明す。

① 筋は根なり、昔一人の外道有り、竹杖を將つて世尊丈六の長を量る、時に世尊長倍して三丈二尺と作る、外道又竹を接いで之れを量る、世尊又倍すること此の如く數倍す、外道竹を續ぐに任へず、竹杖を擲下して去る、其の杖、根を托して竹林と爲る。

てん。只だ這の麻三斤、一に長安の大路の一條に似て相似たり、擧足下足不足なること有ること無し。這箇の話と雲門の餠餅の話と是れ一般なり、妨げず會し難きことを。五祖先師の頌に云く、「賤賣の擔板漢、貼秤す麻三斤、千百年の滯貨、渾身を著くるに處無し。」爾但だ情塵意想計較得失是非を打疊得して、一時に淨盡せば、自然に會し去らん。【頌】 金鳥急に、(左眼半斤、快鶴趕へども及ばず、火焰裏に身を横ふ。)玉兔速かなり。(右眼八兩、姮娥官裏に窺窟を作す。)善應何ぞ曾て輕觸あらん。(鐘の扣に在るが如く、谷の響を受くるが如し。)展事投機洞山を見ば、(錯りて定盤星を認む、自らは是れ閻黎恁麼に見る。)跛鼈盲龜空谷に入る。(自領出去、同坑に異土無し、阿誰か爾が鶴子を打つて死す。)花簇々錦簇々。(兩重の公案一狀に領過す、舊に依つて一般。)南地の竹北地の木。(三重も也た有り、四重の公案、頭上に頭を安す。)因つて思ふ長慶と陸大夫。(癩兒伴を牽く、山僧も也た恁麼、雪竇も也た恁麼。)道ふことを解す笑ふべし哭すべからず。(呵々、蒼天夜半に更に冤苦を添ふ。)咦。(咄、是れ什麼ぞ、便ち打つ。)

【評唱】 雪竇見得透す、所以に劈頭に便ち道ふ、「金鳥急に、玉兔速かなり」と、洞山の麻三斤と答

ふると更に兩般無し。日出で月没す、日々是の如し。人多く情解して、只管に道ふ、「金鳥は是れ左眼、玉兔は是れ右眼」と。纔かに問著すれば、便ち瞠眼して云く、「這裏に在り」と。什麼の交渉か有らん。若し恁麼に會せば、達磨の正宗、地を掃つて盡きん。所以に道ふ、「鉤を四海に垂れて、只だ鱗龍を釣る、格外の玄機は、知己を尋ねんが爲なり」と。雪竇は是れ陰界を出づる底の人、豈這般の見解を作さんや。雪竇輕々に關を敲き節を擊つ處に去つて、略些子を露して備をして見せしむ。便ち箇の注脚を下して道ふ、「善應何ぞ曾て輕觸有らん」と。洞山輕しく這の僧に酬いず、鐘の扣に在るが如く、谷の響を受くるが如し、大小隨ひ應じて、敢て輕觸せず。雪竇一時に心肝五臟を突出して、備諸人に呈似し了れり。雪竇靜而善應の頌有り云く、「觀面に相呈す、多端に在らず、龍蛇は辨じ易く、衲子は瞞じ難し。金鏡影動き、寶劍光寒じ、直下來也、急に眼を著けて看よ」と。洞山初め雲門に參す、門問ふ、「近離甚の處ぞ。」山云く、「渣渡。」門云く、「夏甚麼の處に在りし。」山云く、「湖南の報慈。」門云く、「幾時か彼の中を離る。」山云く、「八月二十五。」門云く、「爾に三頓の棒を放す、參堂し去れ。」師晚間入室す、親近して問うて云く、「某甲過什麼の處に在る。」門云く、「飯袋子、江西湖南、便ち恁麼に去るや。」洞山言下に於て、豁然大悟。遂に云く、「某甲他日人煙無き處に向つて、箇の庵子を卓て、一粒の米を蓄へず、一莖の菜を種さず、常に往來十方の大善知識を接待して、盡く伊が與に釘を抽却し、楔を抜却し、

⑤ 五陰界。  
⑥ 乃ち緊要の處を叩くなり。  
⑦ 渣渡は地名なり。

① 膩脂帽子を拈却し、鵝臍布衫を脱却して、各灑々落々地にして、箇の無事の人と作し去らしめん。門云く、「身は椰子の大きの如くにして、許大の口を開き得たり。」洞山便ち辭し去る。他の當時の悟處、直下に顛脫なり、豈小見に同じからんや。後來出世して機に應ず、麻三斤の語、諸方只だ佛に答ふる話會を作す。如何なるか是れ佛、杖林山下の竹筋鞭、丙丁童子來求火と、只管に佛の上に於て道理を作す。雪竇云く、「若し恁麼に展事と投機との會を作さば、正に跋鼈盲龜の空谷に入るに似たり、何の年の日月にか、出路を尋得し去らん、花簇簇錦簇簇。」此れは是れ僧、智門和尚に問ふ、「洞山麻三斤と道ふ意旨如何ん。」智門云く、「花簇々錦簇々、會す麼。」僧云く、「不會。」智門云く、「南地の竹北地の木。」僧回つて洞山に舉似す、山云く、「我れ汝が爲に説かず、我れ大衆の爲に説かん」と。遂に上堂して云く、「言に事を展ぶる無く、語機に投せず、言を承くる者は喪し、句に滯る者は迷ふ」と。雪竇人の情見を破つて、故意に引いて一串と作して頌出す。後人卻つて轉た情見を生じて道ふ、<sup>①</sup>麻は是れ孝服、竹は是れ孝杖、所以に道ふ、南地の竹北地の木、花簇々錦簇々、是れ棺材頭邊に畫く底の花草なりと。還つて羞を識る麼。殊に知らず南地の竹北地の木、麻三斤と、只だ是れ阿爺と阿爹と相似たることを。古人一轉語を答ふ、決して是れ恁麼ならず、正に雪竇の金鳥急に玉兔

① 膩脂帽子は人髮の油著きたる面巾なり。  
② 鵝臍布衫は、「ばやぶさの」(なまぐさき)に似たる「かたびら」なり。  
③ 三年の喪、麻を以て衣と爲し竹を以て杖と爲す。  
④ 增韻に、南人父を呼んで爺と曰ひ、説文に北人父を呼んで爹と曰ふ。

速かなりと道ふに似たり、自ら一般に寛曠なり。只だ是れ金輪辨じ難く、魚魯參差す。雪竇老婆心切にして、偏が疑情を破らんと要して、更に箇の死漢を引く。因つて思ふ。長慶陸大夫、道ふことを解す笑ふべし。哭すべからずと、若し他の頤を論せば、只だ頭上の三句に、一時に頤了れり。我れ且く偏に問はん、都廬只だ是れ箇の麻三斤、雪竇却つて許多の葛藤有り、只だ是れ慈悲忒煞し、所以に此の如し。陸巨大夫、宣州の觀察使と作つて、南泉に參す、泉遷化す、巨喪を聞いて寺に入つて下祭し、却つて呵々大笑す。院主云く、「先師と大夫と師資の義有り、何ぞ哭せざる。」大夫云く、「道ひ得ば即ち哭せん。」院主無語、巨大に哭して云く、「蒼天蒼天、先師世を去るとき遠し矣」と。後來長慶聞いて云く、「大夫笑ふべし。哭すべからず。」雪竇此の意の大綱を借つて道ふ、「偏若し這般の情解を作さば、正に好し笑ふに、哭すること莫けん」と。是れは便ち是れ、末後一箇の字有り、妨げず警訛なることを。更に道ふ、「嘆」と、雪竇還つて洗得脱する麼。

第十三則

垂示に云く、雲大野に凝つて、徧界藏さず。雪蘆花を覆うて、朕迹を分ち難し。冷處は氷雪よりも

冷かに、細處は米末よりも細かなり。深々たる處は佛眼も窺ひ難く、密々たる處は魔外も測ること莫し。舉一明三は即ち且く止く、天下の人の舌頭を坐斷して、作麼生か道はん。且く道へ、是れ什麼人の分上の事ぞ。試みに舉す看よ。

【本則】 舉す、僧、巴陵に問ふ、「如何なるか是れ提婆宗。」(白馬蘆花に入る、什麼と道ふぞ、點) 巴陵云く、「銀椀裏に雪を盛る。」(偏が咽喉を塞斷す、七花八裂。)

【評唱】 這箇の公案、人多く錯り會して道ふ、「此は是れ外道宗」と。什麼の交渉か有らん。第十五祖提婆尊者は、亦是れ外道中の一數なり。因に第十四祖龍樹尊者に見えて、針を以て鉢に投ず、龍樹深く之を器として、佛心宗を傳ふ、繼いで第十五祖と爲る。楞伽經に云く、「佛語心を宗と爲し、無門を法門と爲す。」馬祖云く、「凡そ言句有るは是れ提婆宗なり、只だ此れ箇れを以て主と爲す」と。諸人盡く是れ衲僧門下の客、還つて曾て提婆宗を體究し得てん麼。

若し體究得せば、西天の九十六種の外道、汝に一時に降伏せられん。若し體究不得ならば、未だ著しく袈裟を返披し去ることあるを免れず。且く道へ、是れ作麼生、若し言句是と道はば、也た沒交涉、若し言句不是と道はば、也た沒交涉。且く道へ、馬大師の意什麼の處にか在る。後來雲門道く、「馬大

【本則】 東嶺禪師云く、十三に、雲門宗の大事、馬大師、凡そ言句有れば是れ提婆宗と道ふより出づ、巴陵の三轉語も最も參評す可きの本則を明す。  
① 補云く、提婆大士は、南天竺の人、姓は毘、舍羅長者の子なり、天性才辨にして喜んで福業を修す、云云。





の法を將てか玄談を語らんと擬す。雪竇後に隨つて拈提して人の爲にす、所以に頌出す。

【頌】老新開、千兵は得易く一將は求め難し、多口の阿師。端的別なり。(是れ什麼の端的ぞ、頂門上の一着、夢にも見るや也た未しや。)道ふことを解す銀椀に雪を盛ると。(鍛跳れども斗を出でず、兩重の公案、多少の人喪身失命。)九十六箇應に自知すべし。(身を兼て内に在り聞黎還つて知るや、一坑に埋却せん。)知らずんば却つて天邊の月に問へ。(遠うして遠し、自領出去、空に望んで啓告す。)提婆宗提婆宗。(什麼と道ふぞ、山僧這裏に在り、満口に霜を含む。)赤旛の下清風を起す。(百雜碎、打つて云く、已に着け了れり。爾且く去つて頭を斬り臂を截り來れ、爾が與に一句を道はん。)

【評唱】老新開、新開は乃ち院の名なり、端的別なり。雪竇讚歎するに分有り。且く道へ、什麼の處か是れ別處、一切の語言、皆是れ佛法。山僧此の如きの説話、什麼の道理をか成し去らん。雪竇微しく些子の意を露して道ふ、「只だ是れ端的別なり」と。後面に打開して云く、「道ふことを解す銀椀裏に雪を盛る」と。更に爾が與に箇の注脚を下す、<sup>①</sup>九十六箇應に自知すべし、負墮して始めて得ん、爾若し知らずんば、天邊の月に問取せよ。古人曾て此の語に答へて云く、「天邊の月に問取せよ」と。雪竇頌了つて、<sup>②</sup>末後に須らく活路有り、獅子返擲の句有るべし、更に提起して爾が與に道ふ、「提婆宗提婆宗、赤旛の下清風を起す。」巴陵道

① 新開は乃ち巴陵郡の新開院、鑿公所住の寺なり。  
② 九十六種の外道。  
③ 獅子は生れて三歳の時、母乳最より踏落す、子則ち立ち回つて、母に向つて牙齒を咬む、是れを返擲と云ふ。

く、「銀椀裏に雪を盛る」と。什麼と爲てか却つて道ふ、「赤旛の下清風を起す」と、還つて雪竇人を殺すに刀を用ひざることを知る麼。

第十四則

【本則】擧す、僧、雲門に問ふ、「如何なるか是れ一代時教。」(直に如今に至りて了せず、座主會せず、葛藤窟裏。)雲門云く、「對一説。」(無孔の鐵鎚、七花八裂、老鼠生薑を咬む。)

【評唱】禪家の流、佛性の義を知らんと欲せば、當に時節因縁を觀すべし。之を教外別傳、單傳心印、直指人心、見性成佛と謂ふ。釋迦老子、四十九年の住世、<sup>①</sup>三百六十會、<sup>②</sup>頓漸權實を開談す、之を一代時教と謂ふ。這の僧拈じ來つて問うて云く、「如何なるか是れ一代時教。」雲門何ぞ他の與に紛々に解説せずして、却つて他に向つて箇の對一説と道ふ。雲門尋常一句の中に、須らく三句を具すべし、之を函蓋乾坤の句、隨波逐浪の句、截斷衆流の句と謂ふ。放去收來、自然に奇特なり。釘を斬り鐵を截るが如く、人をして他底を義解卜度し得ざらしむ。一大藏經、只だ三箇の字

【本則】東嶺禪師云く、十四に、佛一代の時教、皆我が向上宗乘より出づることを明す。  
① 涅槃經に云く、乳味中に酪有り、衆生の佛性も亦復た是くの如し、佛性を見んと欲せば、當に時節形色を觀察すべし、是の故に我れ説く、「一切衆生悉く佛性有り」と、實に虛妄ならず。  
② 世尊住世七十九年、今、説化の時に約す、故に四十九年と云ふ。  
③ 華嚴に始り、涅槃に終る。  
④ 頓とは、法相を説かず、直に

を消す、四方八面、備が穿鑿の處無し。人多く錯り會して却つて道ふ、「一時機宜の事に對するが故に説く」と。又道ふ、「森羅及び萬象、皆是れ一法の所印なり、之を對一説と謂ふ」と。更に有るは道ふ、「只だ是れ那箇の法を説くと、什麼の交渉か有らん。唯だ會せざるのみに非ず、更に地獄に入るに足らず、一句了然として百億を超ゆ」と、妨げず奇特なることを。如何なるか是れ一代時教、只だ箇の對一説と道ふことを消す。若し當頭に薦得せば、便ち歸家穩坐す可し、若し薦不得ならば、且く伏して處分を聴け。

【頌】 對一説。(活鱖々、言猶ほ耳に在り、妨げず孤峻なり。) 太だ孤絶。(傍觀分有り、何ぞ止だ壁立千仞のみならん、豈に慙麼の事有らんや。) 無孔の鐵鎚重ねて楔を下す。(錯りて名言を會す、雲門老漢也。是れ泥裏に土塊を洗ふ、雪竇也。是れ粧飾す。) 閻浮樹下笑呵々。(四州八縣曾て箇の漢を見ず、同道の者方に知る、能く幾人有りてか知らん。) 昨夜驪龍角を拗して折す。(止だ驪龍の拗折するのみに非ず、誰れ有つてか見來る、還つて證明する有りや、啞。) 別々。(讚歎するに分有り、須らく是れ雪竇にして始めて得べし、什麼の別處か有らん。) 韶陽老人一槪を得たり。(什麼の處にか在る、更に一槪有り、阿誰にか分付せん。德山臨濟も也。須らく退倒三千すべし、那一槪、又作慶生。便

ち打つ。)

【評唱】 對一説太だ孤絶、雪竇之を讚し及さず。此の語獨脱孤危にして、光前絶後なり。萬丈の懸崖の如くに相似たり、亦百萬の軍陣の如し。備が入處無し、只だ是れ忒煞だ孤危なり。古人道く、「親切を得んと欲せば、問を將ち來つて問ふこと莫れ。問は答處に在り、答は問端に在り、直に是れ孤峻なり。且く道へ、什麼の處か是れ孤峻の處ぞ、天下の人奈何ともすること得ず。這の僧也。是れ箇の作家、所以に此の如く問ふ、雲門又慙麼に答ふ。大いに無孔の鐵鎚重ねて楔を下すに似て相似たり。雪竇文言を使ふに、用ひ得て甚だ巧なり、閻浮樹

①南院首山の語なり。  
②楚語閻浮、此に勝金と言ふ。

下笑呵々とは、起世經の中に説く。須彌南畔の吠琉璃樹、閻浮洲に映じて、中皆青色なり。此の洲は乃ち大樹を名と爲て、閻浮提と名く。其の樹の縱廣七由旬、下に閻浮壇金聚有り、高さ二十由旬、金の樹下より出生するを以ての故に、閻浮樹と號す。所以に雪竇自ら説く、他閻浮樹下に在つて呵呵と笑ふ。且く道へ、他箇の什麼をか笑ふ、昨夜驪龍角を拗し折することを笑ふ、只だ之を瞻し之を仰して、雲門を讚嘆するに分有ることを得たり。雲門道ふ、「對一説」と、箇の什麼にか似たる、驪龍の一角を拗折するが如くに相似たり。這裏に到つて、若し慙麼の事無くんば、焉ぞ能く慙麼に説話せん。雪竇一時に頌了つて、末後に却つて道ふ、「別々、韶陽老人一槪を得たり。」何ぞ全得と道はざる、如何ぞ只だ一槪を得たる。且く道へ、那一槪什麼の處にか在る、直に得たり。第二人を穿過するこ

第十五則

垂示に云く、殺人刀、活人劍。乃ち上古の風規、是れ今時の樞要なり。且く道へ、如今那箇か是れ殺人刀、活人劍。試みに擧す看よ。

【本則】 擧す、僧、雲門に問ふ、「是れ目前の機にあらず、亦目前の機に非ざる時如何。」(躡跳して什麼か作ん、倒退三千里。)門云く、「倒一説。」(平出、欸は囚人の口より出づ、也た放過することを得ず、荒草裏に身を横ふ。)

【評唱】 這の僧妨げず是れ箇の作家、恁麼に問ふことを解す。頭邊は之を請益と謂ふ、此れは是れ呈解問、亦之を藏鋒問と謂ふ。若し是れ雲門にあらずんば、也た他を奈何ともせず。雲門這般の手脚有り、他既に問を將ち來る、已むことを得ずして之に應ず。何が故ぞ、作家の宗師、明鏡臺に臨んで、胡來れば胡現じ、漢來れば漢現するが如し。古人道く、「親切を得んと欲せば、問を將ち來つて問ふこと莫れ」と。何が故ぞ、問は答處に在り、答は問處に在り、從上の諸聖、何ぞ曾て一法の人に與ふる有らん、那裏にか禪道の偏に與へ來る有らん。偏若し地獄の業を造らすんば、自然に地獄

【本則】 東嶺禪師云く、十五は面前の大事是れ言句の奧義なることを明す、是の故に岩頭曰く、「只だ面前些子を露すのみ、一個の些子、許多の柄子を賣弄し了れり。」  
會元第十一に、首山念上堂の語なり。

の果を招かず、偏若し天堂の因を造らすんば、自然に天堂の果を受けず。一切の業縁は、皆是れ自作自受。古人分明に偏に向つて道ふ、若し此の事を論せば、言句上に在らず、若し言句上に在らば、三乘十二分教、豈是れ言句無からんや、更に何を用てか祖師西來す。前頭には對一説と道ひ、這裏には却つて倒一説と道ふ、只だ一字を争ふ、什麼と爲てか卻つて千差萬別有る。且く道へ、警訛什麼の處にか在る。所以に道ふ、法は法に隨つて行じ、法幢は處に隨つて建立す。是れ目前の機にあらず、亦目前の事に非ざる時如何。只だ當頭の一點を消す。若し是れ具眼の漢ならば、一點も也た他を護することを得ず。問處既に警訛、答處須らく恁麼なることを得べし。其實は雲門賊馬に騎つて賊を起ふ。有る者は錯つて會して道ふ、「本是れ主家の話、卻つて是れ賓家に道ふ、所以に雲門倒一説と云ふ」と。什麼の死急か有らん、這の僧問ひ得て好し、是れ目前の機にあらず、亦目前の事に非ざる時如何。雲門何ぞ他に別の語言を答へずして、只だ他に向つて倒一説と道ふ。雲門一時に他底を打破す、這裏に到つて倒一説と道ふも、也た是れ好肉上に瘡を剗る。何が故ぞ、言述の興り、白雲萬里、異途の由つて生ずる所なり。設使一時に言無く句無きも、露柱燈籠、何ぞ曾て言句有らん。還つて會す麼、若し會せずんば、這裏に到つて也た須らく是れ轉動して、

◎肇論の般若無知論に曰く、夫れ言述の興り、異途の由つて生ずる所なり、而も言は言ふこと能はざる所有り、述は述とすること能はざる所有り、是を以て善く言を言ふ者は、言ふこと能はざる所を言ふ、述を善くする者は、尋で述とすると能はざる所を述とす、至理虚玄なり、心を擬すれば已に差ふ、況んや乃ち言有るをや。

始めて落處を知るべし。

【頌】倒一説。(放不、七花八裂、須彌南畔卷盡五千四十八)分一節。(備が邊に在り我が邊に在り、半は河南半は河北、手を把つて共に行く)同死同生君が爲めに訣す。(泥裏に土塊を洗ふ、甚の來由をか着たる、備に放すことを得ず)八萬四千風毛に非ず。(羽毛相似たり、太教だ人の威光を滅す、漆桶麻の如く粟の如し)三十三人虎穴に入る。(唯だ我れ能く知る、一將は求め難し、野狐精の一隊)別別。(什麼の別處か有らん、少賣弄跣跳するに一任す)擾擾忽忽たり水裏の月。(青天白日、頭に迷うて影を認む、着忙して什麼か作ん)

【評唱】雪竇亦妨げず作家、一句下に於て、便ち分一節と道ふ。分明に一著を放過して、他と手を把つて共に行く。他從來放行の手段有り、敢て備が與に泥に入り水に入つて、同死同生す。所以に雪竇恁麼に頌す、其の實は他無し、只だ備が與に粘を解き縛を去り、釘を抽き楔を抜かんことを要す。如今卻つて言句に因つて、轉た情解を生ず。只だ巖頭の雪峰我れと同條に生すと雖も、我れと同條に死せずと道ふが如きんば、若し全機透脱して、大自在を得る底の人に非ずんば、焉んぞ能く備と同死同生せん。何が故ぞ、他許多の得失是非、滲漏處無きが爲なり。故に洞山云く、「若し向上の人の眞偽を辨認せんと要せば、三種の滲漏有り。情滲漏、見滲漏、語滲漏。見滲漏とは、機位を離れざれば、毒海に墮在す。情滲漏とは、智常に向背して、

●佛見法見未だ空せず、法塵煩惱、之れを滲漏と云ふ。

見處偏枯なり。語滲漏とは、體妙宗を失し、機終始を味す。此の三滲漏、宜しく己之を知るべし。又三玄有り、體中玄、句中玄、玄中玄。古人這の境界に到つて、全機大用す、生に遇うては備と同生し、死に遇うては備と同死す、虎口裏に向つて身を横へ、手脚を放得して、千里萬里、備が銜み去るに隨ふ。何が故ぞ、他の這の一著子を得るに還して始めて得ん。八萬四千風毛に非ずとは、靈山八萬四千の聖衆、風毛に非ずとなり。南史に云く、「宋の時、謝超宗は、陳郡陽夏の人、謝鳳が子なり、博學にして文才傑俊なり、朝中に比無し、當世之が爲に獨歩す、善く文を爲つて王府の常侍と爲る。王母殷淑儀薨す、超宗、誄を作つて之を奏す、武帝其の文を見て、大いに嘆賞を加へて曰く、超宗殊に、風毛有り」と。

古詩に云く、「朝罷んで香煙滿袖に携ふ。詩成つて珠玉毫を揮ふに在り。世に絲綸を掌るの美を知らんと欲せば、池上如今風毛有り」と。昔日靈山會上、四衆雲の如くに集る、世尊花を拈す、唯だ迦葉獨り破顏微笑す、餘は是れ何の宗旨と云ふことを知らず。雪竇所以に道ふ、「八萬四千風毛に非ず」と。三十三人虎穴に入るとは、阿難、迦葉に問うて云く、「世尊金襴の袈裟を傳ふる外、別に何の法をか傳ふ。」迦葉、「阿難」と召す、阿難應諾す、迦

●宏智の小夢に、「玄中玄、毘盧を超え釋迦を越ゆ、體中玄、一切處自然に普通せり、句中玄、哆哆和和、廣長舌を出す、豈に是れ稱僧具足受用底の時節にあらずや。」

●謝は姓、超宗は名なり。殷は姓、淑儀は女官の名、孝敬王の子、驚の母なり。

●文苑英華に云く、「誄は死を哀んで其の行を述ぶるの辭なり。」

●文苑英華に云く、「子能く父の美を繼ぐ者を風毛と稱す。」

●杜子美、買至舍人早に大明宮に朝するを和し奉る詩なり、注に曰く、「香煙滿袖とは即ち至が詩に、衣冠の身は御爐の香を惹くと云ふ者なり、近侍

葉云く、「門前の刹竿を倒卻し著せよ。」阿難遂に悟る。已後祖相傳へて、西天此土の三十三人、虎穴に入る底の手脚有り。古人道く、「虎穴に入らずんば、争か虎子を得ん」と。雲門は是れ這般の人にして、善能く同死同生す、宗師人の爲にすること須らく此の如くなるに至つて、曲条木牀上に據つて坐すべし。捨得して備をして打破せしむ、備が虎鬚を拵づることを容す、也た須らく是れ這般の田地に到つて始めて得べし。七事を具して身に随つて、以て同生同死す可し。高ぶる者は之を抑へ、下る者は之を擧げ、足らざる者には之に與へ、孤峰に在る者は、救うて荒草に入らしめ、荒草に落つる者は、救うて孤峰に處らしむ。備若し錢湯爐炭に入らば、我も也た錢湯爐炭に入らん、其の實は他無し、只だ備が與に粘を解き縛を去り、釘を抜き楔を抜き、籠頭を脱卻し、角駄を卸却せんことを要す。平田和尚、一頰有り、最も好し、「靈光不味、萬古の微猷、此

に居るを謂ふ、毫を揮ふに在りの句は、才敏にして詩工なるを云ふ、轉結二句は、超宗が事を擧げて、制語を掌つて父子美を繼ぐに比するなり。後漢の班超の語、事苑第二に詳なり。猶は辨慶が七つ道具と云ふが如く、武の七事を假り來りて、爲人の手段不足無きを云ふ。諸乘法數に、三衣、一鉢、香合、拂子、尼師壇、紙被、浴具を七事とせり、其の他種々の説あれども、今は前説を取る。老子に云く、「天の道は、夫れ猶ほ弓を張るがごとき、高ぶる者は之れを抑へ、下る者は之れを擧げ、餘り有る者は

之れを損し、足らざる者は之れを補ふ、云々。龍は龍と音通ず、龍居士の偈に云く、「鬚上龍頭を著け、口中鐵片を著く」と、字典に、龍頭は馬の被具なり、和名おもがい。事苑に云く、「角駄は重を負ふなり、驢馬物を負ふを謂ふ、」按するに、角は荷物を含むるなり、猶ほ一行李と云ふがごとし。會元第四に、「天台の平田普賢禪師は洪州の人なり、百丈門下に於て旨を得たり云々。今擧する所、上堂の語なり。微は美なり、猷は道なり。

の門に入り來つて、知解を存すること莫れ」と。別別、擾擾忽忽水裏の月、妨げず出身の路有り、亦、活人の機有り、雪竇拈じ了つて、人をして自ら去つて生機を明悟せしむ。他の語句に隨ふこと莫れ、備若し他に隨はば、正に是れ擾擾忽忽水裏の月ならん。如今作麼生か平穩を得去らん、一著を放過す。

第十六則

垂示に云く、道に横徑無し、立者孤危なり。法は見聞に非ず、言思迥絶す。若し能く荆棘林を透過し、佛祖の縛を解開して、箇の穩密の田地を得ば、諸天花を捧ぐるに路無く、外道潛かに窺ふに門無けん。終日行じて未だ嘗て行せず、終日説いて未だ嘗て説かず。便ち以て自由自在にして、啐啄の機を展べ、殺活の劍を用ふべし。直饒恁麼なるも、更に須らく建化門中、一手は擡げ一手は搦ふることあるを知つて、猶ほ些子に較るべし。若し是本分の事上ならば、且得沒交涉。生麼生か是本分の事、試みに擧す看よ。

【本則】 擧す、僧、鏡清に問ふ、「學人啐す、請ふ師啄せよ。」(風無きに浪を起して什麼か作ん、備許多の見解を用て什麼か作ん。)清云く、「還つて活を得るや也た無や。」(筍、帽を買ふに頭を相す、錯を將て錯に就く、總に恁麼なる可らず。)僧云く、「若し活せずんば、人に怪笑せられん。」(相帶累す、天を撐へ地を撐ふ、擔板漢。)清云く、「也た是れ草裏の漢。」(果然、自領出去、放過せば即ち不可。)

【本則】 東嶺禪師云く、十六は、啐啄の機、死活の異有り、學者須らく知るべきを明す。

【評唱】 鏡清、雪峰に承嗣す、<sup>①</sup>本仁、<sup>②</sup>玄沙、<sup>③</sup>疎山、<sup>④</sup>太原孚の輩と同時なり。初め雪峰に見えて旨を得たり、後常に啐啄の機を以て、後學に開示す、善能く應機說法す。衆に示して云く、「大凡そ行脚の人は、須らく啐啄同時の眼を具し、啐啄同時の用有つて、方に衲僧と稱すべし。母啄せんと欲するに而も子啐せざることを得ず、子啐せんと欲するに而も母啄せざることを得ざるが如し。」僧有り便ち出でて問ふ、「母啄し子啐す、和尚分上に於て、箇の什麼邊の事をか成し得たる。」清云く、「好箇の消息。」僧云く、「子啐し母啄す、學人分上に於て、箇の什麼邊の事をか成し得たる。」清云く、「箇の面目を露す。」所以に鏡清門下、啐啄の機有り、這の僧も亦是れ他の門下の客、他の家裏の事を會す、所以に此の如く問ふ。學人啐す、請ふ師啄せよ。此の間、洞下に之れを借事明機と謂ふ。那裏か此の如くならん、子啐し母啄す、自然に恰好同時なり。鏡清也た好し、謂つ可し拳踢相應じ、心眼相照すと。便ち答へて道ふ、還つて活を得るや也た無やと。其の僧也た好し、亦機變を知つて、一句下に賓有り主有り、照有り用有り、殺有り活有り。僧云く、「若し活せずんば、人に怪笑せられん。」清云く、「也た是れ草裏の漢」と。一等に是れ泥に入り水に入る、鏡清妨げず惡脚手なり、這の僧既に會して恁麼に問ふ、什麼と爲てか卻つて道ふ、也た是れ草裏の漢と。所以に作家の眼目、須

①鏡清道愆禪師。  
 ②高安白水の本仁禪師、法を洞山の价和尚に嗣ぐ。  
 ③玄沙師備、法を雪峰に嗣ぐ。  
 ④疎山匡仁、法を洞山の价に嗣ぐ。  
 ⑤太原孚は雪峰の法嗣なり、初め揚州の光孝寺に在り、涅槃經を講ずる等の緣、詳に第九十九則に見ゆ。

らく是れ恁麼なるべし。擊石火の如く、閃電光に似たり、<sup>①</sup>構得構不得、未だ喪身失命を免れず。若し恁麼ならば、便ち鏡清の草裏の漢と道ふことを見ん。所以に南院、衆に示して云く、「諸方只だ啐啄同時の眼を具して、啐啄同時の用を具せず。僧有り出でて問ふ、「如何なるか是れ啐啄同時の用。」南院云く、「作家は啐啄せず、啐啄すれば同時に失す。」僧云く、「猶ほ是れ學人が疑處。」南院云く、「作麼生か是れ備が疑處。」僧云く、「失。」南院便ち打す、其の僧肯はず、院便ち趕ひ出す。僧後に雲門の會裏に到つて前話を擧す。一僧有り、云く、「南院の棒折るる耶。」其の僧豁然とし

て省有り。且く道へ、意什麼の處にか在る、其の僧卻回して南院に見えんとす、院適に已に遷化す、卻つて<sup>②</sup>風穴に見えて、纔かに禮拜す。穴云く、「是れ當時先師に啐啄同時を問ふ底の僧なること莫し麼。」僧云く、「是。」穴云く、「爾當時作麼生か會す。」僧云く、「某甲當初、時に燈影裏に行くが如くに相似たり。」穴云く、「爾會せり。且く道へ、是れ箇の什麼の道理ぞ、這の僧都來只だ道ふ、「某甲當初、時に燈影裏に行くが如くに相似たり」と、甚麼に因つてか風穴便ち他に向つて道ふ、「爾會せり」と。後來翠巖拈じて云く、「南院然も籌を帷帳に運すと雖も、爭奈せん土曠かに人稀にして、知音の者少きことを。」風穴拈じて云く、「南院當時他の口を開かんを待つて、劈脊に便ち打つて、他作麼生と看ん」と。若し此の公案を見れば、便ち這の僧と鏡清と相見の處を見ん、諸

①構は、字典に成なり、譯語は「こしらへる、できあがる、らちあける、しなふせる」等、處に因り一定せざれども、成の意を離れず、構得は、目指す相手を手に入れるの義なり。  
 ②風穴は南院の嫡子なり。

人作麼生か、他の草裏の漢と道はるゝことを免れ得ん。所以に雪竇他の草裏の漢と道ふことを愛して、便ち頌出す。

【頌】古佛家風有り。(言猶は耳に在り、千古の榜様、釋迦老子を誘ふこと莫くんば好し。)對揚貶刺に遭ふ。(鼻孔什麼としてか却つて山僧が手裏に在る、八棒十三に對す、備作麼生か一着を放過す、便ち打たん。)子母相知らず。(既に相知らず、什麼と爲てか却つて啐啄有る、天然)是れ誰か同じく啐啄す。(百雜碎、老婆心切、且く錯りて認むること莫れ。)啄、覺(什麼と道ふぞ、第二頭に落在す。)猶は殼に在り。(何ぞ出頭し來らざる。)重ねて撲に遭ふ。(錯、便ち打つ、兩重の公案、三重四重し了れり。)天下の衲僧徒に名逸す。(放過し了れり、舉起することを須ひず、還つて名逸し得る底有りや、若し名逸し得るも也た是れ草裏の漢。千古萬古黒漫々、溝に填ち壑に塞る、人の會する無し。)

【評唱】古佛家風有り、雪竇一句に頌し了れり。凡そ是れ出頭し來るも、直に是れ近傍し得ず、若し近傍し著せば、則ち萬里崖州。纔かに出頭し來るも、便ち是れ落草。直饒七縱八橫なるも、一捏を消ひず。雪竇道く、「古佛家風有り。是れ如今慙變なるのみにあらず、釋迦老子、初め生下し來つて、一手は天を指し、一手は地を指して、四方を目標して云く、「天上天下唯我獨尊」と。雲門道く、「我れ當時若し見しかば、一棒に打殺して、狗子に與

①萬里崖州は、方語に、遠くして遠し。

へて喫却せしめん、貴ぶらくは天下の太平を要せん」と。此の如く方に酬得して恰好なり、所以に啐啄の機、皆是れ古佛の家風。若し此の道に達せば、便ち一拳に黃鶴樓を拳倒し、一踢に鸚鵡洲を踢翻す。②大火聚の如く、之に近けば則ち面門を燎卻す、太阿の劍の如く、③之を擬すれば則ち喪身失命す。此れは箇れ唯だ是れ透脱して、大解脱を得る者、方に能く此の如し。苟し或は源に迷ひ句に滯らば、決定して這般の説話を構ふこと得ず。對揚貶刺に遭ふ、則ち是れ一賓一主、一問一答、問答の處に於て、便ち貶刺有り、之を對揚貶刺に遭ふと謂ふ。雪竇深く此の事を知る、所以に只だ兩句下に向つて頌し了る。末後只だ是れ落草して、備が爲に注破す。子母相知らず、是れ誰か同じく啐啄す、母啄すと雖も、子の啄を致す能はず、子啐すと雖も、母の啄を致す能はず、各相知らず。啐啄の時に當つて、是れ誰か同じく啐啄する。若し慙變に會するも、也た雪竇最後の句を出で得ざること不在らん。何が故ぞ、見すや、香嚴道く、「子啐し母啄す、子覺して殼無し、子母俱に忘す。縁に應じて錯らず、同道唱和、妙玄獨脚」と。雪竇妨げず落草、葛藤を打して道く、「啄」と。此の一字、鏡清の答へて還つて活を得るや也た無やと道ふことを頌す。覺は這の僧若し活せずんば、人に怪笑せられんと道ふことを頌す。什麼と爲てか雪竇卻つて便ち道ふ、「猶は殼に在り」と。雪竇石火光中に

①是の句は、白雲の端、臨濟三頓の棒を喫する機縁を頌する第一二の句なり、其の三四に云く、「意氣有る時意氣を添へ風流ならざる處也た風流。」  
②大論に云く、「般若波羅密は、譬へば大火聚の如く云々。」  
③第一百則頌評に、「劍を以て王に擬すれば、頭巾中に墮つ。」擬は「あてかふ」と譯す。



向つて縞素を別ち、閃電機裏に端倪を辨す。鏡清道く、「也た是れ草裏の漢」と。雪竇道く、「重ねて撲に遭ふ」と。者の難處の些子はなり。鏡清道く、「也た是れ草裏の漢」と。喚んで鏡清人の眼睛を換ふと作し得てん麼。這の句是れ猶ほ殻に在ること莫し麼。且得沒交涉、那裏にか此の如くならん。若し會得せば、天下を繞つて行脚すとも、恩を報ゆるに分有らん。山僧が恁麼の說話、也た是れ草裏の漢。天下の衲僧徒に名選す、誰か是れ名選せざる者。這裏に到つて、雪竇自ら名選し出さず、卻つて更に他の天下の衲僧を累す。且く道へ、鏡清作麼生か是れ這の僧の爲にする處、天下の衲僧跳不出。

① 莊子に曰く、「始終を反覆して、端倪を知らず。」類書纂要に、「端倪は猶ほ端緒のごとし。其のはしくれを見て取りて、全體を知ることなり。」

### 第十七則

垂示に云く、釘を斬り鐵を截つて、始めて自分の宗師たる可し。箭を避け刀に隈れば、焉んぞ通方の作者たらん。針箭不入の處は則ち且く置く、白浪滔天の時如何。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、僧、香林に問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」(大いに人の疑着する有り、猶ほ這箇の消息の在る有り。)林云く、「坐久成勞。」(魚行けば水濁り、鳥飛べば毛を落す、狗口を合取せよ、好し作家の眼目、解解稱鈍。)

【評唱】香林道く、「坐久成勞」と、還つて會す麼。若し會得せば、百草頭上に干戈を罷卻せん、若し也た會せずんば、伏して處分を聽け。古人行脚、交を結び友を擇んで、同行道伴と爲つて、撥草瞻風す。是の時雲門化を廣南に旺にす、香林得得として蜀を出づ、鵝湖、鏡清と同時なり。

先づ湖南の報慈に參す、後方に雲門の會下に至つて、侍者と作ることに十年八年、雲門の處に在つて、親しく得、親しく聞く。他の悟る時晚しと雖も妨げず是れ大根器なり。雲門の左右に居ること十八年、雲門常に只だ遠侍者と喚ぶ。纔かに應諾すれば、門云く、「是れ什麼ぞ。」香林當時也た下語して見解を呈す、精魂を弄して、終に相契はす。一日忽ち云く、「我れ會せり。門云く、「何ぞ向上に道ひ將ち來らざる。」又住すること三年、雲門、室中に大機辯を垂るるとは、多半は他の遠侍者の隨處に入作せんが爲なり。雲門凡そ一言半句有る、都て遠侍者の處に收在す。香林後蜀に歸る、初め導江の水晶宮に住し、後に青城の香林に住す。智門の祚和尚、本浙人なり、盛に香林の道化を聞いて、特に來つて蜀に入つて參禮す。祚は乃ち雪竇の師なり、雲門人を接すること無數なりと雖も、當代道行者、只だ香林の

### 【本則】

東嶺禪師云く、十七は、九年面壁、只だ這の些子を傳へ、世人知る可らざるを明す。  
 ① 益州青城の香林院澄遠禪師は雲門の法嗣なり。  
 ② 鵝湖の智學禪師、法を鸞峰に嗣ぐ。  
 ③ 五燈統十三に、潭州報慈の藏巖匡化禪師は、龍牙の遺に嗣ぐ。  
 ④ 隋州智門の光祚禪師、法を香林の遠和尚に得たり。  
 ⑤ 會元云く、「香林禪師は漢州の人なり、姓は上官云々、將に波を示さんとす、知府宋公瑞を辭して曰く、老僧行脚し去らん。大通判曰く、這の僧風狂せり、八十歳にして行脚して、那裏にか去る。宋公曰く、大善知識去住自由なり。師衆に謂つて云く、老僧四十

一派最も盛なり。川に歸つて住院すること四十年、八十歳にして方に遷化す。嘗て云く、<sup>①</sup>「我れ四十年、方に打成一片」と。凡そ衆に示して云く、「大凡そ行脚して、知識を參尋せんには、眼を帯びて行かんことを要す、須らく緇素を分ち、淺深を見て始めて得べし。先づ須らく志を立つべし、而も釋迦老子、<sup>②</sup>因地に在せし時、一言一念を發するに、皆是れ志を立てつ。」<sup>③</sup>後來僧問ふ、「如何なるか是れ室内一盞の燈。」林云く、「三人龜を證して龜と成す。」又問ふ、「如何なるか是れ衲衣下の事。」林云く、「臘月の火山を燒く」と。古來祖師意に答ふるに甚だ多し、唯だ香林の此の一則、天下の人の舌頭を坐斷す、<sup>④</sup>備が計較して道理を作す處無し。僧問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」林云く、「坐久成勞。」謂つ可し言無味、句無味と。無味の談、人口を塞斷す。備が氣を出す處無し、見んと要せば便ち見よ、若し見ずんば、切に忌む解會を作すことを、香林曾て作家に遇ひ來れり。所以に雲門の手段有つて、三句の體調有り、人多く錯り會して道ふ、「祖師西來して、九年面壁す、豈是れ坐久成勞にあらずや」と。什麼の巴鼻か有らん、他の古人太自在を得る處を見ず、他は是れ脚實地を踏んで、許多佛法の知見道理無し、時に臨んで應用す、所謂法は法に隨つて行じ、法幢は處に隨つて建立す。<sup>⑤</sup>雪竇風に因つて火を吹いて、<sup>⑥</sup>傍に指出す。

年、方に打成一片と、言ひ訛て道す。  
 ② 因地は菩薩の修行中を云ふ。  
 ③ 因風吹火、方語に、力を勞する多からざるなり、因行掉臂と同意なり。  
 ④ 傍字の下に、一箇半箇の四字あれども、恐らくは頃の一箇兩箇と云ふが、爰へ紛れ來りしものならん、今は之れを削る。

【頌】 一箇兩箇千萬箇。(何ぞ依つて之れを行せざる、麻の如く粟に似たり、群を成し隊を作して什麼に作ん。) 龍頭を脱卻し角駄を卸す。(今日より去つて應に須らく灑灑落落たるべく、還つて休得するや也た未だしや。) 左轉右轉後に隨ひ來る。(猶ほ自ら放不下、影影響響、便ち打たん。) 紫胡劉鐵磨を打たんことを要す。(山僧拄杖子を拗折して更に此の令を行はず。賊過ぎて後弓を張る、便ち打つ、嶮。) 嶮。

【評唱】 雪竇直下に擊石火の如く、閃電光に似たり。拶出して放つて備をして見せしむ。聊か擧著するを聞いて便ち會せば始めて得ん。也た妨げず是れ他の屋裏の兒孫にして、方に能く懸懸に道ふ、若し能く直下に便ち懸懸に會し去らば、妨げず奇特なることを。「一箇兩箇千萬箇、龍頭を脱卻し角駄を卸す」と。灑灑落落として、生死の所染を被らず、聖凡情解の所縛を被らず、上攀仰無く、下己躬を絶す、一に他の香林・雪竇の如くに相似たらば、何ぞ止只是れ千萬箇のみならん。直に得たり盡大地の人、悉く皆此の如く、前佛後佛も、也た悉く皆此の如きことを。苟し或は言句の中に於て解會を作さば、便ち紫胡の劉鐵磨を打せんと要するに似て相似たり。其れ實に纔かに擧せば、聲に和して便ち打たん。紫胡、南泉に參ず、<sup>①</sup>趙州、<sup>②</sup>峯大蟲と同參、時に劉鐵磨瀉山下に在つて庵を卓つ。諸方皆他を奈何ともせず。一日紫胡得得として去つて訪うて云く、「便ち是れ劉鐵磨なること莫し

① 趙州從諗禪師。  
 ② 峯大蟲は、湖南長沙景岑禪師なり。  
 ③ 不敢は謙讓の辭、「さうではなし也」。

「否や。」磨云く、「不敢。」胡云く、「左轉か右轉か。」磨云く、「和尚顛倒すること莫れ。」胡聲に和して便ち打つ。香林這の僧の「如何なるか是れ祖師西來意」と問ふに答へて、卻つて云ふ、「坐久成勞」と、若し恁麼に會得せば、左轉右轉後に隨ひ來れり。且く道へ、雪竇此の如く顯出する意作麼生。無事にして好し、試みに請ふ舉す看よ。

### 第十八則

【本則】 舉す、肅宗、帝忠國師に問ふ、(本是れ代宗、此には誤る。)<sup>①</sup>百年後所須何物ぞ。<sup>②</sup>預め掻いて痒を待つ、果然摸を起し様を畫く。老老大大這の去就を作す、東を指して西と作す可らず。國師云く、「老僧の爲めに箇の無縫塔を作れ。」(把不住。)帝云く、「請ふ師塔様。」(好し一箇を與ふるに。)國師良久して云く、「會すや。」(囚に停めて智を長ず、直に得たり東を指し西を劃し南を將て北と作すことを。直に得たり口匾檐に似たることを。)帝云く、「不會。」(頼に不會に値ふ、當時更に一撈を與へて伊をして滿口に霜を含ましめば卻つて些子に較らん。)國師云く、「吾れに付法の弟子耽源といふものあり、卻つて此の事を請んず、請ふ詔して之れに問へ。」(頼に禪床を掀倒せざるに値ふ、何ぞ佗に本分の草料を與へざる、人を探胡すること莫くんば好し、一着を放過す。)國師遷化

【本則】 東嶺師云く、十八は塔を建つる様、最も全提半提の大 事有ることを明す。

の後、(惜む可し果然として錯りて定盤星を認む。)帝、耽源に詔して、此意如何と問ふ。(子は父の業を承げ、去るや、也た第二頭第三頭に落在す。)源云く、「湘の南潭の北。」(也た是れ把不住、兩兩三三什麼をか作す、半開半合。)雪竇著語して云く、「獨掌浪りに鳴らす。(一旨衆盲を引く、果然として語に隨つて解を生ず、邪に隨ひ惡を逐うて什麼にか作ん。)中に黄金有つて一國に充つ。(上は是れ天、下は是れ地、這箇の消息無し、是れ誰が分上の事ぞ。)雪竇著語して云く、「山形の拄杖子。(拗折了也、也た是れ摸を起し様を畫く。)無影樹下の合同船。」(祖師喪了れり、閻梨什麼と道ふぞ。)雪竇著語して云く、「海晏河清、(洪波浩渺白浪滔天、猶ほ些子に較れり。)瑠璃殿上に知識無し。」(咄。)雪竇著語して云く、「拈了也。」(賊過ぎて後弓を張る、言猶ほ耳に在り。)

【評唱】 肅宗、<sup>①</sup>代宗、皆玄宗の子孫なり、太子爲りし時、常に參禪を愛す。國に<sup>②</sup>巨盜有るが爲に、玄宗遂に蜀に幸す。唐は本、長安に都す、安祿山借據するが爲に、後に洛陽に都す、肅宗攝政す。是の時、忠國師、鄧州の白崖山に在つて住庵す、今の香嚴の道場是れなり。四十餘年山を下らず、道行帝里に聞ゆ。上元二年に中使に勅して詔して入内せしむ、待するに師の禮を以て、甚だ之を敬重す。嘗て帝の與に無上道を演ぶ、師朝より退く、帝自ら車を攀ちて之を送る、朝臣皆<sup>③</sup>慍る色有り、其の不便を奏せんと欲す。國師他心通を具

① 肅宗は玄宗の第三子なり。  
② 代宗は肅宗の長子なり。  
③ 巨盜は安祿山。  
④ 南陽の白崖山香嚴寺の慧忠禪師は、六祖大鑑の法嗣なり、代宗、大證國師の徽號を賜ふ。  
⑤ 慍は字典に「心蘊積する所あるなり。」

す、而して先づ聖に見えて奏して曰く、「我れ天帝釋の前に在つて、粟散天子を見るに、閃電光の如くに相似たり。」帝愈敬重を加ふ。代宗の臨御に及んで、復た延いて光宅寺に止らしむ。十有六載、機に随つて説法す、大曆十年に至つて遷化す。山南府の青鋒山和尚、昔國師と同行たり、國師嘗て帝に奏して他を詔させしむ、三たび詔せども起たず、常に國師の名に耽り利を愛し、人間に戀著することを罵る。國師他の父子二朝の中に於て國師と爲る、他家の父子、一時に參禪す。傳燈錄に考ふる所に據れば、此れは乃ち是れ代宗の設くる問なり。是れ國師に如何なるか是れ 十身調御と問ふが若きんば、此れ卻つて是れ肅宗の間なり。國師緣終つて、將に涅槃に入らんとす、乃ち代宗を辭す。代宗問うて曰く、「國師百年の後所須何物ぞ」と。只だ是れ平常一箇の間端なり、這の老漢風無きに浪を起して卻つて道ふ、「老僧が爲に箇の無縫塔を造れ」と。且く道へ、白日青天、此の如くにして什麼にか作さん。箇の塔を造ることは便ち了せん、什麼と爲てか卻つて道ふ、「箇の無縫塔を造れ」と、代宗也た妨げず作家なることを。備に一撈を與へて道ふ、「請ふ師塔様」と。國師良久して云く、「會す麼。」奇怪なり這の些子、最も是れ參じ難し。大小の國師、佗に一撈せられて、直に得たり口匾檐に似たることを。然も此の如くなりと雖も、若し是れ這の老漢にあらずんば、幾乎と弄倒し了らん。多少の人道ふ、「國師不言の處、便ち是れ塔

臨御は皇帝の位に登るなり、  
 卽ち即ち統御。  
 佛祖宗派圖に、興元青鋒白雲庵の如觀と云ふもの有り、京兆の丁氏忠國師の同行なり、三たび詔せども起たず。  
 肅宗、代宗。  
 九十九則に見ゆ。

様」と。若し恁麼に會せば、達磨の二宗、地を掃つて盡さん。若し良久便ち是と謂はば、啞子も也た禪を會すべし。豈見すや、外道、佛に問ふ、有言を問はず、無言を問はず、世尊良久す。外道禮拜し、贊嘆して曰く、「世尊大慈大悲、我が迷雲を開いて、我をして得入せしむ。」外道去るに及んで、阿難、佛に問ふ、「外道何の所證有つてか、而も得入と言ふ。」世尊云く、「世の良馬の鞭影を見て行くが如し」と。人多く良久の處に向つて會す、什麼の巴鼻か有らん。五祖先師拈じて云く、「前面は是れ珍珠瑪瑙、後面は是れ瑪瑙珍珠、左邊は是れ觀音勢至、右邊は是れ文殊普賢、中間に箇の麈子有つて、風に吹著せられて、胡盧胡盧と道ふ」と。國師云く、「會す麼。」帝曰く、「不會」と。卻つて些子に較れり。且く道へ、這箇の不會と武帝の不識と、是れ同か是れ別か、然も似たることは則ち似たりと雖も、是なることは則ち未だ是ならず。國師云く、「吾に付法の弟子耽源と云ふもの有り、卻つて此の事を請はず、請ふ詔して之に問へ」と。雪竇拈じて云く、「獨掌浪りに鳴らす。」代宗の會せざること、は則ち且く置く、耽源還つて會す麼、只だ箇の請ふ師塔様と道ふことを消ふ、盡大地の人奈何ともせず。五祖先師拈じて云く、「備は是れ一國の師、箇の什麼の爲にか道はずして、卻つて弟子に推與す」と。國師遷化の後、帝耽源を詔して、「此の意如何」と問ふ、源便ち來つて國師の爲に、胡言漢語して道理を説くに、自然に他の國師の説話を會す。只だ一頰を消ふ、(祖庭事苑齋時に出づ。)「湘の南潭

胡盧は、唐音、うろふら、塵が風に吹かれて、ぶらぶらと云ふ音なり、又塵脚の鈴がうろふらんと鳴ると云へる説もあり。

の北、中に黄金有つて一國に充つ、無影樹下の合同船、瑠璃殿上に知識無し」と。耽源名は應真、國師の處に在つて侍者と作る。後に吉州の耽源寺に住す、時に仰山來つて耽源に參す、源言重く性惡うして、犯す可らず、住すること得ず。仰先づ去つて、性空禪師に參す、僧有り、性空に問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」空云く、「人の千尺井、中に在るが如し、寸繩を假らずして、此の人を出し得ば、即ち汝に西來意を答へん。」僧云く、「近日湖南の暢和尚、亦、人の爲に東語西語す。」空乃ち「沙彌」と喚び、「這の死屍を拽き出し著よ。」（沙彌は仰山なり、山後に擧して耽源に問ふ、「如何が井中の人を出し得ん。」耽源曰く、「咄。癡漢、誰か井中に在る。」仰山契はず、後瀉山に問ふ、山乃ち「慧寂」と呼ぶ、山應諾す。瀉云く、「出了也。」仰山此に因つて大悟して云く、「我れ耽源の處に在つて體を得、瀉山の處に用を得たり」と。只だ是れ這の一箇の頌子、人の邪解を引くと少からず。人多く錯り會して道ふ、「相は是れ相見、譚は是れ譚論、中間に箇の無縫塔有り、所以に道ふ、中に黄金有つて一國に充つ」と。帝、國師と對答す、便ち是れ無影樹下の合同船、帝會せず、遂に道ふ、「瑠璃殿上に知識無し」と。有る底は道ふ、「相は是れ相州の南、潭は是れ潭州の北」と。中に黄金有つて一國に充つとは、官家を頌す。眩眼顧視して云く、「這箇は是れ無縫塔」と。若し恣麼に會せば、情見を出でず、只だ雪竇の四轉語を下すが如きんば、又作麼生か會せん。今の人殊に古人

① 潭州石雷山の性空禪師、法を百丈の海に嗣ぐ。  
 ② 官家は天子なり、廣記に「五帝は天下を官とし、三王は天下を家とす、今、有る底は、肅宗天子を頌すと謂ふなり。」

の意を知らず。且く道へ、湘の南潭の北、備作麼生か會せん。中に黄金有つて一國に充つ、備作麼生か會せん。無影樹下の合同船、備作麼生か會せん。瑠璃殿上に知識無し、備作麼生か會せん。若し恣麼に見得せば、妨げず平生を慶快せん、湘の南潭の北、雪竇道く、「獨掌浪りに鳴らす」と。已むことを得ずして備が與に説く、中に黄金有つて一國に充つ。雪竇道く、「山形の拄杖子」と。古人道く、「拄杖子を識得せば、一生參學の事畢んぬ。」無影樹下の合同船、雪竇道く、「海晏河清」と、一時に戸牖を豁開して、八面玲瓏、瑠璃殿上に知識無し。雪竇道く、「拈了也」と、一時に備が與に説き了れり。妨げず見難きことを、見得せば也た好し、只だ是れ些子も錯つて認むる處有れば、語に隨つて解を生ず、末後に至つて道ふ、「拈了也」と、卻つて些子に較れり。雪竇分明に一時に下話し了つて、後面に單に箇の無縫塔子を頌す。

③ 山形の拄杖子は、細工を施さぬ山出しの拄杖なり。

【頌】 無縫塔。(這の一縫、大小大什麼と道ふぞ。)見ること還つて難し。(眼の見る可きに非ず、瞎。)澄潭には許さず蒼龍の蟠ることを。(見るや、洪波浩渺、蒼龍什處に向つてか蟠る、這裏直に得たり摸索不著なることを。)層落落。(眼花すること莫れ、眼花して什麼か作ん。)影團團。(通身是れ眼、七に落ち八に落つ、兩兩三三舊路に行く、左轉右轉後に隨ひ來る。)千古萬古人に與へて看せしむ。(見るや、瞎漢作麼生か看ん、閻黎覷得見するや。)

【評唱】 雪竇當頭に道ふ、「無縫塔見ると還つて難し」と。然も獨露して私無しと雖も、則ち是れ見ん

と要する時還つて難し。雪竇忒然慈悲、更に爾に向つて道ふ、澄潭許さず蒼龍の蟠ることを。五祖先師道く、「雪竇の頌古一冊、我は只だ他の澄潭許さず蒼龍の蟠るをの一句を愛す」と。猶ほ些子に較れり、多少の人他の國師良久の處に去つて活計を作す。若し恁麼に會せば、一時に錯り了れり。道ふことを見ずや、臥龍止水を鑿みず、無處には月有つて波澄み、有處には風無うして浪起る。又道く、「臥龍」に怖る碧潭の清きことを。「若し是れ這箇の漢ならば、直饒洪波浩渺白浪滔天なるも、亦裏許に在つて蟠らす、雪竇此に到つて頌了る。後頭に些子の眼目を著けて、一箇の無縫塔を琢出す。後に隨つて説いて道ふ、「層落落影團團、千古萬古人に與へて看せしむ」と。爾作麼生か看ん、即今什麼の處にか在る。直饒爾見得して分明なるも、也た錯つて定盤星を認むること莫れ。

### 第十九則

垂示に云く、一塵擧つて大地收り、一花開いて世界起る。只塵未だ擧らす、花未だ開かざる時の如きんば、如何が眼を著けん。所以に道ふ、一線絲を斬るが如し、一斬一切斬。一線絲を染るが如し、一染一切染。只如今使ち葛藤を將て截斷して、自己の家珍を運出せば、高低普く應じ、前後差ふこと無く、各各現成せん。儻し或は未だ然らすんば、下文を看取せよ。

【本則】擧す、俱胝和尚、凡そ所問あれば、(什麼の消息か有らん、鈍根の阿師)只一指を擧つ。(這

の老漢也た天下の人の舌頭を坐斷せんことを要す、熱するときは則ち普天普地熱し、寒するときは則ち普天普地寒す、天下の人の舌頭を換卻す。)

【評唱】若し指頭上に向つて會せば、則ち俱胝に辜負せん。若し指頭上に向つて會せずんば、則ち生鐵鑄就すに相似ん。會も也た恁麼にし去り、不

會も也た恁麼にし去り、高も也た恁麼にし去り、低も也た恁麼にし去り、是も也た恁麼にし去り、非も也た恁麼にし去る。所以に道ふ、「一塵纔かに起つて、大地全く收り、一花開かんと欲して、世界便ち起る。」一毛頭の獅子、百億毛頭に現す」と。圓明道く、「寒するときは則ち普天普地寒く、熱するときは則ち普天普地熱す」と。山河大地、下黄泉に徹し、萬象森羅、上霄漢に通ず。且く道へ、是れ什麼物か恁麼に奇怪なることを得たる、若し也た識得せば、一捏を消せず、若し識不得ならば、人を礙塞殺せん。俱胝和尚は、乃ち婺州金華の人なり、初め住庵の時、一尼有り、實際と名く、庵に到つて直に入つて、更に笠を下さず、錫を持して禪牀を遶ること三匝して云く、「道ひ得ば即ち笠を下さん。」是の如く三たび問ふ、俱胝對無し、尼便ち去る。俱胝曰く、「天勢稍晚れぬ、且く留つて一宿せよ。」尼曰く、「道ひ得ば即ち宿せん。」胝又對無し、尼便ち行く。胝嘆じて曰く、「我れ丈夫の形に處すと雖も、而も丈夫の氣無し」と、遂に發憤して此の事を明めんと要す。庵を棄て諸方に往いて參請し、

【本則】東嶺禪師云く、十九は千七百則の公案、俱胝一指頭を出でざるを明す。  
 ①華嚴經に云く、交殊驚する所の獅子王、一毛頭上の獅子、百億毛頭に現す、百億毛頭の獅子、一毛頭上に現す。  
 ②徳山の緣密圓明禪師、雲門大師の法嗣。

打疊行脚せんと擬す。其の夜山神告げて曰く、「此を離るることを須ひざれ、來日肉身の菩薩有つて來つて、和尚の爲に說法せん、去ることを須ひざれ」と。果して是の次の日、天龍和尚、庵に到る、眠乃ち迎へ禮して、具に前事を陳ぶ。天龍只だ一指を堅て之に示す、俱胝忽然として大悟す。是れ他當時、鄭重に專注す、所以に桶底脱し易し。後來凡そ所問有れば、只だ一指を堅つ。長慶道く、「美食飽人の喫に中らず。」玄沙道く、「我れ當時若し見ば、指頭を拗折せん。」玄覺云く、「玄沙恁麼に道ふ意作麼生。」雲居の錫云く、「只だ恁麼に道ふが如きんば、是れ伊を肯ふか、是れ伊を肯はざるか、若し伊を肯はば、何ぞ指頭を拗折せんと言ふ、若し伊を肯はずんば、俱胝の過什麼の處にか在る。」先曹山云く、「俱胝承當の處莽鹵なり、只だ一機一境を認得して、一等に是れ手を拍ち掌を撫す。他の西園を見るに奇怪なり」と。玄覺又云く、「且く道へ、俱胝還つて悟るや也た未しや、什麼と爲てか承當の處莽鹵なる、若し是れ悟らすんば、又平生只だ一指頭の禪を用ひ盡さすと道はんや。且く道へ、曹山の意什麼の處にか在る」と。當時俱胝實に然も會せずんば、他の悟後に到るに及んで、凡そ所問有れば、只だ一指を堅つ。什麼に因つてか千人萬人羅籠すれども住らす、他を撲すれども破れず、爾若し用て指頭の會を作さば、決定して古人の意を見ず、這般

①釋名に曰く、鄭重は整頓なり。  
 ②増註に、專注は一なり、純篤なり。  
 ③承當はひきりけたと譯す。  
 ④會元第三に、馬祖の法嗣、南岳の西園蘭若叢禪師云々、一日自ら浴を燒く次で、僧問ふ、「何んぞ沙彌を使はざる、師掌を撫すること三下、僧曹山に舉似す、山曰く、「一等に是れ手を拍ち掌を撫す、中に就いて西園奇特なり」云々。

の禪は參じ易し、只だ是れ會し難し。如今の人纔かに問著すれば、也た指を堅て拳を堅つ。只だ是れ精魂を弄す、也た須らく是れ徹骨徹髓、見透して始めて得べし。俱胝庵中に一の童子有り、外に於て人に詰られて曰く、「和尚尋常何の法を以てか人に示す」と。童子指頭を堅起す、歸つて師に舉似す。俱胝刀を以て其の指を斷つ、童子叫喚して走り出づ。俱胝召すこと一聲、童子首を回す、俱胝卻つて指頭を堅起す。童子豁然として領解す。且く道へ、箇の什麼の道理をか見る。遷化に至るに及んで、衆に謂つて曰く、「吾天龍一指頭の禪を得て、平生用ひ盡さず、會せんと要す麼。」指頭を堅起して便ち脱去す。後來明招の獨眼龍、國泰の深師叔に問うて云く、「古人道く、「俱胝只だ三行の咒を念じて、便ち名一切の人に超ゆることを得たり」と、作麼生か他の與に三行の咒を拈卻せん。」深亦一指頭を堅起す。招云く、「今日に因らすんば、爭か這の瓜州の客を識得せん。」且く道へ、意作麼生、秘魔は平生只だ一杖を用ふ。打地和尙は、凡そ所問有れば、只だ地を打つこと一下す。後人に佗の棒を藏卻して、卻つて「如何なるか是れ佛」と問はれて、他只だ口を張る、亦是れ一生用ひ盡さす。無業云く、「祖師此土に大乘の根器有ることを見て、唯だ心印を單傳して、迷塗を指示す、之を得る者は、愚と智と、

⑤會元第四に云く、五臺山純覺岩和尚、常に一木叉を持して、僧の來りて禮拜するを見れば、頭を又仰して曰く、「那箇の魔魅が汝をして出家せしむ、那箇の魔魅が汝をして行脚せしむ、道ひ得るも也た又下に死し、道ひ得ざるも也た又下に死せん、速に道へ速に道へ」云々。  
 ⑥會元第三に、忻州打地和尙、江西より旨を領じて、常に其の名を晦す、云々。  
 ⑦會元第三に、汾州無業禪師は商州上洛杜氏の子なり云々、法を馬祖に嗣ぐ。

凡と聖とを揀ばず、且つ虚の多からんより、如かじ實の少からんには。大丈夫の漢、即今直下に休歇し去つて、頓に萬縁を息め去らば、生死の流を超えて、迥かに常格を出でん。縦ひ眷屬莊嚴有るも、求めざるに自ら得」と。無業一生凡そ所問有れば、只だ道ふ「莫妄想」と。所以に道ふ、「一處透れば千處萬處一時に透る、一機明かなれば千機萬機一時に明かなり」と。如今の人總に不憚麼、只管に意を恣にして情解して、他の古人省要の處を會せず、他豈に是れ機關轉換の處無からざらんや。什麼と爲てか只だ一指頭を用ふ、須らく知るべし俱抵這裏に到つて、深密爲人の處有ることを。省力を會得せんと要する麼。他圓明の寒するときは則ち普天普地寒く、熱するときは則ち普天普地熱すと道ふに還す。山河大地、上に通じて孤危、萬象森羅、下に徹して嶮峻。什麼の處よりか一指頭の禪を得來らん。

【頌】 對揚深く愛す老俱抵、(癩兒伴を牽く、同道方に知る、是れ一機一境を免れざることを。)宇宙空じ來るに更に誰か有らん。(兩箇三箇更に一箇有り、也た須らく打殺すべし。)會て滄溟に向つて浮木を下す。(全く是れ這箇なることは則ち是、太孤峻生、破草鞋、什麼の用處か有らん。)夜濤相共に盲龜を接す。(天を撈し地を摸す、什麼の了期か有らん、接得して何の用を作すにか堪へん、令に據つて行す、無佛世界に趣向せん。閻黎一箇の瞎漢を接得す。)

【評唱】 雪竇四六の文章を會して、七通八達、凡そ是れ諸訛奇特の公案、偏に去つて頌するを愛す。

「對揚深く愛す老俱抵、宇宙空じ來るに更に誰か有らん」と。今時の學者 對は答なり、揚は舉なり、問古人を抑揚す、或は賓或は主、一問一答、當面に提持して、此の如く爲人の處有り。所以に道ふ、「對揚深く愛す老俱抵」と。且く道へ、雪竇他を愛して什麼か爲ん、天地開闢より以來、更に誰か有らん、只だ是れ老俱抵一箇なり、若し是れ別人ならば須らく參雜すべし。唯だ是の俱抵老、只だ一指頭を用ひて、直に老死に至る。時の人多く邪解して道ふ、「山河大地も也た空じ、人も也た空じ、法も也た空す、直饒宇宙一時に空じ來るも、只だ是れ俱抵老一箇」と。且得沒交涉。會て滄溟に向つて浮木を下す、如今之を生死海と謂ふ。衆生業海の中に在つて、頭出頭沒して、自己を明めず、出期有ること無し。俱抵老慈を垂れて物を接す、生死海の中に於て、一指頭を用ひて人を接す、浮木を下して盲龜を接するに似て相似たり。諸の衆生をして、彼岸に到ることを得せしむ。夜濤相共に盲龜を接す、法華經に云く、「一眼の龜の浮木の孔に値ふて、沒溺の患無きが如し」と。大善知識、一箇の龍の如く虎に似たる底の漢を接得して、他をして有佛世界に向つて、互に賓主と爲り、無佛世界に要津を坐斷せしむ。箇の盲龜を接得して、何の用を作すにか堪へん。

第二十則

垂示に云く、堆山積嶽、撞墻磕壁、佇思停機せば、一場の苦屈。或は箇の漢あつて出で來つて、大



海を掀翻し、須彌を踢倒し、白雲を喝散し、虚空を打破して、直下に一機一境に向つて、天下の人の舌頭を坐斷せば、爾が近傍の處無けん。且く道へ、從上來是れ什麼人か曾て慙麼なる。試みに擧す看よ。

【本則】 擧す、龍牙 翠微に問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」

(諸方の舊話也た勘過せんと要す。) 微云く、「我が與めに禪板を過し來れ。」(禪板を用て什麼か作ん、泊んど放過すべきに。峻。) 牙、禪板を過して翠微に與ふ。(也た是れ把不住、青龍を駕與すれども騎ることを解せず。可惜許、當面に承當せず。) 微接得して便ち打つ。(着、箇の死漢を打得して甚の事を濟さん、也た第二頭に落在し了れり。) 牙云く、「打つことは即ち打つに任す。要且つ祖師西來意無し。」(這の漢第二頭に話在す、賊過ぎて後弓を張る。) 牙又臨濟に問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」(諸方の舊公案再び問ひ將ち來る、半文錢に直らす。) 濟云く、「我が與めに蒲團を過し來れ。」(曹溪の波浪若し相似たらば、限り無き平人も陸沉せられん。一坑に埋卻せん。) 牙、蒲團を取つて臨濟に過與す。(依前として把不住、依前として不伶俐、越國に依稀として揚州に髣髴たり。) 濟、接得して便ち

【本則】

東嶺禪師云く、二十は、古人行脚、みな悟後の大事を極むることを明す、此の故に、雪竇和尚再應頌出して、以て宗旨別に生涯有ることを顯す、馮山の語曰く、翠微臨濟、謂つ可し本分の宗師と、一等に是れ撥草瞻風、妨げず後人の與に龜鑑と作ることなす。  
龍牙は湖南龍牙山妙濟院の居遊禪師にして、洞山良价の法嗣なり。  
翠微は京兆終南山の無學禪師にして、丹霞天然の法嗣なり。

打つ。(着、惜む可し這般の死漢を打つことを、一機に脱出す。) 牙云く、「打つことは即ち打つに任す、要且つ祖師西來意無し。」(灼然、鬼窟裏に在りて活計を作す、將に謂へり便宜を得たりと。賊過ぎて後弓を張る。)

【評唱】 翠巖の芝和尚云く、當時是の如し、今時の衲子、皮下還つて血有り麼。馮山の語云く、「翠

微、臨濟、謂つ可し本分の宗師と。龍牙は一等に是れ撥草瞻風す、妨げず後人の與に龜鑑と作ることを。」住院の後僧有り、問ふ、「和尚當時還つて二尊宿を肯ふ麼。」牙云く、「肯ふことは即ち肯ふ、只だ是れ祖師西來意無し。」龍牙前を瞻後を顧て、病に應じて藥を與ふ、大瀉は則ち然らず、伊が和尚當時還つて二尊宿を肯ふ麼と問はんを待つて、明不明、劈脊に便ち打せん。惟だ翠微・臨濟を扶堅するのみに非ず、亦來問に辜負せず。石門聰云く、「龍牙人の擗著する無くんば猶ほ可なり、箇の衲子に挨著せられて、一隻眼を失卻す。」雪竇云く、

「臨濟・翠微、只だ把住することを解して、放開することを解せず、我れ當時若し龍牙と作らば、伊が蒲團禪板を索めんを待つて、拈起して劈面に便ち擲たん。」五祖の戒云く、「和尚恁麼に 面長なることを得たり。」或は云く、「祖師、土宿頭に臨む」と。黃龍の新云く、「龍牙耕夫の牛を驅り、飢人の食を奪ふ。既に明かなることは則ち明かなり矣、什麼に因つて卻つて祖師西來意無き。會す麼、棒頭に眼有

り、明かなること日の如し、眞金を識らんと要せば火裏に看よ」と。大凡そ要妙を激揚し、宗乘を提唱せんには、第一機下に向つて明得して、以て天下の人の舌頭を坐斷す可し。儻し或は躊躇せば、第二に落在せん。這の二老漢、然も風を打し雨を打し、天を驚し地を動すと雖も、要且つ曾て箇の明眼の漢を打著せず。古人の參禪、多少か辛苦する。大丈夫の志氣を立て山川を経歴し、尊宿に參見す。龍牙先づ翠微・臨濟に參じ、後徳山に參す。遂に問ふ、「學人鐵錫の劍に仗つて、師の頭を取らんと擬する時如何。」徳山頸を引べて云く、「因。」牙云く、「師の頭落ちぬ。」山微笑して便ち休し去る。次に洞山に到る、洞山問ふ、「近離甚の處ぞ。」牙云く、「徳山より來る。」洞山云く、「徳山何の言句か有りし。」牙遂に前語を擧す、洞山云く、「他什麼とか道ひし。」牙云く、「他無語。」洞山云く、「道ふこと莫れ語無しと、且く試みに徳山落つる底の頭を將つて、老僧に呈似せよ看ん。」牙此に於て省有り、遂に香を焚いて徳山を望んで、禮拜懺悔す。徳山聞いて云く、「洞山老漢、好惡を識らず、這の漢死し來ること多少時ぞ、救ひ得るも什麼の用處か有らん。從他あれ老僧が頭を擔うて、天下を透つて走ることを。」龍牙根性聰敏、一肚皮の禪を擔うて行脚す。直に長安の翠微に向つて便ち問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」微云く、「我が與に禪板を過し來れ。」牙禪板を取つて微に與ふ、微接得して便ち打つ。牙云く、「打つことは即ち打つに任す、要且つ祖師西來意無し。」又臨濟に問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」濟云く、「我が與に薄團を過し來れ。」牙蒲團を取つて臨濟に與ふ、濟接得して便ち打つ。牙云く、「打つことは即ち打つに任す、要且つ祖師西來意無し。」他箇の問端を致す、妨げす他の曲柔木床上の老漢を見んと要し、亦自己一段の大事を明めんと要することを。謂つ可し言虚に設けず、機亂に發せず、做工夫の處に存在すと。見すや 五洩、石頭

①因は玉篇に、戸臥の切、音和、船を牽く聲、唐音、おう、重き物を牽く故、思はず、おうと聲が出るなり。  
②通雅に、「長州の人、物を以て人に與ふるを過すと曰ふ。」

③婺州五洩山の靈默禪師、法を馬祖に嗣ぐ。

何なるか是れ祖師西來意。」濟云く、「我が與に薄團を過し來れ。」牙蒲團を取つて臨濟に與ふ、濟接得して便ち打つ。牙云く、「打つことは即ち打つに任す、要且つ祖師西來意無し。」他箇の問端を致す、妨げす他の曲柔木床上の老漢を見んと要し、亦自己一段の大事を明めんと要することを。謂つ可し言虚に設けず、機亂に發せず、做工夫の處に存在すと。見すや 五洩、石頭に參す、先づ自ら約して曰く、「若し一言に相契はば即ち住らん、然らずんば即ち去らん」と。石頭據座、洩拂袖して出づ。石頭是れ法器なることを知つて、即ち開示を垂る、洩其の旨を領せず、告辭して出でて門に至る。石頭之を呼んで云く、「闍黎。」洩回顧す、石頭云く、「生より死に至るまで、只だ是れ這箇、頭を回し腦を轉じて、更に別に求むること莫れ」と。洩言下に於て大悟す。又麻谷、錫を持して章敬に到つて、禪床を遷ること三匝、錫を振ふこと一下、卓然として立つ。敬云く、「是是。」又南泉に到つて、依前として床を遷り錫を振つて立つ。南泉云く、「不是不是。」此れは是れ風力の所轉、終に敗壞を成す。谷云く、「章敬は是と道ひ、和尚は什麼と爲てか不是と道ふ。」南泉云く、「章敬は即ち是、是れ汝は不是」と。古人也た妨げず提持して此の一件の事を透脱せんと要することを。如今の人纔かに問著すれば、全く些子の工夫を用ふる處無し。今日も也た只だ是れ恁麼、明日も也た只だ是れ恁麼、爾若し只だに恁麼ならば、盡未來際にも也た未だ了日有らず、須らく是れ精神を抖擻して、始めて少分の相應有ることを得べし。爾看よ、龍牙一問を發して道く、「如何

なるか是れ祖師西來意。翠微云く、「我が與に禪板を過し來れ。」「牙、微に過與す、微接得して便ち打つ。牙當時禪板を取る時、豈に翠微が他を打たんと要するを知らざらんや。也た便ち他會せずと道ふことを得ず、什麼と爲てか卻つて禪板を過して他に與ふ。且く道へ、當機承當得する時、合に作麼生か、他活水の處に向つて用ひす。自ら死水裏に去つて活計を作して、一向に主宰と作つて、便ち道ふ、「打つことは即ち打つに任す、要且つ祖師西來意無し」と。又走つて河北に去つて臨濟に參す、依前として恁麼に問ふ、濟云く、「我が與に蒲團を過し來れ。」「牙、濟に過與す、濟接得して便ち打つ。牙云く、「打つことは便ち打つに任す、要且つ祖師西來意無し。且く道へ、二尊宿又法嗣を同じうせず、什麼と爲てか答處相似て用處一般なる。須らく知るべし古人一言半句、亂に施爲せざることを。他後來住院、僧有り、問うて云く、「和尚當時二尊宿に見ゆ、是れ何を肯ふか他を肯はざるか。」「牙云く、「肯ふことは則ち肯ふ、要且つ祖師西來意無し」と。爛泥裏に刺有り、放過して人に與ふ、已に第二に落つ、這の老漢把得定して、只だ洞下の尊宿と做し得たり。若し是れ德山・臨濟の門下ならば、須らく別に生涯有ることを知るべし。若し是れ山僧ならば則ち然らず、只だ他に向つて道はん、「肯ふことは即ち未だ肯はず、要且つ祖師西來意無し」と。見すや僧大梅に問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」「梅云く、「西來無意」と。鹽官聞いて云く、「一箇の棺材、兩箇の死漢。」「玄沙聞いて云く、「鹽官是れ作家」と。雪竇道く、「三箇も也た有り。」「只だ這の僧の祖師西來意を問ふが如きんば、卻つて他に向つて道ふ、「西來無意」

と。備若し恁麼に會せば、無事界裏に墮在せん。所以に道ふ、「須らく活句に參すべし、死句に參すること莫れ、活句下に薦得せば、永劫にも忘れず、死句下に薦得せば、自救不了」と。龍牙恁麼に道ふ、「妨げず善を盡すことを。」「古人道く、「相續也た大いに難し」と。他の古人、一言半句、亂に施爲せず、前後相照して、權有り實有り、照有り用有り、賓主歷然、互換縱橫。若し其の親切を辨せんとなせば、龍牙の宗乘を味さすと雖も、爭奈せん第二頭に落在することを。當時二尊宿、禪板蒲團を索む、牙、他の意を知らずんばある可らず、是れ他、他の胸襟裏の事を用ひんと要す。然も是の如くなりと雖も、妨げず用ひ得てただ峻なることを。龍牙恁麼に問ひ、二老恁麼に答ふ、什麼と爲てか卻つて祖師西來意無き。這裏に到つて、須らく別に箇の奇特の處有ることを知るべし。雪竇拈出して人をして看せしむ。

【頌】 龍牙山裡龍に眼無し。(瞎、別人を謾することは即ち得たり。泥裏に土塊を洗ふ、天下の人總に知る。)死水何を曾て古風を振はん。(忽然として活する時奈何ともすること無けん。累天下の人に及んで出頭することを得ず。)禪板蒲團用ふる

こと能はず。(阿誰をしてか説かしめん、備禪板蒲團を要して什麼か作ん。是れ閑黎に分付すること莫しや。)只應に分付して盧公に與ふべし。(也た則ち分付することを着す、漆桶這般の見解を作すと莫れ。)

【評唱】雪竇歎に據つて案に結す、他恁麼に頌すと雖も、且く道へ、意什麼の處にか在る。甚の處か是れ眼無き、甚の處か是れ死水裏。這裏に到つて、須らく是れ變通有つて始めて得べし。所以に道ふ、澄潭許さず蒼龍の蟠ることを、死水何ぞ曾て鱗龍有らん」と。道ふことを見ずや、死水龍を藏さすと。若し是れ活底の龍ならば、須らく洪波浩渺、白浪滔天の處に向つて去るべし。此れ龍牙走つて死水中に入り去つて人に打せらるゝことを言ふ。他卻つて道ふ、「打つことは即ち打つに任す、要且つ祖師西來意無し」と。雪竇死水何ぞ曾て古風を振はんと道ふことを招き得たり。然も此の如くなりとも雖も、且く道へ、雪竇是れ伊を扶持するか、是れ他の威光を滅するか。人多く錯り會して道ふ、什麼と爲てか、只だ應に分付して盧公に與ふべき。殊に知らず、卻つて是れ龍牙分付して人に與ふることを。大凡そ參請は、須らく是れ機上に向つて辨別して、方に他の古人相見の處を見るべし、禪板蒲團用ふること能はず。翠微云く、「我が與に禪板を過し來れ。」牙他に過與す、豈に是れ死水裏に活計を作すにあらずや。分明に是れ青龍を駕與すれども、只だ是れ他騎ることを解せず、只だ應に分付して盧公に與ふべし。往々喚んで六祖と作すは非なり、曾て分付して人に與へて、用て人を打たんことを要すと道はば、卻つて箇の什麼をか成し去らん。昔雪竇自ら呼んで盧公と爲す、他迹を晦して自ら貽すと云

① 首山廣教録に、問ふ、「萬機喪盡する時如何ん、師曰く、「死水龍を藏さず。」  
 ② 分付は「わたす」なり、又、囑付と同じく「いひつける」ことにもなる。  
 ③ 駕與は「のせてやる」と譯す、駕は車に馬を付けるを云ふ、今、青龍を付けてやつても、其の車にえのらぬなり。

ふに題して云く、「圖畫當年洞庭を愛す、波心七十二峯青し。而今高臥して前事を思へば、添へ得たり盧公が石屏に倚ることを。」雪竇龍牙の頭上に去つて行かんことを要す、又人の錯り會せんことを恐る。所以に別に頌して人の疑解を翦らんことを要す。雪竇復た拈じて曰く、  
 【頌】この老漢、未だ勦絶するを得ず、復た一頌を成す。(灼然、能く幾人有りてか知る、自ら知る一半に較ることを。頼に末後の句有り)盧公に付したるも亦何ぞ憑らん。(盡大地恁麼の人を討ぬるに也た得難し、誰をして領話せしめん)坐倚將つて祖燈を繼ぐことを休めよ。(草裏の漢、黒山下に打入して坐す、鬼窟裏に落在し去れり)對するに堪へたり暮雲の歸つて未だ合せざるに、(一箇半箇、舉着せば即ち錯らん、果然として出不得)遠山限り無く碧厨厨。(備か眼を塞卻し、備か耳を塞卻す、深坑に没溺す、更に參せよ三十年)。  
 【評唱】盧公に付したるも亦何ぞ憑らん、何の憑據か有らん。直に須らく這裏に向つて恁麼に會し去るべし、更に株を守つて兔を待つこと莫れ。獨體前に一時に打破して、一點の事の胸中に在ること無く、放つて灑灑落落地ならしめば、又何ぞ必ずしも憑ることを要せん。或は坐し或は倚つて、佛法の道理を作すことを消ひざれ。所以に道ふ、「坐倚將て祖燈を繼ぐことを休めよ」と。雪竇一時に拈じ了れり、他箇の轉身の處有つて、末後自ら箇の消息を露す。此子の好處有り、道く、暮雲の歸つて未だ

④ 雪竇未だ洞庭翠峰に住せざる時、洞庭の圖畫を看ても、彼の景勝を受したり。  
 ⑤ 宋の蘇舜欽、水月院記の中に「山有り七十二惟だ洞庭を稱す。」  
 ⑥ 而今は翠峰に住してより。

合せざるに對するに堪へたり。且く道へ、雪竇の意什麼の處にか在る、暮雲歸つて合せんと欲して未だ合せざるの時、懶道へ作麼生。遠山限り無く碧層層、舊に依つて鬼窟裏に打入し去る。這裏に到つて得失是非、一時に坐斷して、灑灑落落として始めて些子に較れり。遠山限り無く碧層層、且く道へ、是れ文殊の境界耶、是れ普賢の境界耶、是れ觀音の境界耶。此に到つて且く道へ、是れ什麼人の分上の事ぞ。

國譯佛果園悟禪師碧巖錄卷第一終

國譯佛果園悟禪師碧巖錄卷第二

第二十一則

垂示に云く、法幢を建て宗旨を立す、錦上に花を鋪く、籠頭を脱し角駄を卸す。太平の時節、或は若し格外の句を辨得せば、舉一明三、其れ或は未だ然らずんば、舊に依つて伏して處分を聽け。

【本則】 擧す、僧、智門に問ふ、「蓮花未だ水を出でざる時如何。」(不疑の地に鉤在す、泥裏土塊を洗ふ、那裏よりか這の消息を得來る。)智門云く、「蓮花。」(一二三四五六七、天下の人を疑殺す。)僧云く、「水を出でて後如何。」(鬼窟裏に向つて活計を作す莫れ、又恁麼に去るや。)門云く、「荷葉。」(幽州は猶ほ自ら可なり、最も苦しきは是れ江南、兩頭三面、天下の人を笑殺す。)

【評唱】 ① 智門若し是れ機に應じて物を接せば、猶ほ些子に較れり。若し是れ衆流を截斷せば、千里萬里。且く道へ、這の蓮花、出水と未出水とは是れ一か是れ二か。若し恁麼に見得せば、懶に許す這の入處有ることを。然

【本則】

東嶺禪師云く、二十一則は、碧巖に類出する所の一百則、是れ嚮賣の述作にして、本、雲門宗より出づ、中に就いて最も雲門林才を以て、所依の者と爲すことを明す、智門和尚は、嚮賣の師とする所の尊宿のみ。

① 智門の光祿禪師は、香林澄遠の法嗣にして、嚮賣重顯の師なり。

② 顯祖は、事苑に、大面の貌、

も是の如くなりと雖も、若し是れ一と道はば、佛性を 頓頂し、眞如を 備  
 伺す。若し是れ二と道はば、心境未だ忘せず、解路上に落在して走らば、什  
 麼の歇期か有らん。且く道へ、古人の意作麼生、其の實は許多の事無し。  
 所以に投子道ふ、「爾但だ名言數句に著する莫れ、若し諸事を了せば、自然  
 に著せず、即ち許多の位次不同無けん。」爾一切の法を攝す、一切の法爾を  
 攝すること得ず。本得失夢幻、如許多の名目無し、強ひて佗の與に名字を  
 安立す可らず。爾諸人を誑説し得ん麼、爾諸人問ふが故に、所以に言有り、  
 爾若し問はずんば、我をして爾に向つて什麼をか道はしめてか即ち得ん。一切の事は皆是れ爾將ち得  
 來る、都て我が事に干らす。 ① 古人道く、「佛性の義を識らんと欲せば、當に時節因縁を觀すべし。」見  
 すや、雲門舉す、僧 靈雲に問うて云く、「佛未だ出世せざる時如何。」雲拂子を擧起す。僧云く、「出世  
 して後如何。」雲亦拂子を擧起す。雲門云く、「前頭は打著、後頭は打不著。」又云く、「出と不出とを説か  
 ずんば、何の處にか伊が問ふ時節有らん」と。古人一問一答、時に應じ節に應じて、許多の事無し。  
 爾言を尋ね句を逐はば、了に交渉無からん。爾若し能く言中に言を透得し、意中に意を透得し、機中  
 に機を透得して、放つて閑閑地ならしめば、方に智門答話の處を見ん。 ② 問ふ、「佛未だ出世せざる時  
 如何。」牛頭未だ四祖に見えざる時如何。斑石の内混沌未分の時如何。父母未生の時如何。」雲門道く、

玉浦云く、無分曉なり、塵鏡  
 暗昧の義なり、人生れて手無  
 く、冬瓜の如きを云ふなり。  
 ① 備伺は事苑に、「未だ器を成さ  
 ざるなり」なんでもないもの  
 也。  
 ② 百丈の語なり、もと是れ涅槃  
 經の文。  
 ③ 靈雲は鴻山の祐に嗣ぐ。  
 ④ 蜀本に、「問佛より父母未生の  
 時如何ん」迄を削る。

「古より今に至る、只だ是れ一段の事、是無く非無く、得無く失無く、生と未生と無し。」古人這裏に  
 到つて、 ① 一綫道を放つて、出有り入有り、若し是れ未了底の人ならば、 ② 扶籬摸壁、 ③ 依草附木、  
 或は他をして放下せしめ、又莽莽蕩蕩荒然たる處に打入し去る。若し是れ得る底の人ならば、二六時  
 中、一物に依倚せず。一物に依倚せずと雖も、若し一機一境を露さば、作麼生か他を摸索せん。這の  
 僧問うて道く、「蓮花未だ水を出でざる時如何。」智門云く、「蓮花。」便ち只だ  
 擱問の一答、妨げず奇特なることを。 ④ 諸方皆之を顛倒の語と謂ふ、那裏にか此  
 の如くならん。見すや當頭道く、「常に貴ぶらくは未だ口を開かざる已前、  
 猶ほ些子に較ることを。」古人機を露す處、已に是れ漏返し了れり。如今の  
 學者、古人の意を省せず、只管に去つて、出水と未出水とを理論す、什麼  
 の交渉か有らん。見すや僧、智門に問ふ、「如何なるか是れ般若の體。」門云  
 く、「蚌明月を含む。」僧云く、「如何なるか是れ般若の用。」門云く、「兔子懷  
 胎」と。看よ他此の如く對答す、天下の人他の語脈を討ね得ざることを。  
 或は人有て、夾山に問うて道く、「蓮花水を出でざる時如何」と。只だ他に對して道はん、「露柱燈  
 籠。」且く道へ、「蓮花と是れ同か是れ別か、水を出でて後如何。」他に對して道はん、「杖頭日月を挑げ、  
 脚下太た泥深し」と。爾且く道へ、是か不是か、且く錯つて定盤星を認むること莫れ。雪竇武敏だ慈悲、

① 綫は線に同じ、一條の小路を  
 通するなり。  
 ② 盲人の籬壁に依つて、摸索し  
 て行くが如し。  
 ③ 精靈孤魂の草木に依附するが  
 如し。  
 ④ 杜預の注に云く、草廣野に生  
 じて、莽莽然たるなり、蕩蕩  
 は廣遠の貌。  
 ⑤ 夾山は圓悟なり。

人の情解を打破す、所以に頌出す。

【頌】 蓮花荷葉君に報じて知らしむ。(老婆心切、見成公案、文彩已に彰る。) 出水は未出の時に何如れ。(泥裏に土塊を洗ふ、分開せば也た好し、備伺し去る可らず。) 江北江南王老に問はゞ、(主人公什麼の處に在る、王老師に問うて什麼か作ん、爾自ら草鞋を踏破す。) 一狐疑し了つて一狐疑せん。(一坑に埋卻せん、自らはれ爾疑ふ、疑情未だ息まざることを免れず、打つて云く、會すや。)

【評唱】 智門本是れ 浙人なり、得得として 川に入つて 香林に參す、既に

徹して卻回して、隋州の智門に住す。雪竇は是れ他の的子、見得して好く玄を窮め妙を極む。直に道ふ、「蓮花荷葉君に報じて知らしむ、出水は何ぞ未出の時に如かん」と。這裏人の直下に便ち會せんことを要す。山僧は道ふ、「未出水の時如何、露柱燈籠、出水の後如何、杖頭日月を挑げ、脚下ただ泥深し」と。爾且く錯つて定盤星を認むること莫れ、如今の人、人の言句を咬む者、甚麼の限りか有らん。爾且く道へ、出水の時は何の時節ぞ、未出水の時は何の時節ぞ、若し這裏に向つて見得せば、爾に許す親しく智門に見ゆることを。雪竇道く、「爾若し見すんば、江北江南王老に問へ。」雪竇の意に道く、「爾只管に江北江南に去つて、尊宿に出水と未出水とを問うて、江南に兩句を添へ得、江北に兩句を添

①東漸。

②蜀の四川。

③大唐に張、李、王等の姓多し、南泉姓は王、自ら王老師と稱す、今總に知識を指して王老と云ふ。

④漢書の文帝記註に曰く、狐の獸たる其の性疑多し、毎に氷河を渡るに、且つ聽き且つ渡る、故に疑ふ者を曰つて狐疑と稱するなり。

へ得、一重に一重を添へば、展轉して疑を生せん」と。且く道へ、何の時疑はざることを得去らん、野狐の疑多くして、氷凌上に行いて、以て水聲を聽いて、若し鳴らざれば方に河を過ぐ可きが如し。參學の人、若し一狐疑し了つて一狐疑せば、幾時か平穩を得去らん。

第二十二則

垂示に云く、大方外無く、細なること隣虚の若し。擒縱他に非ず、卷舒我れに在り。必ず粘を解き縛を去らんと欲せば、直に須らく迹を削り聲を吞むべし。人人要津を坐斷し、箇箇壁立千仞ならん。且く道へ、是れ什麼人の境界ぞ。試みに擧す看よ。

【本則】 擧す、雪峰衆に示して云く、「南山に一條の鼈鼻蛇あり、(怪を見て怪とせざれば其の怪自ら壞す、大小大の怪事、妨げず人をして疑着せしむ。) 汝等諸人切に須らく好く看るべし。」(因、一場の漏逗。) 長慶云く、「今日堂中、大に人有り喪身失命。」(普州の人賊を送る、己を以て人に方ぶ。) 僧、玄沙に擧示す。(同坑に異土無し、奴は婢を見て殷勤、同病相憐む。) 玄沙云く、「須らく是れ稜兄にして始めて得べし。然も此の如くなりとも雖も、我は即ち不慙麼。」(野狐精の見解を作すことを免れず、是れ什麼の消息ぞ、毒氣人を傷る。)

【本則】

東嶺禪師云く、二十二則、雲門宗はもと、馬大師に出で、雪峰玄沙の間に盛大なることを明す、是を以て之を考ふるに、五家皆全く雲門林才の宗を備ふるが、曹洞の五位、兼中至の如き、雲門林才の旨に

僧云く、「和尚作麼生。」(也た好く這の老漢を撻着す。)玄沙云く、「南山を用ひて什麼をか作さん。」(釣魚船上る謝三郎、只だ這の野狐精、此子に較れり。喪身失命するも也た知らず。)雲門拄杖を以て雪峯の面前に擲向して、怕る、勢を作す。(他を怕れて什麼か作ん、一子親しく得たり、一等は是れ精魂を弄す、諸人試みに辨じて看よ。)

【評唱】 爾若し平展せば、平展するに一任す、爾若し打破せば、打破するに一任す。雪峯は巖頭・欽山と同行なり、凡そ三たび投子に到り、九たび洞山に上る、後徳山に參じて、方に漆桶を打破す。一日巖頭を率ゐて欽山を訪はんとす、鰲山店上に至つて雪に阻てらる。巖頭毎日只だ是れ打睡す、雪峯は一向に坐禪す。巖頭喝して云く、「<sup>①</sup> 瞋眠し去れ。毎日上に、恰も七村裏の土地に似て相似たり。佗時後日、人家の男女を魔魅し去ることあるらん。」峰自ら點臂して云く、「某甲這裏未穩在、敢て自ら瞞せず。」頭云く、「我れ將に謂へり爾已後、孤峯頂上に向つて、草庵を<sup>②</sup> 盤結して、大教を播揚せん」と。猶は這箇の語話を作す、峯云く、「某甲實に未穩在。」頭云く、「爾若し實に此の如くならば、爾が見處に據つて、一一通じ來れ、是處は我れ爾が與に證明し、不是處は爾が與に<sup>③</sup> 剗却

參ぜざれば、全く辨了し難し、況んや兼中洞上究竟の位に於てをや。又鴻御宗は百々獨坐大雄峯の一機を離れず、法眼は普利全脫の旨、もと、玄沙、地藏の爲人方便の中より出づ、畢竟雲門林才に收歸す、是れが根基と爲る故なり。

① 瞋は玉簪に喫の貌。増一阿含經に云く、「世尊阿那律に告げて言く、汝寢寐す可し、然る所以は、一切の諸法、食に由つて存す、食せざれば存せず、眼は眼を以て食と爲す云云。」

② 盤曲結構。

③ 播布擧揚。

④ 剗は廣韻に割なり。」

せん。」峯遂に擧す、「鹽官の上堂に色空の義を擧するを見て、箇の入處を得たり」と。頭曰く、「此去つて三十年、切に忌む擧著することを。」峯又擧す、「<sup>⑤</sup> 洞山過水の頌を見て、箇の入處を得たり」と。頭云く、「若し與麼ならば、自救不了。」後徳山に到つて問ふ、「從上宗乘中の事、學人還つて分有りや也た無しや。」山打つこと一棒して、「什麼と道ふぞ」と。我れ當時桶底の脱するが如くに相似たり。頭遂に喝して云く、「爾道ふことを聞かすや、門より入る者は、是れ家珍にあらず」と。峯云く、「他後如何してか即ち是ならん。」頭云く、「他日若し大教を播揚せんと欲せば、一一自己の智襟より流出し將ち來つて、我が與に蓋天蓋地し去れ。」峯言下に於て大悟す。便ち禮拜し、起き來つて連聲に叫んで云く、「今日始めて是れ鰲山成道、今日始めて是れ鰲山成道」と。後、閩中に回つて、<sup>⑥</sup> 象骨山に住す、自ら貽して頌を作つて云く、「人生<sup>⑦</sup> 倏忽たり暫く、須臾、浮世那ぞ能く久しく居ることを得ん。<sup>⑧</sup> 嶺を出でて纔かに三十二に登とす、閩に入つて早く是れ四句餘。他の非頻頻に擧することを用ひざれ、己が過應に須らく<sup>⑨</sup> 旋旋に除くべし。<sup>⑩</sup> 滿朝朱紫の貴きに報じ奉る。閩王は<sup>⑪</sup> 怕れず金魚を佩ぶることを。」凡そ上堂、衆に示して云く、「一一蓋天蓋地、更に玄と説き妙と説かず、亦心と説き性と説かず、<sup>⑫</sup> 突然として獨露す。」

⑤ 傳燈十五洞山の章に云く、後因に水を過ぎ影を觀、大に前旨を悟る、因つて一偈有り、曰く、「切に忌む他に從ひ覺むることを、退々として我れと疎なり、我れ今爾り自ら往く處々渠れに逢ふことを得たり、渠れ今正に是れ我れ、我れ今是れ渠れにあらず、應に須らく懸崖に會して、方に如きに契ふことを得べし。」

⑥ 閩中は福州なり、便ち巖峰の鄉國。

⑦ 鄉云く、象骨は即ち雪峯の別山なり、形の象骨に似たるを



大火聚の如し、之に近ければ則ち面門を煉却す。太阿の劍に似たり、之を擬すれば則ち喪身失命す。若し也た佇思停機せば、則ち沒交涉。只た百丈、黄檗に問ふが如きんば、其の處よりか去來する。檗云く、「大雄山下菌を採つて去來す。」丈云く、「還つて大蟲を見る麼。」檗便ち虎聲を作す、丈便ち斧を拈じて斫る勢を作す。檗遂に百丈を打つこと一擲、丈吟吟として笑ふ。便ち歸つて陞座、衆に謂つて云く、「大雄山に一の大蟲有り、汝等諸人、切に須らく好く看るべし。老僧今日、親しく一口に遭ふ」と。趙州凡そ僧を見ては便ち問ふ、「曾て此間に到る麼。」云く、「曾て到る、」或は云く、「曾て到らず」と。州總に云く、「喫茶去」と。院主云く、「和尚尋常僧に問ふ、曾て到ると曾て到らざると、總に道ふ喫茶去と、意旨如何。」州云く、「院主。主應諾す。州云く、「喫茶去」と。紫胡門下に一牌を立つ、牌上に書して云く、「紫胡に一狗有り、上人の頭を取り、中人の腰を取り、下人の脚を取る、擬議すれば則ち喪身失命す」と。或は新到纔かに相看すれば、師便ち喝して云く、「狗を看よ」と、僧纔かに首を回せば、師便ち方丈に歸る。正に雪峯の「南山に一條の 鼈鼻蛇有り、汝等諸人切に須らく好く看るべし」

① 候忽は廣韻に、犬即ち走るなり。「たちまち」と訓す。  
② 名義集に云く、梵語摩羅毘曇、翻して須臾と爲す、一日一夜、共に三十須臾有り。  
③ 師飛猿巖を出づる時、宣宗の大中七年癸酉に當る、年三十二歳なり。  
④ 旋々は漸々の義なり。  
⑤ 朝廷に在りて、朱紫の官衣を被する貴人なり。  
⑥ 唐書に曰く、高宗、五品以上に給ひ、身に金魚袋を隨へ、以て召命の詐を防ぐ云々。  
⑦ 突は脱文に、犬の穴中より暫く出づるなり、犬の穴中に在るに从ふ。徐曰く、犬穴中に匿れて人を伺ふ、人之れを意はざるに突然として出づるなり。  
⑧ 以下二句大品般若の語なり。會元第四に衢州子湖岩の利隆

と道ふが如きんば、正當恁麼の時、爾作麼生か祇對せん。前蹤を躡まず、試みに請ふ道へ看ん、這裏に到つて、也た須らく是れ格外の句を會して始めて得べし。一切の公案語言、舉し得將ち來らば、便ち落處を知らん、看よ他の恁麼に衆に示すことを。且く爾が與に行と説き解と説かず、還つて情識を將つて測度し得ん麼。是れ他家の兒孫、自然に道ひ得て恰好なり。所以に古人道ふ、「言を承けては須らく宗を會すべし、自ら規矩を立する勿れ、言は須らく格外有るべく、句は須らく透關を要すべし。若し是れ語窠窟を離れざれば、毒海の中に墮在せん」と。雪峯恁麼に衆に示す、謂つ可し。無味の談、人口を塞斷すと。長慶・玄沙、皆是れ他家屋裏の人にし、方に他の恁麼の説話を會す。只だ雪峯の南山に一條の鼈鼻蛇有りと道ふが如きんば、諸人還つて落處を知る麼、這裏に到つて、須らく是れ通方の眼を具して始めて得べし。見すや、眞淨頌有り、云く、「鼓を打ち琵琶を弄す。相逢ふ 兩會家、雲門能く唱和す、長慶邪に隨ふことを解す。古曲音韻無し、南山の鼈鼻蛇、何人か此の意を知らん、端的はれ玄沙。」只だ長慶恁麼に祇對するが如きんば、且く道へ、意作麼生。這裏に到つて、擊石火の如く、閃電光に似て、方に構得す可し。若し纖毫も去り盡さざること有らば、便ち他底に構ること得じ、

禪師は、法を南泉に嗣ぐ。紫子に作る。  
① 稜伽云く、鼈鼻蛇は蛇の名なり、其の鼻鼈の如し、此の蛇最も毒なり、人を傷つくる、藥の醫すべき無し。  
② 此の二句は石頭參同契の語なり。  
③ 此の句、洞山初の語。  
④ 會元第十七に、寶峯克文雲庵眞淨禪師は、黃龍の南に嗣ぐ。兩會家は二人の名人なり、能書を會寫と云ひ、琴の上手を會彈琴と云ふ。  
⑤ 許は語助なり、許多、許久等の許の字に同じ。

◎可か惜しやく許こ。人ひと多おほく長ちやう慶けいの言ごん下かに向むかつて、情じやう解げを生しやうじて道だうふ、「堂だう中ちゆう纒じやうかに聞もん處じよ有あらば、便すなはち是これ喪さう身しん失しつ命めいせん」と。有ある者ものは道だうふ、「元げん一いつ星せい事じ無なし、平へい白はく地ち上じやうに這しや般はんの語ごを説といて人ひとを疑うたはしむ、人ひと他たの南なん山さんに一條いちじやうの鼈べつ鼻び蛇じや有ありと道だうふを聞きいて、爾なん便すなはち疑うたは著しやくす」と。若もし恁いん麼もに會あはせば、且しよ得とく沒もつ交かう涉せつ、只ただ他たの言ごん語ごの上うへに去さつて活くわつ計けいを作なす。既すでに恁いん麼もに會あはせずんば、又また作な麼も生せいか會あはせん。後こう來らい僧そう有あり、玄げん沙しゃに擧こ示じす、玄げん沙しゃ云いく、「須すらく是これ稜りやう兄ぎやうにして始はじめて得とべし。然しかも是この如ごとくなりと雖いくも、我われは即すなはち不ふ恁いん麼も。僧そう云いく、「和わ尚じやう又また作な麼も生せい。」沙しゃ云いく、「南なん山さんを用もちつて什麼なにか作なん」と。但ただ看みよ玄げん沙しゃの語ご中ちゆうに便すなはち出しゆつ身しんの處じよ有あることとを。便すなはち云いく、「南なん山さんを用もちつて什麼なにか作なん」と。若もし是これ玄げん沙しゃにあらすんば、也また大おほいに酬たう對たいし難かたからん。只ただ他た恁いん麼もに南なん山さんに一條いちじやうの鼈べつ鼻び蛇じや有ありと道だうふが如ごときんば、且しよく道だうへ、什麼なにの處じよにか在ある。這しやう裏りに到たうつて、須すらく是これ向かう上じやうの人ひとにして、方まに恁いん麼もの説せつ語ごを會あすべし。古こ人じん道だうふ、「釣てう魚ぎよ船せん上じやうの 謝しや三さん郎らう、南なん山さんの鼈べつ鼻び蛇じやを愛あいせず」と。卻かつて雲うん門もんに到たうつて拄しゆ杖じやうを以もちつて雪せつ峯ほうの面めん前ぜんに 擴くわく向かうして怕おそるる勢せいを作なす。雲うん門もん蛇じやを弄ろうするの手脚しやう有あつて、鋒ほう鉞げつを犯なさず、明みやう頭とうも也また打た著ちやく、暗あん頭とうも也また打た著ちやく、他た尋じん常じやう人じんの爲ためにすること、太たい阿あの劍けんを舞ますが如ごとくに相あ似にたり。有ある時ときは飛とんで人ひとの眉まゆ毛まう眼がん睫せつの上うへに向むかひ、有ある時ときは飛とんで三さん千せん里り外がいに向むかつて人ひとの頭かうを取とる。雲うん門もん拄しゆ杖じやうを擴くわくつて怕おそるる勢せいを作なす。且しよく是これ精せい魂こんを弄ろうするにあらすや、他た也また是これ喪さう身しん失しつ命めいすること莫なし麼も。作さく家けの宗しゆ師し、終つひに一いつ言ごん一いつ句ごの上うへに去さつて活くわつ計けいを

④玄沙因に僧問ふ、如何なるか  
是れ親切底の事、沙曰く、我  
れは是れ謝三郎。  
⑤涙は露なり。

作なさす、雪せつ資じ只ただ雲うん門もんの雪せつ峯ほうの意いに契けい證じやう得とくすることを受あするが爲ために、所こ以ゆに頰けん出しゆつす。

【頰】象ざう骨こつ巖がん高かううして人ひと到たうらす。(千せん箇ご萬まん箇ご摸も索さく不ふ着ちやく、公こうが境きやう界がいに非ひず。)到たうる者ものは須すらく是これ蛇じやを弄ろうするの手てなるべし。(是これ精せい、精せいを識しり、是これ賊ぞく、賊ぞくを識しる、群ぐんを成なし隊たいを作なし什麼なにか作なん。也また須すく是これ同どう火くわにして始はじめて得とべし。)稜りやう師し備び師し奈な何なんともせず。(一いつ狀じやうに領りやう過くわす、一いつ着ちやくを放はう過くわす。)喪さう身しん失しつ命めい多た少せうか有ある。(罪つみ重かさねて科かせず、平へい人じんを帶たい累るいす。)詔しよ陽やう知ちつて、(猶なほは些しや子しに較あれり、這しやうの老らう漢かん只ただ一いつ隻せき眼がんを具ぐす、老らう漢かん伎ぎ倆りやうを作なすことを免まぬれず。)重かさねて草くさを撥はたふ。(落らく草そうの漢かん什し麼もの用よう處じよか有あらん、果くわ然ぜんとして什麼なにの處じよにか在ある、便すなはち打たつ。)南なん北はく東とう西せい討たうぬるに處じよ無なし。(有ありや有ありや、閻えん黎り眼がん瞎せつす。)忽こつ然ぜんとして突とつ出しゆつす拄しゆ杖じやう頭とう。(看みよ高かうく眼がんを着きつよ、便すなはち打たたん。)雪せつ峯ほうに抛な對たいして大おほいに口くちを張はる。(自じ作さく自じ受じゆ、千せん箇ご萬まん箇ごを吞どん却きやくするも什麼なにの事じをか濟なさん、天てん下かの人ひと摸も索さく不ふ着ちやく。)大おほいに口くちを張はる閃せん電でんに同どうじ。(兩りやう重じゆうの公こう案あん、果くわ然ぜん、頼らいに末ま後ごの句ご有あり。)眉まゆ毛まうを剔てき起きすれば還かへつて見みえず。(蹠しやく過くわ了りやう也や、五ご湖こ四し海かい恁いん麼もの人ひとを覓みむ也また得と難がたし、如ごと今こん什麼なにの處じよにか在ある。)如ごと今こん藏ざうして乳にゅう峯ほうの前ぜんに在あり。(什麼なにの處じよに向むかつてか去さる、大おほ小せうの雪せつ資じも也また這しやうの去き就しゆを作なす、山さん僧そう今こん日にち也また一いつ口くちに遭あふ。)來きたる者ものは一いつ方ほう便べんを看みよ。(瞎せつ、脚かく跟げん下かに向むかつて看みること莫なし、上じやう座ざが脚かく跟げん下かを看み取しゆせよ、一いつ箭せんを着きつ了りやうれり。)師し高かう聲せいに喝かつして云いく、「脚かく下かを看みよ。」(賊ぞく過くわぎて後こう弓きゆうを張はる、第だい二に頭とう第だい三さん頭とう、重じゆう言ごん吃きつに當あたらず。)

【評唱】象ざう骨こつ巖がん高かううして人ひと到たうらす、到たうる者ものは須すらく是これ蛇じやを弄ろうするの手てなるべし。雪せつ峯ほう山さん下かに象ざう骨こつ巖がん

有り、雪峯機鋒高峻にして、人の他の處に到ること罕なり。雪竇は是れ他の屋裏の人、毛羽相似て、同聲相應じ、同氣相求む。也た須らく是れ通方の作者にして、共に相證明すべし。只だこの鼈鼻蛇、也た妨げず弄し難し、須らく是れ弄することを解して始めて得べし。若し弄することを解せずんば、反つて蛇に傷られん。五祖先師道く、「此の鼈鼻蛇、須らく是れ手脚を傷犯せざる底の機有つて、他の七寸上に於て、一捏に捏住して、便ち老僧と手を把つて共に行く。

長慶・玄沙、這般の手脚有り。雪竇道く、「稜師備師奈何ともせず」と。

人多く道ふ、「長慶・玄沙奈何ともせず、所以に雪竇獨り雲門を美む」と。

且得没交涉。殊に知らず三人の中、機得失無く、只だ是れ親疎有ることを。

且諸人に問ふ、什麼の處か是れ稜師備師奈何ともせず處、喪身失命多少か有る。此は長慶の今日堂中、大いに人有つて喪身失命すと道ふことを頌す。這裏に到つて須らく是れ蛇を弄するの手を以て、子細にして始めて得べし。雪竇他の雲門より出づ、所以に一時に撥卻して、獨り雲門一箇を存して道く、「詔陽知つて重ねて草を撥ふ」と。蓋し雲門他の雪峯の南山に一條の鼈鼻蛇有り、道ふ落處を知るが爲に、所以に重ねて草を撥ふと、雪竇頌して這裏に到つて、更に妙處有り、云く、「南北東西討ぬるに處無し」と。備道へ、「什麼の處にか在る、忽然として突出す拄杖頭」と。元來只だ這裏に在り、備便ち拄杖頭上に向

① 易乾の九五に曰く、「飛龍天に在り、大人を見るに利しと、何の謂ぞや、子曰く、「同聲相應じ、同氣相求む、水は濕に流れ、火は燥に就き、雲は龍に従ひ、風は虎に従ふ云云。」楞伽云く、「凡そ蛇は頭より頭に至る七寸、是れ其の至命の處なり云云。」

つて活計を作し去る可らず。雲門拄杖を以て、雪峯の面前に擲向して怖るる勢を作す、雲門便ち拄杖を以て鼈鼻蛇と作して用ふ。有る時は卻つて云く、「拄杖子化して龍と爲り、乾坤を吞卻し了れり。山河大地甚の處よりか得來る」と。只だ是の一條の拄杖子、有る時は龍と作り、有る時は蛇と作る。什麼と爲てか此の如くなる、這裏に到つて方に知る、古人の心は萬境に隨つて轉ず、轉處實に能く幽なりと道ふことを。頌して道く、「雪峯に抛對して大いに口を張る、大いに口を張る兮閃電に同じ」と。雪竇餘才有り、雲門の毒蛇を拈出して云く、「只だ這の大いに口を張る兮閃電に同じく相似たり、爾若し擬議せば、則ち喪身失命せん、眉毛を剔起すれば還つて見えず、什麼の處に向つてか去る。」雪竇頌したる、須らく活處に去つて人の爲にすべし。雪峯の蛇を將て自ら拈じ自ら弄す。妨げず殺活時に臨むことを、見んと要す麼。云く、「如今藏して乳峯の前に在り」と。

② 西天第二十三祖摩訶羅尊者付法の偈なり。  
③ 別は蠟燭の心を切るを云ふ、「ちよいとさる、目を張れば、必ず眉がちよいとあがる」なり。

④ 祖英集に、昭敏首座を逢ふなり。  
⑤ 窓々は曠遠の貌。

乳峯は乃ち雪竇山の名なり、雪竇頌有り云く、「石牕四に顧みれば滄溟窄し、寥寥として白雲の白きことを許さず。」長慶・玄沙・雲門、弄得すと雖も了に見ず、卻つて云く、「如今藏れて乳峯の前に在り、來る者は一に方便を看よ」と。雪竇猶ほ廉纖に涉ること有り、便ち用ひよと言はずして、卻つて高聲に喝して云く、「脚下を看よ」と。從上來多少の人有つてか拈弄する、且く道へ、還つて曾て人を傷著するか、曾て人を傷著せざるか。師便ち打す。

第二十三則

垂示に云く、玉は火を將て試み、金は石を將て試み、劍は毛を將て試み、水は杖を將て試む。稍僧門下に至つては、一言一句、一機一境、一出入、一挨拶、深淺を見んことを要し、向背を見んことを要す。且く道へ、什麼を將てか試みん、請ふ擧す看よ。

【本則】擧す、保福長慶遊山する次。(這の兩箇落草の漢)福、手を以て指して云く、「只這裏便ち是れ妙峯頂。」(平地上に骨堆を起す、切に忌む道着することを。地を掘りて深く埋めん。)慶云く、「是は則ち是、可惜許。」(若し是れ鐵眼銅睛にあらずんば幾んど惑了せられん、同病相憐む、兩箇一坑に埋卻せん。)雪竇著語して云く、「今日這の漢と共に遊山して、箇の什麼をか圖る。」(妨げず人の斤兩を減することを。猶ほ些子に較れり、傍人劍を按ず。)復た云く、「百千後無しとは道はず、只是れ少し。」(少賣弄、也た是れ雲居の羅漢。)後に鏡清に擧似す。(好有り惡有り。)清云く、「若し是れ孫公にあらずんば、便ち獨體野に逼きことを見ん。」(同道の者方を知る、大地茫茫として人を愁殺す、奴は婢を見て慙慙、設使ひ臨濟德山出で來るとも、也た須らく棒を喫すべし。)

【本則】東嶺禪師曰く、二十三則、保福、長慶、鏡清の三人、宗旨を商略し、以て我が宗五家、別に生涯有るの大事を立つることを明す。

【評唱】保福長慶鏡清、總て雪峯に承嗣す、他の三人同得同證、同見同聞、同拈同用、一出入、遞に相挨拶す。蓋し他は是れ同條に生ずる底の人なるが爲に、擧著すれば便ち落處を知る、雪峯の會裏に在つて、居常問答するは、只だ是れ他の三人なり。古人行住坐臥、此の道を以て念と爲す、所以に擧著すれば便ち落處を知る。一日遊山する次、保福手を以て指して云く、「只だ這裏便ち是れ妙峯頂」と。如今禪和子、恁麼に問著せば、便ち只だ口匾擔に似たり、頼に長慶に問著するに値ふ。備道へ、保福恁麼に道ふ、箇の什麼をか圖る、古人此の如く、他の有眼無眼を驗せんと要す、是れ他家裏の人、自然に他の落處を知つて、便ち他に對して道ふ、「是は則ち是、可惜許」と。且く道へ、長慶恁麼に道ふ、「意志如何。」一向に恁麼にし去る可らず、似たることは則ち似たり、等閑に一星事無きこと有ること罕なり、頼に是れ長慶他を識破す。雪竇著語して云く、「今日這の漢と共に遊山して、箇の什麼をか圖る。」且く道へ、什麼の處にか落在す。復云く、「百千年後無しとは道はず、只だ是れ少し。」雪竇點骨を解す、正に黃檗の禪無しとは道はず、只だ是れ師無しと道ふに似たり。雪竇恁麼に道ふ、也た妨げず險峻なることを。若し是れ同聲相應するにあらずんば、爭か此の如く孤危奇怪なることを得ん、此れ之を著語と謂ふ。兩邊に落在す、兩邊に落在すと雖も、卻つて兩邊に住せず。後鏡清に擧似す、清云く、「若し是れ孫公にあらずんば、便ち獨體野に偏きことを見ん」と、孫公は乃ち長慶の俗姓なり。

匾は「ひらたき」を云ふ、匾擔は「にひ棒」なり、「ひらたみ」ありて、申しわり、への字の形、故に言いはれくちもとに譬へたるなり。

見すや僧趙州に問ふ、「如何なるか是れ妙峯孤頂。」州云く、「老僧爾に這の話を答へず。」僧云く、「什麼と爲てか這の話を答へざる。」州云く、「我れ若し爾に答へば、恐らくは平地上に落在せん。」<sup>①</sup>教中に説く、妙峯孤頂の徳雲比丘、從來山を下らず、善財去つて參す、七日までも逢はず、一日卻つて別峰に在つて相見す。見え了るに及んで、卻つて他の與に一念三世、一切諸佛、智慧光明普見の法門を説く。徳雲既に山を下らず、什麼に因つてか、卻つて別峰に在つて相見す。若し他山を下ると道はば、教中に道ふ、徳雲比丘、從來會て山を下らず、常に妙峯孤頂に在りと、這裏に到つて、徳雲と善財との那裏に在る、自後李長者、葛藤を打し、頌し得て好し。道く、「妙峯孤頂は、是れ一味平等の法門、一一皆眞、一一皆全、無得無失、無是非の處に向つて獨露す、所以に善財見す」と。稱性の處に到つて、眼自ら見す、耳自ら聞かす、指自ら觸れざるが如く、刀自ら割かす、火自ら焼かす、水自ら洗はざるが如し。這裏に到つて、教中大いに老婆相爲にする處有り。所以に一線道を放ち、第二義門に於て、賓を立て主を立て、機境を立て、問答を立つ。所以に道ふ、「諸佛出世せず、亦涅槃有ること爲し、方便に衆生を度す、故に斯の如きの事を現す」と。且く道へ、畢竟作麼生か、鏡清雪竇恁麼に道ふことを免れ得去らん。當時拍拍相應すること能はず、所以に盡大地の人濁體野に徧し、鏡清恁麼に證し將

① 華嚴入法界品の説なり。

② 李通玄、棗柏大士と號す、華嚴合論四十卷を造る、傳は通載十三卷にあり。

③ 華嚴經兜率天宮菩薩藏集諸佛品第十に、金剛幢菩薩偈を以て頌して曰く、「如來出世せず、亦涅槃有ること無し、本願力を以て自在の法を顯現す。」

ち來り、那兩個恁麼に用ひ將ち來る。雪竇後面に頌出して更に顯煥たり。頌に云く、  
**【頌】** 妙峯孤頂草離離。(身に和して沒卻す、脚下已に深きこと數丈なり。)拈得分明誰にか付與せん。(用て什麼か作ん、大地人の知る没し、乾屎橛、何の用を作すにか堪へん、鼻孔を拈得し口を失卻す。)是れ孫公の端的を辨するにあらずんば、(錯、箭を看よ、賊を着け了るも也た知らず。)濁體地に著く幾人か知る。(更に再活せず、麻の如く粟に似たり、闍黎鼻孔を拈得し口を失卻す。)  
**【評唱】** 妙峯孤頂草離離、草裏に輓せば什麼の了期か有らん。拈得分明誰にか付與せん。什麼の處か是れ分明の處、保福の只だ這裏便ち是れ妙峯頂と道ふことを頌す。是れ孫公端的を辨するにあらずんば、孫公什麼の道理を見てか便ち云ふ、「是は則ち是、可惜許。只だ「濁體地に著く幾人か知らん」と云ふが如きんば、汝等諸人還つて知る麼。瞎。」

### 第二十四則

垂示に云く、高高たる峯頂に立つ、巖外も能く知ること莫し。深深たる海底に行く、佛眼も覷れども見えす。直饒眼流星に似、機掣電の如くなるも、未だ免れず靈龜尾を曳くことを。這裡に到つて、合に作麼生。試みに擧す看よ。

**【本則】** 擧す、劉鐵磨瀉山に到る。(妨げず溱泊し難し、這の老婆本分を守らす。)山云く、「老牯牛、汝

來也。點、探竿影草、什麼の處に向つてか警訛を見る。磨云く、「來日臺山に大會齋あり、和尚還つて去るや。」(箭虛に發せず、大唐に鼓を打てば新羅に舞ふ、放去は太だ速かに、收來は太だ遅し。瀉山身を放つて臥す。(中れり、備什麼の處に向つてか瀉山を見ん、誰か知る遠き煙浪に別に好思量有ることを)磨便ち出で去る。(過也、機を見て作す。)

【評唱】 劉鐵磨は(尼なり)擊石火の如く、閃電光に似たり、擬議すれば則ち喪身失命す。禪道若し緊要の處に到らば、那裏にか許多の事有らん。

他の作家相見、牆を隔てて角を見て、便ち是れ牛なることを知り、山を隔てて煙を見て、便ち是れ火なることを知るが如し。擲著すれば便ち動じ、捺著すれば便ち轉す。瀉山道く、「老僧百年後、山下の檀越家に向つて、一頭の水牯牛と作つて、左脇下に五字を書して云はん、瀉山僧某甲と。且く正當恁麼の時、喚んで瀉山、僧と作さんか即ち是、喚んで水牯牛と作さんか即ち是、如今の人間著すれば、管取して分疎不下。劉鐵磨は久參にして、機鋒峭峻なり、人號して劉鐵磨と爲す、瀉山を去ること十里にして庵を卓つ。一日去つて瀉山を訪ふ、山來るを見て便ち云く、「老牯牛、汝來也。」磨云く、「來日臺山に大會齋あり、和尚還つて去る麼。」瀉山身を放つて便ち臥す、磨便ち出で去る。備看よ、

【本則】

東嶺禪師云く、二十四則、瀉山の密作用、本、百丈獨坐大雄峯の大機用に在りて、彼此交徹し、最も須らく參取すべきを明すのみ。

①劉鐵磨は、俗姓劉氏の婦、出家して尼となり、潭州瀉山の近傍に草庵を結んで之に居る。

②管取は「うけあふ」と譯す、分疎は機鋒録に曰く「人の自ら其の事の是非を辨白する者を俗に分疎と曰ふ、分疎不下は「いひほどきえず」と譯す。

他一に説話の如くに相似たり、且つ是れ禪にあらず、又是れ道にあらず、喚んで無事の會と作し得ん麼。瀉山臺山を去ること自ら數千里を隔つ、劉鐵磨什麼に因つてか卻つて瀉山をして去つて齋せしめん。

且く道へ、意旨如何、這の老婆他の瀉山の説話を會して、絲來線去、一放一收、互に相酬唱す。兩鏡相照して、影像の觀る可き無きが如し、機機相副ひ、句句相投す。如今の人三搭すれども頭を廻さず、這の老婆一點も也た他を瞞すること得ず。這箇卻つて是れ世諦の情見にあらず、明鏡の臺に當り、明珠の掌に在るが如し。胡來れば胡現じ、漢來れば漢現す、是れ他向上の事有るを知る。所以に此の如し、如今只管無事の會を做す。五祖の演和尚道く、「有事を將て無事と爲すこと莫れ、往往に事は無事より生ず」と。備若し參得透し去らば、他の恁麼に尋常人の説話の如く一般なることを見ん、多く言語に隔碍せらる、所以に會せず、唯だ是れ知音にして、方に他底を會せん。只だ乾峯の如きんば衆に示して云く、「一を擧して二を擧することを得ず、一著を放過すれば、第二に落在す。」雲門衆を出でて云く、「昨日一僧有り、天台より來つて、卻つて南岳に往き去る。」乾峯云く、「典座今日普請することを得ざれ」と。看よ他の兩人、放つときは則ち雙放、收むるときは則ち雙收、瀉山下に之を境致と謂ふ。風塵草動するにも、悉く端

③搭は事苑類書に「打つなり」と注す、酌府に、木手搭とあれば、手にて打つことなり、又、衣類を衣桁に「うちかけ」ことを搭とあれば、其の意を含んで、後から人の肩へ手を打ち掛けて、たたくなり。「氣のはたらしめない、にぶき人」を云ふ。

④大慧政信寺の如山主講普説、乾峰の話を擧し畢りて云く「舊時叢林の中、日日普請す、今時の禪和家、十指水に沾さず、百事懐にせず、好衣服を著て、人天の供養を受けんこ

倪を究む、亦之を隔身の句と謂ふ。意通じて語隔つ、這裏に到つて、須らく是れ左撥右轉して、方にはれ作家なるべし。

【頌】 曾て鐵馬に騎つて重城に入る。戰に慣ふ作家、塞外は將軍、七事身に隨ふ。勅下つて傳へ聞く六國の清きことを。狗救書を銜む、寰中は天子、爭奈せん海晏河清なることを。猶ほ金鞭を握つて歸客に問ふ。

(是れ什麼の消息ぞ、一條の拄杖兩人扶かる、相招いで同じく往き、又同じく來る。)夜深けて誰と共に御街に行かん。(君は瀟湘に向ひ我は秦に向ふ、且く道へ、行いて什麼と作ん。)

【評唱】 雪竇の頌、諸方以て極則と爲す、一百頌の中、この頌最も理路を具す。中に就いて極妙、貼體分明に頌出す。曾て鐵馬に騎つて重城に入るとは、劉鐵磨恁麼に來るを頌す。勅下つて傳へ聞く六國の清きことをとは、瀉山の恁麼に問ふことを頌す。猶ほ金鞭を握つて歸客に問ふとは、磨の來日臺山に大會齋あり、和尚還つて去る麼と云ふを頌す。夜深うして誰と共に御街に行かんとは、瀉山の身を放つて便ち臥し、磨便ち出で去るを頌す。雪竇這般の才調有つて、急切の處をば急切の處に向つて頌し、緩緩の處をば緩緩の處に向つて頌す。風穴亦曾て拈す、雪竇の意に同じ、此の頌諸方皆之を美む。高高たる峯頂に立つて、魔外も能く知ること莫く、深深たる海底に行いて、佛眼も觀れども

とを要して、慚愧を生ぜざるに似ず、舊時這般の柄子無し、人毎に一柄の金刀、一柄の鋤頭有り、之を一日作さざれば一日食はずと謂ふ云々。

⑤ 端倪は本、莊子に出づ、類書要に「端倪は猶ほ端緒のごとし」とあり、はしくれを見て取つて、全體を知るの義なり。

見えず。看よ他の一箇は身を放つて臥し、一箇は便ち出で去る。若し更に周遮せば、一時に路を求むるとも見えず、雪竇の頌意最も好し。是れ曾て鐵馬に騎つて重城に入る、若し是れ同得同證にあらずんば、焉んぞ能く恁麼ならん。且く道へ、箇の什麼の意をか得たる、見すや、僧風穴に問ふ、「瀉山道く、「老牯牛、汝來也」と、意旨如何。」穴云く、「白雲深き處金龍躍る。」僧云く、「只だ劉鐵磨の來日臺山に大會齋あり、和尚還つて去る麼と道ふが如きんば、意旨如何。」穴云く、「碧波心裏玉兔驚く。」僧云く、「瀉山便ち臥す勢を作す、意旨如何。」穴云く、「老倒踈慵無事の日、閑眠高臥青山に對す。」此の意も亦雪竇と同じ。

第二十五則

垂示に云く、機、位を離れずんば、毒海に墮在す。語、群を驚さずんば、流俗に陷る。忽ち若し擊石火裏に緇素を別ち、閃電光中に殺活を辨せば、以て十方を坐斷して、壁立千仞なる可し。還つて恁麼の時節有ることを知るや。試みに擧す看よ。

【本則】 擧す、蓮華峰庵主、拄杖を拈じて衆に示して云く、「看よ頂門上に一隻眼を具す、也た是れ時の人の窠窟。」古人這裡に到つて、什麼としてか肯て住せざる。(虚空裏に向つて釘橛す可らず、權に化城を立す。)

【本則】 東嶺禪師曰く、二十五則蓮花峰庵主純ら雲門の機鋒を承ひ隠々として兼て、法眼宗の語要に似たることを明す。

衆無語。(千箇萬箇麻の如く粟に似たり、卻つて些子に較れり、可惜許。一棚の俊鶴)自ら代つて云く、「他の途路に力を得ざるが爲めなり。」(若し途中に向つて辨せば猶ほ半月程を争ふ、設使ひ力を得るも什麼を作すにか堪へん。豈に全く一箇無かる可けんや)復た云く、「畢竟如何。」(千人萬人只だ箇の裏に向つて坐卻す、千人萬人の中一箇兩箇會せん)又自ら代つて云く、「柳棟横に擔うて人を顧みず。直に千峰萬峰に入り去る。」(也た好し三十棒を與ふるに、只だ他の擔板なるが爲なり。腦後に腮を見れば與に往來すること莫れ。)

【評唱】 諸人還つて蓮花峰庵主を裁辨得する麼、脚跟也た未だ地に點せざることに在り。 國初の時、天台の蓮花峰に在つて庵を卓つ、古人既に得道の後、茅茨石室の中、折脚

鑑兒内に、野菜根を煮て喫して日を過す、且つ名利を求めず、放曠として縁に隨ふ。一轉語を垂れて、且つ佛祖の恩を報じ、佛心印を傳へんことを要す。纔に僧の來るを見れば、便ち拄杖を拈じて云く、「古人這裏に到つて、什麼と爲てか肯て住らざる」と。前後二十餘年、終に一人も答へ得る無し。只だ這の一間也た權有り實有り、照有り用有り、若し也た他の 罔續を知らば、一捏を消せず。爾且く道へ、什麼に因つてか、二十年此の如く問ふ。既に是れ宗師の爲す所、何が故に只だ一概を守る。若し箇裏に向つて見得せば、自然に情塵上に向つて走らす。凡そ二十年中、多少の人有つて、他の與に平展し下語して見解を呈し、伎倆を盡し盡す。

① 國初は、趙宋の太宗、初めて天下を統ぶるの時を云ふ。  
② 罔續は「わな、てくだ」と譯す。

設ひ箇の道ひ得る有るも、也た他の極則の處に到らず、況んや此の事は言句の中に在らずと雖も、言句に非ざれば即ち辨すること能はず。道ふことを見ずや、「道本言無し、言に因つて道を顯す」と。所以に人を驗する端的の處、口を下せば便ち知音、古人一言半句を垂るること、亦他無し、只だ爾が有ることを知るか、有ることを知らざるかを見んと要す。他人の會せざるを見て、所以に自ら代つて云く、「他の途路に力を得ざるが爲なり」と。看よ他道ひ得て自然に理に契ひ機に契ふことを、幾か會て宗旨を失却せん。 古人云く、「言を承けては須らく宗を會すべし、自ら規矩を立つること勿れ、如今の人の只管に撞將し去つて便ち了す、得ることは則ち得たり、争奈せん顛頂儻侗なることを。若し作家の面前に到つて、三要の語を將て、空に印し、泥に印し、水に印して他を驗すれば、便ち見ん方木圓孔に返して、下落の處無きことを。這裏に到つて、一箇の同得同證を討ぬるに、時に臨んで什麼の處に向つてか求めん。若し是れ有ることを知る底の人ならば、懷を開いて箇の消息を通せん、何の不可可有らん。若し人に遇はずんば、且く 卷いて之を懷にせん。且く爾諸人に問ふ、「拄杖子は是れ衲僧尋常用ふる底なり、什麼に因つてか卻つて道ふ途路に力を得ず」と。古人此に到つて肯て住らす、其の實は金屑

③ 華嚴の大疏の語なり。  
④ 石頭の語なり。  
⑤ 論語衛の靈公の篇に、子曰く、「君子なるかな蘧伯玉、邦道有れば則ち仕へ、邦道無ければ則ち卷いて之を懷にす可し。」  
⑥ 會元第五に云く、「潭州善道の章師沙汰に值うて乃ち行者と作りて石室に居る云々。」  
⑦ 沙汰とは「石沙をゆりて其中より金を攪り分ける」ことなり、會昌には、善惡に拘はらず、僧数を定限し、其餘は盡く還俗させたるなり、此れを沙汰に遭ふと云ふ。



貴しと雖も、眼に落ちて翳と成る。石室の善道和尚、當時沙汰に遭ふ、常に拄杖を以て衆に示して云く、「過去の諸佛も也た恁麼、未來の諸佛も也た恁麼、現前の諸佛も也た恁麼」と。雪峯一日僧堂前に拄杖を拈じて衆に示して云く、「這箇只だ中下根の人の爲にす。」時に僧有り、出でて問うて云く、「忽ち上上の人の來るに遇はん時如何。」峯拄杖を拈じて便ち去る。雲門云く、「我は即ち雪峯の打破して狼藉なるに似す。」僧問ふ、「未審し和尚如何。」雲門便ち打つ。大凡そ參問は、也た許多の事無し、備が外山河大地有ることを見、内見聞覺知有ることを見、上に諸佛の求む可き有ることを見、下に衆生の度す可き有ることを見るが爲なり。直に須らく一時に吐卻して、然る後十二時中、行住坐臥、打成一片なるべし。一毛頭上に在りと雖も、寬きこと大千沙界の若く、錢湯爐炭の中に居ると雖も、安樂國土に在るが如く、七珍八寶の中に居ると雖も、茅茨蓬蒿の下に在るが如し。這般の事若し是れ通方の作者ならば、古人の實處に到つて、自然に力を費さず、他人の他底を構得すること無きを見て、復た自ら微めて云く、「畢竟如何、又何奈ともすること得ず。」自ら云く、「柳標横に擔うて人を顧みず、直に千峰萬峰に入り去る。」這箇の意又作麼生、且く道へ、什麼の處を指してか。地頭と爲さん。妨げず句中に眼有り、言外に意有つて、自ら起きき自ら倒れ、自ら放ち自ら收むることを。豈に見すや、嚴陽尊者、路に一僧に逢ふ、拄杖を拈起して云く、「是れ什麼ぞ。」僧云く、「識らず。」嚴云く、「一條の拄杖も也た識らず。」嚴復

① 構得は「手に入れる」と譯す。  
 ② 古抄に云く、極則の處、又は落處を地頭と云ふ。

た拄杖を以て、地上に筍すること一下して云く、「還つて識る麼。」僧云く、「識らず。」嚴云く、「土窟子も也た知らず。」嚴復た拄杖を以て擔うて云く、「會す麼。」僧云く、「不會。」嚴云く、「柳標横に擔うて人を顧みず、直に千峰萬峰に入り去る。」古人這裏に到つて、什麼と爲てか肯て住らざる。雪竇頌有り、云く、「誰か機に當る、擧するに賺らす、亦還つて希なり。峭峻を摧殘し、玄微を銷鑠す。重關會て巨いに闢く。作者未だ歸を同じうせず。玉兔乍ち圓に乍ち缺く。金鳥飛ぶに似て飛ばず。盧老は知らず何の處にか去る。白雲流水共に依依」と。什麼に因つてか山僧は道ふ、「腦後に腮を見れば與に往來すること莫れ」と。纔かに計較を作さば、便ち是れ黒山の鬼窟裏に活計を作さん。若し見得徹し、信得及せば、千人萬人、自然に羅籠すれども住らず、奈何ともすること得ず、動著、擗著、自然に殺有り活有り。雪竇他の意に直に千峰萬峰に入り去ると道ふことを會して、方に始めて頌を成す。落處を知らんと要せば、雪竇の頌を看取せよ。云く、

【頌】 眼裡は塵沙耳裡は土。(憶憶三百擔、鶴鶴突突什麼の限りか有らん、更に恁麼の漢有り。)千峰萬峰肯て住せず。(爾什麼の處に向つてか去る、且く道へ、是れ什麼の消息ぞ。)落花流水太だ茫茫。(好箇の消息、閃電の機、徒に佇思するに勞す、左顧千生右顧萬劫。)眉毛を剔起すれば何の處にか去る。(脚跟下更に一對の眼を贈らん、元來只だ這裏に在り、還つて庵主の脚跟を截得するや、然も

③ 老子に、之を視れども見えざるを夷と云ひ、是を聽けども聞ざるを希と云ふ。擧すれば賺らす儼然たれども、是れを覓むれば、見聞に及ばず、亦還つて希なり、是れ不器の妙を形容せるなり、少希の意にあらず。

是の如しと雖も、也た須らく是れ這の田地に到つて始めて得べし、打つて云く、什麼と爲てか只だ這裏に在る。

【評唱】雪竇頌し得て甚だ好し、轉身の處有つて、一隅を守らず、便ち道ふ、「眼裏の塵沙耳裏の土」と、此の一句蓮花峰庵主を頌す。禿僧家這裏に到つて、上攀仰無く、下已躬を絶す、一切時中に於て、癡の如く兀に似たり。見すや南泉道く、「學道の人の、癡鈍の如くなる者也た得難し」と。禪月の詩に云く、「常に憶ふ南泉の好言語、斯の如く癡鈍なる者還つて希なり。」法燈云く、「誰人か此の意を知らん、一我をして南泉を憶はしむ。」南泉又云く、「七百の高僧、盡く是れ佛法を會する底の人なり。唯だ 盧行者のみ有つて、佛法を會せず、只だ道を會す、所以に他の衣鉢を得」と。且く道へ、佛法と道と相去ること多少ぞ。雪竇拈じて云く、「眼裏に沙を著ること得ず、耳裏に水を著ること得ず、或は若し箇の漢有つて、信得及し、把得住して、人の瞞を受けずんば、祖佛の言教、是れ什麼の熱碗鳴聲ぞ。便ち請ふ高く鉢囊を掛け、拄杖を拗折して、一員無事の道人なることを管取せよ。」又云く、「眼裏に須彌山を著得し、耳裏に大海水を著得ず。」

① 禪月詩集、山居二十首の中に「千巖萬壑路傾欹、杉樹深々として獨り脚を捲ふ、藥を割る童は漢碑を穿ち去り、花を採る蜂は燒煙を冒して歸る、閑行意を放にして流水を尋れ、靜坐頭を支へて落暉に到る、長に憶ふ南泉の好言語、斯くの如き鈍鈍なる者も還つて希なり。」

② 金陵清涼泰欽法燈禪師、寒山詩に擬する有り、云く、「今古應に除無かるべし、分明に目前に在り、片雲脫谷に生じ、孤鶴透天を下る、岸柳烟を含んで翠に、溪花雨を帯びて鮮なり、誰か此の意を知らん、我れをして南泉を憶はしむ。」

③ 盧行者は六祖なり。

一般の漢有つて、人の商量を受く。祖佛の言教、龍の水を得るが如く、虎の山に靠るに似たり。卻つて須らく鉢囊を挑起し、横に拄杖を擔うべし、亦是れ一員無事の道人なり。」復云く、「恁麼も也た得ず、不恁麼も也た得ず、然る後沒交涉、三員の無事道人の中、一人を選んで師と爲んことを要す。正に是れ這般の生鐵鑄就す底の漢。何が故ぞ、或は惡境界に遇ひ、或は奇特の境界に遇ふ。他の面前に到つて、悉く皆夢の如くに相似たり。六根有ることを知らず、亦且暮有ることを知らず。直饒ひ這般の田地に到るも、切に忌む寒灰死火を守つて、黑漫漫の處に打入し去ることを。須らく是れ轉身の一路有つて始めて得べし。見すや古人道く、「寒巖異草の青を守ることを莫れ、白雲を坐卻するも宗妙とせず。」所以に蓮花峰庵主道く、「他の途路に力を得ざるが爲なり」と。直に須らく是れ千峰萬峰に去つて始めて得べし。且く道へ、什麼を喚んでか千峰萬峰と作す、雪竇只だ他の柳棟横に擔うて人を顧みず、直に千峰萬峰に入り去ると道ふことを愛して、所以に頌出す。且く道へ、什麼の處に向つてか去る、還つて去處を知得する者有り麼。落花流水太だ茫茫、落花紛紛、流水茫茫、閃電の機、眼前是れ什麼ぞ。眉毛を剔起すれば何の處にか去る。雪竇什麼と爲てか也た他の去處を知らざる。只だ山僧が適來拂子を擧するが如きんば、且く道へ、即今什麼の處にか在る。備諸人若し見得せば、蓮花峰庵主と同參、其れ或は未だ然らすんば、三條椽下七尺單前に、試みに去つて參詳して看よ。

④ 管取は「うけあふて、してとれ」と譯す。

⑤ 大陽の玄、兼中到の頌なり。

第二十六則

【本則】 擧す、僧、百丈に問ふ、「如何なるか是れ奇特の事。」(言中に響有り、句裏に機を呈す、人を驚殺す、眼有りて曾て見ず。)丈云く、「獨坐大雄峰。」(凜凜たる威風四  
百州、坐者立者二俱に敗缺。)僧禮拜す。(俗例の衲僧、也た恁麼の人有  
りて恁麼の事を見んことを要す。)丈便ち打つ。(作家の宗師何が故ぞ、來  
言豊ならざれば、令虚りに行せず。)

【評唱】 機に臨んで眼を具して、危亡を顧みず。所以に道ふ、「虎穴に入ら  
ずんば、争か虎子を得ん」と。百丈尋常、虎の翅を挿むが如くに相似  
たり。この僧也た死生を避けず、敢て虎鬚を拵て便ち問ふ、「如何なるか  
是れ奇特の事」と、この僧也た眼を具す。百丈便ち他の與に擔荷して云  
く、「獨坐大雄峰。」其の僧便ち禮拜す。衲僧家須らく是れ未問已前の意を  
別つて始めて得べし。この僧禮拜す、尋常と同じからず、也た須らく是れ具眼にして始めて得べし。平  
生の心膽をして人に向つて傾けしむること莫れ、相識は還つて不相識の如し。只だこの僧問ふ、「如何  
なるか是れ奇特の事」と。百丈云く、「獨坐大雄峰」と。僧禮拜す、丈便ち打つ。看よ他放去する

【本則】

東嶺禪師曰く、二十六則百丈  
獨坐底は、是れ五家の端的底  
の處なるを明す、溈仰宗は、  
所作體用、全く此の中の旨よ  
り出づ。

① 書言故事に曰く、「已に強の勢  
を益すを、虎にして翼と曰  
ふ。」

② 傳燈百丈海章に、「檀信洪州新  
吳の界に請じて、大雄山に住  
せしむ、居處巖巖峻峻なるを  
以て、故に之を百丈と號す。」

ときは則ち一時に俱に是、收來するときは則ち蹤を掃ひ跡を滅す。且く道へ、他便ち禮拜する意旨如  
何。若し是れ好なりと道はば、甚に因つてか百丈便ち他を打つて什麼をか作さん。若し是れ不好な  
りと道はば、他の禮拜什麼の不得の處か有る。這裏に到つて、須らく是れ休咎を識り細素を別ち、千  
峰頂上に立向して始めて得べし。この僧便ち禮拜す、虎鬚を拵るに似て相似たり。只だ轉身の處  
を争ふ、頼に百丈の頂門に眼有り、肘後に符有つて、四天下を照破して、深く來風を辨するに値  
ふ。所以に便ち打つ、若し是れ別人ならば、他を奈何ともすること無し。この僧機を以て機に投じ、  
意を以て意を遣る、他所以に禮拜す。南泉云ふが如きんば、「文殊普賢、昨  
夜三更佛見法見を起す、各二十棒を與へて、二鐵圍山に貶向し去れり」と。  
時に趙州衆を出でて云く、「和尚の棒誰をして喫せしめん。」泉云く、「王老師  
什麼の過か有る。」州禮拜す、宗師家等閑に他の受用の處を見ず、纔かに當  
機拈弄の處に到れば、自然に活潑潑地なり。五祖先師常に説く、馬前の相撲の如くに相似たり、爾  
但だ常見聞聲色をして、一時に坐斷せしめて、把得定、作得主せば、始めて他の百丈を見ん。且く  
道へ、放過する時作麼生、雪竇の頌出するを看取せよ。云く、

③ 馬前の相撲は、方語に見んと  
要すれば即ち見よ、又云く、  
擬議すれば則ち失す、又云く、  
急に手脚を著けよ、又云く、  
地に倒れて便ち了す。作家の  
相見なり。

【頌】 祖域交馳す天馬駒。(五百年に一たび問生ず、千人萬人の中一箇半箇有り、子は父の業を承ぐ。)  
化門の舒卷途を同じうせず。(已に言前に在り、渠儂自由を得たり、他の作家の手段に還す。)電光石

火機變を存す。(劈面來也、左轉右轉、還つて百丈爲人の處を見るや也た無や。)笑ふに堪へたり人の來つて虎鬚を拵づることを。(好し三十棒を與ふるに、重賞の下には必ず勇夫有り、喪身失命を免れず、閑黎一着を放過す。)

【評唱】雪竇見得透して、方に乃ち頌出す。天馬駒は、日に行くこと千里、横行堅走、奔驟するこ  
と飛ぶが如くなるを方に天馬駒と名づく。雪竇百丈の祖域の中に於て、東に走つて西に向ひ、西に走つて東に向ひ、一來一往、七縱八橫、殊に少礙無きこと、天馬駒の如くに相似て、善能く交馳し、方に自由の處を見ることを頌す。這箇自らはれ他の馬祖の大機大用を得たり。見すや僧馬祖に問ふ、「如何なるか是れ佛法の大意。」祖便ち打つて云く、「我れ若し懶を打たずんば、天下の人我れを笑ひ去ること所在らん。」又問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」祖云く、「近前來、懶に向つて道はん。」僧近前す、祖劈耳に便ち掌して云く、「六耳謀を同じうせず。」看よ他恁麼に自在を得ることを、建化門中に於て、或は卷或は舒、有る時は舒卷處に在らず、有る時は卷舒處に在らず、有る時は卷舒俱に在らず。所以に道ふ、「塗を同じうして轍を同じうせず」と。此は百丈這般の手脚有ることを頌す。雪竇道く、「電光石火機變を存す」と、這の僧擊石火の如く、閃電光に似て、只だ些子機變の處在ることを頌す。巖頭道く、「物を卻くるを上と爲し、物を逐ふ

○漢書の西域傳に曰く、「大宛國に高山有り、其の上に馬有り、得可らず、因つて五色の母馬を取りて其の下に置く、與に集つて駒を生む、皆汗血なり、因つて天馬子と號す。」馬の二歳なるを駒と曰ふ。

を下と爲す、若し戰を論せば、箇箇轉處に立在す」と。雪竇道く、「機輪曾て未だ轉せず、轉すれば必ず兩頭に走る」と。若し轉不得ならば、什麼の用處か有らん、大丈夫の漢、也た須らく是れ些子の機變を識つて始めて得べし。如今の人只管に他に欸を供じて、他に鼻を穿却せらる、什麼の了期か有らん。這の僧電光石火の中に於て、能く機變を存して便ち禮拜す。雪竇道く、「笑ふに堪へたり人の來つて虎鬚を拵づることを。」百丈一箇の大蟲に似て相似たり。笑ふに堪へたり這の僧去つて虎鬚を拵づることを。

第二十七則

垂示に云く、一を問へば十を答へ、一を擧すれば三を明め、兔を見て鷹を放ち、風に因つて火を吹く。眉毛を惜まざることは則ち且く置く、只虎穴に入る時の如くんば如何。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、僧、雲門に問ふ、「樹凋み葉落つる時如何。」是れ什麼の時節ぞ、家破れて人亡し、人亡くして家破る。雲門云く、「體露金風。」(天を撐へ地を拄ふ、斬釘截鐵、淨裸裸赤灑灑、青霄に平歩す。)

【本則】東嶺禪師云く、二十七則、百丈獨坐底は、是れ雲門の言句彌々明了なることを明す。

【評唱】若し箇裏に向つて薦得せば、始めて雲門爲人の處を見ん。其れ或は未だ然らすんば、舊に依つて只だ是れ鹿を指して馬と爲さん、眼瞎し耳聾す、誰人か這の境界に到らん。且く道へ、雲門復た是れ他の話に答ふるとや爲さん、復た是れ他の與に酬唱すとや爲さん。

若し他の話に答ふと道はば、錯つて定盤星を認む。若し他の與に唱和すと道はば、且得没交涉、既に恁麼ならずんば、畢竟して作麼生。爾若し見得透せば、衲僧の鼻孔、一捏を消せず。其れ或は未だ然らずんば、鬼窟裏に打入し去らん。大凡そ宗乘を扶壁せんには、也た須らく是れ全身擔荷して、眉毛を惜まず、虎口に向つて身を横へて、他の横に拖き倒に拽くに任すべし。若し此の如くならずんば、争か能く人の爲にし得ん。這の僧箇の間端を致す、也た妨げず峻峻なり。若し尋常の事を以て他を看ば、只だ箇の閑事を管する底の僧に似ん。若し衲僧門下に據つて、命脈裏に去つて戯る時は、妨げず妙處有り。且く道へ、樹凋み葉落つる、是れ什麼人の境界ぞ。

史記評林第六に云く、趙高亂を爲さんと欲す、恐らくは群臣の聽かざらんことを、乃ち先づ驢を設く、鹿を持つて二世に獻じて曰く、「馬なり」と、二世笑つて曰く、「丞相誤てるか、鹿を指して馬と爲す、左右に問ふ、左右或は默し、或は馬と云うて以て趙高に阿順る、或は鹿と言ふ者あり、高因つて陰に諸の鹿と言ふ者の中に法を以てす、後に群臣皆高を畏る。

十八問の中、此れ之を辨主問と謂ひ、亦之を借事問と謂ふ。雲門一絲毫を移易せず、只だ他に向つて道ふ、「體露金風」と、答へ得て甚だ妙なり。亦敢て他の問頭に辜負せず。蓋し他の問處に眼有るが爲に、答處も亦端的なり。古人道く、「親切を得んと欲せば、問を將ち來つて問ふこと莫れ、若し是れ知音底ならば、舉著せば便ち落處を知らん。」爾若し雲門の語脈裏に向つて討ねば、便ち錯り了れり。只だ是れ雲門の句中に、多く人の情解を惹くことを愛す。若し情解の會を作さば、未だ免れず我が兒孫を喪することを。雲門恁麼に賊馬に騎つて賊を逐ふことを愛す。見ずや、僧問ふ、「如何なるか是れ

非思量の處。」門云く、「識情測り難し。」這の僧問ふ、「樹凋み葉落つる時如何。」門云く、「體露金風」と。句中妨げず要津を把斷して、凡聖を通せざることを。須らく他の一を舉すれば三を明め、三を舉すれば一を明むることを會すべし。爾若し他の三句の中に去つて求めば、則ち腦後に箭を抜く、他の一句の中に須らく三句を具すべし。函蓋乾坤の句、隨波逐浪の句、截斷衆流の句、自然に恰好せん。雲門三句の中、且く道へ、那句を用てか人を接せん試みに辨じて看よ。頌に曰く、

此の問答即ち三祖信心銘の語なり。  
古抄に腦後は急處なり、箭を抜くとも、必ず死するなり。  
石頭參同契の語。

【頌】 問既に宗有り。(深く來風を辨す、箭虚りに發せず。) 答も亦同じき  
彼(豈に兩般有らんや、鐘の扣くを待つが如し、功浪りに施さす。) 三句辨す可し。(上中下、如今是れ第幾句ぞ、須らく是れ三句の外に向つて薦取して始めて得べし。) 一鐵空に遶る。(中れり、過也、壑着磕着、箭新羅を過ぐ。) 大野兮涼颺颺風。(普天匝地、還つて骨毛卓堅することを覺ゆるや、放行し去れり。) 長天兮踈雨濛濛。(風浩浩、水漫漫、頭上漫漫、脚下漫漫。) 君見すや少林久坐未歸の客。(更に不啣嚙の漢有り、人を帶累殺す、黄河は頭上より瀉ぎ將ち來る。) 靜に依る熊耳の一叢叢。(開眼も也た着、合眼も也た着、鬼窟裏に活計を作す、眼睛し耳聾す、誰か這の境界に到らん、爾が版齒を打折することを免れず。)

【評唱】 古人道く、「言を承けては須らく宗を會すべし、自ら規矩を立つること勿れ」と。古人は言

虚に設けず、所以に道ふ、大凡そ箇の事を問はんには、也た須らく些子の好惡を識るべし。若し尊卑去就を識らず、淨觸を識らずして、口に信せて亂道せば、什麼の利濟か有らん。凡そ言を出し氣を吐くには、須らく是れ鉤の如く鉄の如く、鉤有り鏢有るべし、須らく是れ相續不斷にして始めて得べし。這の僧の問處宗旨有り、雲門の答處も亦然り。雲門尋常三句を以て人を接す、此は是れ極則なり。雪竇這の公案を頌すること、大龍の公案を頌すると相類す。三句辨す可し、一句の中に三句を具す。若し辨得せば則ち三句の外に透出せん。一鐵空に遶る、鐵は乃ち箭鏃なり、射得て太だ遠し、須らく是れ急に眼を著けて見て始めて得べし。若し也た見得分明ならば、以て一句の下に、大千沙界を開展す可し、此に到つて頌了る。雪竇餘才有り、所以に展開し頌出して道く、「大野兮涼颯颯颯、長天兮疎雨濛濛」と。且く道へ、是れ心か是れ境か、是れ立か是れ妙か。古人道く、「法法隱藏せず、古今常に顯露す」と。他問ふ、「樹凋み葉落つる時如何。」雲門道く、「體露金風」と。雪竇の意は只だ一境と作す。如今眼前、風拂拂地、是れ東南の風にあらずんば、便ち是れ西北の風ならん、直に須らく便ち恁麼に會して始めて得べし。倘若し更に禪道の會を作さば、便ち沒交涉。君見すや、少林久坐未歸の客、達磨未だ西天に歸らざる時、

①大凡そより不斷にして始めて得べしに至る、雲居膺禪師上堂の語、傳燈十七、會元十三、本章に見ゆ。  
 ②説文に、以て治器を持して鑄鑄す可き者、一に曰く、今の挾持の若し。  
 ③説文に、鉤は曲なり、古へ兵に鉤有り鏢有り、引き來るを鉤と曰ひ、推し去るを鏢と曰ふ。鏢或は鏢に作る。  
 ④第八十二則なり。  
 ⑤拂々當に隨々に作るべし、小風を隨と謂ふ、一には曰く、疾風通じて弗に作る。詩に「飄風弗弗」。

九年面壁す、靜悄悄地なり。且く道へ、是れ體露金風か、若し這裏に向つて、古今凡聖を盡して、乾坤大地、打成一片にして、方に雲門雪竇的爲人の處を見ん。靜に依る熊耳の一叢叢と。熊耳は即ち西京嵩山の少林なり。前山も也た千叢萬叢、諸人什麼の處に向つてか見ん。還つて雪竇爲人の處を見る麼、也た是れ靈龜尾を曳く。

### 第二十八則

【本則】 擧す、南泉、百丈の涅槃和尚に參す。丈問ふ、「從上の諸聖、還つて人の爲めに説かざる底の法ありや。」(和尚合に知るべし、壁立萬仞、還つて齒の落つることを覺ゆるや。)泉云く、「有り。」(落草し了れり、也た孟八郎にして什麼か作ん、便ち恁麼の事有り。)丈云く、「作麼生か是れ人の爲めに説かざる底の法。」(看よ他作麼生、看よ他手忙しく脚亂るることを、錯を將て錯に就く、但だ試みに問うて看よ。)泉云く、「不是心、不是佛、不是物。」(果然として敗闕を納る、果然として漏逗少からず。)丈云く、「説了也。」(他の與に説破すること莫れ、從他一平生を錯るることを、他の與に恁麼に道ふべからず。)泉云く、「某甲は只恁麼、和尚は作麼生。」(頼に轉身の處有り、長に與すれば即ち長、短に與

疾風通じて弗に作る。詩に「飄風弗弗」。  
 ②情は増顯に靜なり、説文に憂なり、詩に「憂心悄悄」ものさみしくひつそりしたること。  
 【本則】  
 ①東嶺禪師云く、二十八則、百丈獨坐底の大機、能く大用を發すること明す。  
 ②南泉普願禪師は、馬祖道一の法嗣なり。  
 ③林間録の下卷に云く、百丈山第二代法正禪師は大智の高弟、其の先き嘗て涅槃經を誦す、姓名を言はず、時に呼んで涅槃和尚と爲す、云々。惟政とあるは不可なり。

すれば即ち短、理長すれば則ち就く。丈云く、「我れ又是れ大善知識にあらず、争か説不説あることを知らん。」(看よ他手忙しく脚亂るることを、身を藏し影を露す、去死十分爛泥裏に刺有り、恁麼那ぞ我を賺す。)泉云く、「某甲不會。」(乍ちに恁麼なる可し、頼に不會に値ふ、會せば即ち偏が頭を打破せん、頼に這の漢の只だ恁麼なるに値ふ。)丈云く、「我れ太煞だ偏が爲めに説き了れり。」(雪上に霜を加ふ、龍頭蛇尾にして什麼か作ん。)

【評唱】這裏に到つて、也た即心不即心を消せず、非心不非心を消せず、直下に頂より足に至るまで、眉毛一莖も也た無くんば、猶ほ些子に較れり。即心非心、壽禪師之を表詮遮詮と謂ふ。此れ是の涅槃和尚は、法正禪師なり。昔時百丈に在つて西堂と作る、田を開いて大義を説く者なり、是の時南泉已に馬祖に見え了る、只だ是れ諸方に往いて決擇す。百丈此の一間を致す、也た大いに酬い難し。云く、「從上の諸聖、還つて人の爲に説かざる底の法有り麼。」若し是れ山僧ならば、耳を掩うて出で、這の老漢一場の懺悔を看ん。若し是れ作家ならば、他の恁麼に問ふを見て、便ち他を識破得せん。南泉只だ他の所見に據つて、便ち有りと道ふ、也た是れ孟八郎なり。百丈便ち錯を將て錯に就き、後に隨つて道く、「作麼生か是れ人の爲に説かざる底の法。」泉

①青原下十世韶國師法嗣慧日永明延壽禪師、表詮遮詮の問答は、宗鏡錄二十五に出づ、論及び教家に表遮の二詮有り、表詮は顯なり、即心なり、出世の心なり、直指の正名なり、遮詮は隱なり、非心なり、不出世の義なり、遮藏の正名なり。  
②古抄に云く、道理に由らずして、以て事を作す者を孟八郎と曰ふ。疎忽もの、亂暴もの。

云く、「不是心、不是佛、不是物」と。這の漢天上の月を貪り觀て、掌中の珠を失卻す。丈云く、「説了也。」可惜許、他の與に注破す。當時但だ劈脊に便ち棒して、他をして痛痒を知らしめん。然も是の如しと雖も、偏且く道へ、什麼の處か是れ説處。南泉の見處に據らば、不是心、不是佛、不是物、會て説著せず。且く偏諸人に問ふ、什麼に因つてか卻つて道ふ、「説了也」と、他の語下に又蹤迹無し。若し他不説と道はゞ、百丈什麼と爲てか卻つて恁麼に道ふ。南泉は是れ變通底の人、便ち後に隨つて一拶して云く、「某甲は只だ恁麼、和尚又作麼生」と。若し是れ別人ならば、未だ免れず。分疎不下なることを。争奈せん百丈は是れ作家、答處妨げず奇特なることを。便ち道ふ、我れ又是れ大善知識にあらず、争か説不説有ることを知らん。南泉便ち箇の不會と道ふ、是れ渠れ果して會し來つて不會と道ふか、是れ眞箇不會なること莫しや。百丈云く、我れ太煞だ偏が爲に説き了れり。且く道へ、什麼の處か是れ説處、若し是れ泥團を弄する漢ならん時は、兩箇漏々漏々。若し是れ二り俱に作家ならん時は、明鏡の臺に當るが如し。其の實は前頭は二り俱に作家、後頭は二り俱に放過。若し是れ具眼の漢ならば、分明に驗取せん。且く道へ、作麼生か他を驗せん。雪竇の頌出するを看よ。云く、

③恁麼は俗に此くの如しと言ふが如し。  
④分疎不下は、「いひほどきえず」と譯す。條理を分たぬをいふ。  
⑤漏々は分別せざる貌。手の付けられぬばもの。

【頌】祖佛從來人の爲めにせず。(各自に疆界を守る、條有れば條を攀づ、箇の元字脚を記得して、

心に在れば、地獄に入ること箭の如くならん。禿僧今古頭を競うて走る。草鞋を踏破し拄杖を拗折して高く鉢盂を掛けよ。明鏡臺に當つて列像殊なる。墮也破也、鏡を打破し來れ、爾と與に相見せん。一南に面つて北斗を見る。還つて老僧が佛殿に騎つて山門を出づるを見るや、新羅國裏會て上堂、大唐國裏未だ鼓を打せず。斗柄垂る。落處も也た知らず、什麼の處にか在る。討ぬるに處無し。瞎、可惜許、椀子地に落ちて椀子七八斤と成る。鼻孔を拈得して口を失脚す。那裏よりか這の消息を得來る、果然として恁麼、便ち打たん。

【評唱】 釋迦老子出世、四十九年、未だ會て一字を説かず。始め 光耀 土より、終り跋提河に至るまで、是の二中間に於て、未だ會て一字を説かず、恁麼に道ふ、且く道へ、是れ説か是れ不説か、如今龍宮に滿ち海藏に盈つ、且く作麼生か是れ不説。豈に見ずや。修山主道く、「諸佛出世せず、四十九年の説、達磨西來せず、少林に妙訣有り」と。又道く、「諸佛會て出世せず、亦一法の人に與ふる無し。但だ能く衆生の心を觀て、機に隨ひ病に應じて、藥を與へ方を施す。遂に三乘十二分教有り、其の實は祖佛、古より今に至るまで、會て人の爲に説かず、只だ這の不爲人、正に好し參詳するに。山僧常に説く、「若し是れ一句を添へて、甜蜜蜜地なるも、好好

宗鏡錄三十七に、佛の言く、光耀より終り鶴林に至るまで、一字を説かず、汝も亦聞かず。  
光耀土は即ち鹿野苑なり、跋提河は此に金河と云ふ、俱尸羅城に在り。上は華嚴、下は涅槃。  
會元第八に、杭州龍濟紹修禪師、初め法眼と同じく地蔵に參す云々。師頌有り云く、諸佛出世せず云々。  
以下遂に三乘十二分教有りに至る、汾陽無業國師の語、佛祖通載に出づ。

に觀來れば、正に是れ毒藥なり」と。若し是れ劈脊に便ち棒じ、驀口に便ち擲し、推し將ち出し去らば、方に始めて親切の爲人ならん。禿僧今古頭を競うて走る、到る處に是も也た問ひ、不是も也た問ひ、佛を問ひ祖を問ひ、向上を問ひ、向下を問ふ。然も此の如しと雖も、若し未だ這の田地に到らずんば、也た少くこと得ず。明鏡の臺に當つて列像殊なりと云ふが如きんば、只だ一句を消して、明白を辨す可し。古人道く、「萬象及び森羅、一法の所印なり」と。又道く、「森羅及び萬象、總に箇の中に在つて圓なり」と。神秀大師云く、「身は是れ菩提樹、心は明鏡臺の如し。時時勤めて拂拭せよ、塵埃を惹かしむること勿れ」と。大滿云く、「他只だ門外に在り」と。雪竇恁麼に道ふ、且く道へ、門内に在るか、門外に在るか、爾等諸人、各一面の古鏡有り、森羅萬象、長短方圓、一一中に於て顯現す。爾若し長短の處に去つて會せば、卒に摸索不著ならん。所以に雪竇道く、「明鏡臺に當つて列像殊なり」と。卻つて須らく是れ一南に面つて北斗を見るべし。既に是れ南に面つて、什麼と爲てか卻つて北斗を見る。若し恁麼に會得せば、方に百丈南泉相見の處を見ん、此の兩句に百丈の挨拶の處を頌す。丈云く、「我れ又是れ大善知識にあらず、争か説不説有ることを知らん」と。雪竇此に到つて、頌し得て死水裏に落在す、人の錯り會せんことを恐れて、卻つて自ら提起して云く、「即今目前斗柄垂る、爾更に什麼の處に去つて

以下二句法句經の文なり。  
汾陽の頌、臨濟の第一支法頌して云く、第一支法界廣うして無邊、森羅云々。  
五祖弘忍旁出の法嗣、傳燈第三、會元第一に傳有り。  
五祖弘忍大師、大滿禪師と諱す、此の語六祖壇經に見ゆ。



か討ねん」と。爾纒に鼻孔を拈得せば口を失卻し、口を拈得せば鼻孔を失卻し了らん。

第二十九則

垂示に云く、魚行けば水濁り、鳥飛べば毛落つ。明かに主賓を辨じ、洞かに縑素を分つ。直に當臺の明鏡、掌内の明珠に似たり。漢現じ胡來り、聲に彰れ色に顯る。且く道へ、什麼としてか此の如くなる。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、僧、大隋に問ふ、「劫火洞然として、大千俱に壞す。未審し這箇壞か不壞か。」(這箇是れ什麼物ぞ、這の一句天下の禪僧摸索不着、預め掻いて痒を待つ。)隋云く、「壞。」無孔の鐵鎚當面に擲つて鼻孔を沒卻す、未だ口を開かざる已前、勘破了也。僧云く、「恁麼ならば則ち他に隨ひ去るや。」(沒量の大人語脈裏に轉卻せらる、果然として錯りて認む。)隋云く、「他に隨ひ去る。」(前箭は猶ほ軽く後箭は深し、只だ這箇多少の人摸索不着、水長せば船高く、泥多ければ佛大なり。若し他に隨ひ去ると道は、什麼の處にか在る、若し他に隨ひ去らずと道は、又作麼生、便ち打つ。)

【本則】東嶺禪師云く、二十九則百丈獨坐の端的、自然に三祇と百劫の諸妄想とを超越するを明す。  
①長慶の大安百丈に嗣ぐ、大隋の眞は百丈の法孫なり。

【評唱】大隋の法眞和尚は、大安禪師に承嗣す。乃ち東川鹽亭縣の人なり、六十餘員の善知識に參見す。昔時瀉山の會裏に在つて火頭と作る。一日瀉山問うて云く、「子此に在ること數年、亦箇の間を致し來つて如何と看ることを解せず。」隋云く、「某甲をして箇の什麼を問はしめてか即ち得ん。」瀉山云く、「子便ち會せずんば、如何なるか是れ佛と問へ。」隋手を以て瀉山の口を掩ふ。山云く、「汝已後に箇の掃地の人を覓むるも也た無けん。」後川に歸つて先づ、朔口山の路次に於て、煎茶して往來を接待すること凡そ三年、後方に出世し山を開いて大隋に住す。僧有つて問ふ、「劫火洞然として、大千俱に壞す、未審し這箇壞か不壞か。」這の僧只だ教意に據り來つて問ふ、教中に云く、「成住壞空、三災劫起つて、壞して三禪天に至る」と。這の僧元來話頭の落處を知らず、且く道へ、這箇是れ什麼ぞ、人多く情解を作して道ふ、「這箇は是れ衆生の本性」と。隋云く、「壞。」僧云く、「恁麼ならば則ち他に隨ひ去るや。」隋云く、「他に隨ひ去る。」只だ這箇、多少の人情解して、摸索不着なり。若し他に隨ひ去ると道は、什麼の處にか在る。若し他に隨ひ去らずと道は、又作麼生。道ふことを見すや、「親切を得んと欲せば問を將ち來つて問ふこと莫れ」と。後僧有り、修山主に問ふ、「劫火洞然として、大千俱に壞す、未審し這箇壞か不壞か。」山主云く、「不壞。」僧云く、「什麼と爲てか不壞。」主云く、「大千に同じきが爲なり、壞も也た人を碍塞殺し、不壞も也た人を碍塞殺す。其の僧既に大隋の説話を會せず、是れ他也た妨げ

①朔口山は蜀に在り。  
②仁王經の偈文なり。  
③俱舍の世間品、法苑珠林の劫量篇等に詳なり。  
④三災は水火風なり。  
⑤首山念の語なり。  
⑥修山主は、青原下八世羅漢環の法嗣、傳燈二十四、會元第八に傳あり。

す此の事を以て念と爲して、卻つて此の間を持して、直に舒州の投子山に往く。投子問ふ、「近離甚の處ぞ。」僧云く、「西蜀の大隋。」投云く、「大隋何の言句か有りし。」僧遂に前話を擧す、投子香を焚き禮拜して云く、「西蜀に古佛有つて出世す、汝且く速かに回れ。」其の僧復た回つて大隋に至る、隋已に遷化す、この僧一場の懷懼。後に唐の僧景蓮と云ふもの有り、大隋に題して云く、「了然として別法無し、誰か道ふ南能を印すと。一句他に隨ふ語、千山、禿僧を走らしむ。蚤寒うして砌葉に鳴き、鬼夜龕燈を禮す、吟じ罷む孤窓の外、徘徊して恨勝へす」と。所以に雪竇後面に此の兩句を引いて頌出す。如今也た壞の會を作すことを得ず、畢竟作廢生か會せん、急に眼を著けて看よ。

- ① 景蓮は詩僧なり、
- ② 大隋の塔を拜し、此の詩を題するなり。
- ③ 南能は六祖なり。

【頌】 劫火光中に問端を立つ。(什麼と道ふぞ、已に是れ錯り了れり。) 禿僧猶ほ滯る兩重の關。(此の人を坐斷して如何が救ひ得ん、百匝千里也た脚頭脚底有り。) 憐む可し一句他に隨ふの語。(天下の禿僧這般の計較を作す、千句萬句も也た消得せず。什麼の他の脚跟を截斷し難き處か有らん。) 萬里區區として獨り往還す。(業識茫茫蹉過するも也た知らず、自らはれ他草鞋を踏破す。)

【評唱】 雪竇機に當つて頌出す、句裏に出身の處有り。劫火光中に問端を立つ、禿僧猶ほ滯る兩重の關。這の僧の問處、先づ壞と不壞とを懷く、是れ兩重の關なり。若し是れ得底の人ならば、壞と

道ふも也た出身の處有り、不壞と道ふも也た出身の處有り。憐む可し一句他に隨ふの語、萬里區區として獨り往還す。這の僧此を持して投子に問ひ、又復た大隋に回ることを頌す。謂つ可し萬里區區たりと。

### 第三十則

【本則】 擧す、僧、趙州に問ふ、「承り聞く、和尚親しく南泉に見ゆと、是なりや否や。」(千問一見に如かず、拶、眉八字に分る。) 州云く、「鎮州に大羅蔔頭を出す。」(天を撐へ地を拄ふ、斬釘截鐵、箭新羅を過ぐ、腦後に腮を見れば、與に往來すること莫れ。)

【評唱】 這の僧也た是れ箇の久參底、問中妨げず眼有り、爭奈せん趙州は是れ作家、便ち他に答へて道く、「鎮州に大羅蔔頭を出す」と。無味の談、人口を塞斷すと謂ふ可し。這の老漢大いに箇の白拈賊に似て相似たり。爾纔かに口を開かば、便ち爾が眼睛を換卻す。若し是れ特達英靈底の漢ならば、直下に擊石火の裏、閃電光の中に向つて、纔かに擧著するを聞いて、別起して便ち行かん。苟し或は佇思停機せば、喪身失命することを免れ

- 【本則】 東嶺禪師云く、三十則、百丈獨坐底の端的、自ら趙州穩坐の地に歸するを明す。
- ① 別起は「ちよいと、たつ」と譯す。
- ② 澄散聖は、青原下八世巴陵鑒の法嗣なり、會元十五に傳あり。
- ③ 罔續は「わな、てくだ」と譯す。
- ④ 遠錄公は、南嶽下十世、葉縣省の法嗣、會元十二に傳あり。
- ⑤ 説文に、傍は近なり、暫は目を過ぐるなり。直に指すに非

す。江西の澄散聖、判じて之を東問西答と謂ふ、喚んで答話せず、他の困績に上らずと作す。若し恁麼に會せば争か得ん。遠錄公云く、「此は是れ、傍警の語、九帶の中に收在す。若し恁麼に會せば、夢にも未だ夢見ざること、在らん、更に趙州を帶累し去る。有る者は道く、「鎮州從來大蘿蔔頭を出す、天下の人皆知る、趙州從來南泉に參見す、天下の人皆知る。這の僧卻つて更に問うて道ふ、「承り聞く和尚親しく南泉に見ゆ」と是なりや否や。」所以に州他に向つて道ふ、「鎮州に大蘿蔔頭を出す」と、且得没交涉。都て恁麼に會せず、畢竟作麼生か會せん、他家自ら通霄の路有り。見すや、僧九峰に問ふ、「承り聞く和尚親しく延壽に見え來ると是なりや否や。」峯云く、「山前麥熟すや也た未だしや」と。正に趙州の此の僧に答ふる話に對得す。渾て兩箇無孔の鐵鎚に似たり、趙州老漢、是れ箇の無事底の人、偏輕輕に問著すれば、便ち偏が眼睛を換卻す。若し是れ有ることを知る底の人ならば、細に嚼み來つて嚙まん、若し是れ有ることを知らざる底の人ならば、一に渾崙に箇の粟を呑むに似ん。

【頌】鎮州に大蘿蔔を出す。(天下の人知る、切に忌む道着することを。

一六〇

すして、傍きの方から、ちらりと、消息を見せる」なり。

●會元遠錄公の章に云く、師暮年會聖巖に休し、佛祖の奥義を叙して九帶を作りて曰く、「佛正法眼帶、佛法藏帶、理貫帶、事實帶、理事縱橫帶、屈曲垂帶、妙叶兼帶、金針雙鎖帶、平懷常寶帶。」

●鼓山晏の語、會元第七、太原李上座の章に見ゆ。

●青原下八世延壽輪の法嗣なり傳燈に云く、廬山歸宗道詮禪師云々、開寶五年洪の師林仁肇請じて珂陽九峰の隆濟院に居せしめて、宗旨を闡揚せしむ。

●青原下七世保福展の法嗣、傳燈廿二、會元第八に傳あり。

●頌會に、渾論は未だ相離れざる貌、方語に、其の味を知らず、渾崙の人は粟を丸呑にする、故に味を知らざるなり。

一回擧着すれば一回新なり。天下の衲僧則を取る。(争奈せん不恁麼なることを。誰か這の閑言長語を用ひん。)只知る自古と自今と。(半開半合、麻の如く粟に似たり、自古も也た不恁麼、如今も也た不恁麼。)争か辨せん。鶴は白く鳥は黒きことを。(全機穎脱す、長者は自ら長、短者は自ら短、識得する者は貴し、也た辨することを消得せず。)賊賊。(咄、更に是れ別ならず、自らは是れ擔枷過狀。)衲僧の鼻孔曾て拈得す。(穿過了也、裂轉。)

【評唱】鎮州に大蘿蔔を出す、偏若し他を取つて極則と爲ば、早く是れ錯り了れり。古人手を把つて高山に上す、未だ免れず傍觀の者晒ふことを。人皆這箇は是れ極則の語と道ふことを知つて、却つて畢竟して極則の處を知らず。所以に雪竇道く、「天下の衲僧則を取る。只だ知る自古も自今も、争か辨せん、鶴は白く鳥は黒きことを。」今人も也た恁麼に答へ、古人も也た恁麼に答ふることを知ると雖も、何ぞ曾て緇素を分得し來らん。雪竇道く、「也た須らく是れ他の石火電光の中へ去つて、其の鶴は白く鳥は黒きことを辨じて始めて得べし。」公案此に到つて頌了れり。雪竇自ら意を出して、活潑潑の處に向つて更に偏に向つて道ふ、「賊賊。衲僧の鼻孔曾て拈得す」と。三世の諸佛も也た是れ賊、歷代の祖師も也た是れ賊。善能く賊と作つて人の眼睛を換へて、手脚を犯さざることは、獨り趙州を許す。且く道へ、什麼の處か是れ趙州善く賊と做る處。鎮州に大蘿蔔頭を出す。

國譯佛果園悟禪師碧巖錄卷第三終

國譯佛果園悟禪師碧巖錄卷第四

第三十一則

垂示に云く、動するときは則ち影現じ、覺するときは則ち冰生ず。其れ或は不動不覺なるも、野狐窟裡に入ること免れず。透得徹し、信得及して、絲毫の障翳無くんば、龍の水を得るが如く、虎の山に靠るに似たり。放行するや瓦礫光を生じ、把定するや眞金色を失す。古人の公案、未だ周遮を免れず、且く道へ、什麼邊の事をか評論する。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、麻谷錫を持して章敬に到り、禪床を遠ること三匝、錫を振るふこと一下して、卓然として立つ。(曹溪の様子一模に脱出す、直に得たり天を驚し地を動かすことを。)敬云く、「是是。」(泥裏に土塊を洗ふ、一船の人を賺殺す、是れ什麼の語話ぞ、繫驢橛子。)雪竇著語して云く、「錯。」(放過せば則ち不可、猶ほ一着を較くこと在り。)麻谷又南泉に到り、禪床を遠ること三匝、錫を振るふこと一下して、卓然として立つ。(依前として泥裏に土塊を洗ふ、再運前來、蝦跳れども斗を出です。)泉云く、「不是不是。」(何ぞ承當せざる、人を殺すに眼を眨せず、是

【本則】東嶺禪師云く、三十一則、悟後、人に逢ふの大事、馬師の法子麻谷を以て則と爲し、永嘉を以て基と爲し、支策を以て、宗門の表準と爲すを明す。

れ什麼の語話ぞ。雪竇著語して云く、「錯。」(放過せば不可。)麻谷當時云く、「章敬は是と道ひ、和尚は什麼として不是と道ふ。」(主人公什麼の處にか在る、這の漢元來人の舌頭を取る、漏逗し了れり。)泉云く、「章敬は則ち是、是れ汝は不是。」(也た好し人を殺しては須らく血を見るべし、人の爲にせんには須らく爲に徹せしむべし、多少の人を瞞卻し來る。此は是れ風力の所轉、遂に敗壞を成す。(果然として他に籠罩せらる、自己を争奈何せん。)

【評唱】古人の行脚、叢林を徧歴して、直に此の事を以て念と爲し、他の曲柔木床上の老和尚、具眼か不具眼かを辨せんことを要す。古人は一言に相契はば即ち住り、一言に契はざれば即ち去る。看よ他の麻谷章敬に到つて禪床を遠ること三匝、錫を振るふこと一下、卓然として立つ。章敬云く、「是是」と、殺人刀活人劍、須らく是れ本分の作家なるべし。雪竇云く、「錯」と、兩邊に落在す。爾若し兩邊に去つて會せば、雪竇の意を見ず、佗卓然として立つ。且く道へ、佗什麼の事の爲ぞ、雪竇什麼と爲てか卻つて錯と道ふ、什麼の處か是れ他の錯處、章敬道く、是と、什麼の處か是れ是處、雪竇坐ながら判語を讀むが如し。麻谷箇の是の字を擔ふて、便ち去つて南泉に見え、依前として禪床を遠ること三匝、

① 會元第三に、婺州五洩山の靈默禪師、石頭に謁して便ち問ふ、「一言に相契はば即ち住り、契はざれば即ち去らん云云。」  
 ② 麻谷山資微禪師は、西巖下二世、馬祖一の法嗣、傳燈第七、會元第三に傳あり。  
 ③ 章敬懷惲、馬祖の法嗣、傳、會元第三、傳燈第七にあり。  
 ④ 官府公庭、訟へ其の事を究め問うて、既に一決する時は、則ち吏官判語を作りて、之を案牘に結す、而して訟人に對して判語を讀んで、是非を決斷するなり。裁判判決の語なり。

錫を振るふこと一下、卓然として立つ。泉云く、「不是不是」と、殺人刀活人劍、須らく是れ本分の宗師なるべし。雪竇云く、「錯、」章敬道く、「是是、」南泉云く、「不是不是」と、爲復た是れ同か是れ別か。前頭は是と道ふ、什麼と爲てか也た錯、後頭は不是と道ふ、什麼と爲てか也た錯。若し章敬の句下に向つて薦得せば、自救も也た不了、若し南泉の句下に向つて薦得せば、祖佛の與に師と爲る可し。然も恁麼なりと雖も、衲僧家須らく是れ自ら肯ふて始めて得べし。一向に人の口辯を取ること莫れ、他の問既に一般、什麼と爲てか一箇は是と道ひ、一箇は不是と道ふ。若し是れ通方の作者にして、大解脱を得る底の人ならば、必ず須らく別に生涯有るべし。若し是れ機境忘せざる底ならば、決定して這の兩頭に滞在せん。若し古今を明辨し、天下の人の舌頭を坐斷せんと要せば、須らく是れ這の兩錯を明取して始めて得べし。後頭に至るに及んで、雪竇の頌も也た只だ這の兩錯を頌す、雪竇活鱖鱖の處を提げんことを要す。所以に此の如し、若し是れ皮下に血有る底の漢ならば、自然に言句中に向つて解會を作さず、繫驢樞上に向つて道理を作さず、有る者は道ふ、「雪竇麻谷に代つて這の兩錯を下す」と、什麼の交渉か有らん。殊に知らず古人の著語、要關を鎖斷することを。這邊も也た是、那邊も也た是、畢竟這の兩頭に在らず。慶藏主道く、「錫を持って禪床を遠る、是と不是と俱に錯、其の實は亦此に在らず」と。爾見すや、永嘉、曹溪に到つて六祖に見ゆ、禪床を遠ること三匝、錫を振るふこと一下、卓然として立つ。祖云く、「夫れ沙門は、三千の威儀、八萬の細行を具す、大徳何れの方より來つて、大我慢を

生ず」と。什麼と爲てか六祖卻つて道ふ、他大我慢を生ずと。此箇也た是と説かず、也た不是と説かず、是と不是と、都て是れ繫驢概。唯だ雪竇のみ有つて兩錯を下す、猶ほ些子に較れり。麻谷云く、「章敬は是と道ひ、和尚は何と爲てか不是と道ふ。」この老漢眉毛を惜まず、漏逗少からず。南泉道く、「章敬は則ち是、是れ汝は不是。」南泉謂つ可し、兔を見て鷹を放つと。慶藏主云く、「南泉忒煞だ郎當、不是と云ふて便ち休せんに、更に佗の與に過を出して道ふ、此れは是れ風力の所轉、終に敗壞を成す」と。圓覺經に云く、「我れ今此の身は、四大和合、所謂髮毛爪齒、皮肉筋骨、髓腦垢色は、皆地に歸し、唾涕膿血は、皆水に歸し、暖氣は火に歸し、動轉は風に歸す、四大各離るれば、今者の安身、當に何の處にか在らん。」佗の麻谷、錫を持して禪床を遶る、既に是れ風力の所轉、終に敗壞を成す。且く道へ、畢竟心宗を發明する底の事、什麼の處にか在る、這裏に到つて、也た須らく是れ生鐵鑄就す底の箇の漢にして始めて得べし。豈に見ずや、張拙秀才、西堂の藏禪師に參す、問うて云く、「山河大地、是れ有か是れ無か、三世の諸佛是れ有か是れ無か。」藏云く、「有。」張拙秀才云く、「錯。」藏云く、「先輩曾て什麼の人に參見し來る。」拙云く、「徑山和尚に參見し來る、某甲凡そ問話する所有れば、徑山皆無と言ふ。」藏云く、「先輩什麼の眷屬か有る。」拙云く、「徑山は古佛なり、和尚渠を誘ふこ妻兩箇の癡頑有り。」又卻つて問ふ、「徑山甚の眷屬か有る。」拙云く、「徑山は古佛なり、和尚渠を誘ふこ

①張拙秀才は石霜の諸に嗣ぐ、會元第六に傳あり、秀才は文人の通稱なり。  
②虔州西堂の知識は馬祖に嗣ぐ、傳燈第七、會元第三に傳あり。

と莫くんば好し。藏云く、「先輩徑山に似ることを得ん時を待つて、一切に無と言へ。」張拙 僂首する而已。大凡そ作家の宗師は、人の與に粘を解き縛を去り、釘を抜き楔を抜かんと要す、只だ一邊を守る可らず。左撥右轉、右撥左轉、但だ看よ仰山、中邑の處に到つて、謝戒す、邑來るを見て、禪床の上に於て手を拍つて云く、「和和」と。仰山即ち東邊に立ち、又西邊に立ち、又中心に於て立つ。然して後謝戒了つて、卻つて退後して立つ。邑云く、「什麼の處よりか此の三昧を得來る。」仰山云く、「曹溪の印子上に於て脱し將ち來る。」邑云く、「汝道へ曹溪此の三昧を用て、什麼人をか接す。」仰山云く、「一宿覺を接す。」仰山又復中邑に問うて云く、「和尚什麼の處よりか此の三昧を得來る。」邑云く、「我れ馬祖の處に於て此の三昧を得來る。」愆麼の說話に似たらば、豈に是れ舉一明三、本を見て末を逐ふ底の漢にあらずや。龍牙衆に示して道く、「夫れ參學の人は、須らく祖佛を透過して始めて得べし。」新豐和尚道く、「祖佛の言教を見ること、生冤家の如くにして、始めて參學の分有り、若し透不得ならば、即ち祖佛に瞞せられ去らん。」時に僧有り、問ふ、「祖佛還つて人を瞞するの心有りや、也た無しや。」牙云く、「汝道へ、江湖還つて人を瞞ふるの心有りや也た無しや。」又云

①僂は低なり。  
②勅修清規謝戒の詞に云く、「某等戒品に登ることを獲て、蓋に僧倫に屬はる、荷底を仰いで此に拜謝す、答へて云く、「宿に佛記を承けて、僧戒圓成す、堅忍受持して、力めて宗教を扶けよ。」  
③傳燈に、「手を拍つて云く、和和。會元に、「口を拍つて和々の聲を作す。」和々は小兒學語の聲なり、今、傳燈に従つて、和尚を和々に改む。和尚はあし、和々が好し小兒のまね。  
④曹溪は六祖なり、破關擊節に、印を模に作る、從ふべし。  
⑤一宿覺は永嘉大師を謂ふ、初め六祖に參す、須臾に辭を告ぐ、祖曰く、「返ること太だ速

く、江湖人を碍ふるの心無しと雖も、自らは是れ時の人過ぐることを得ず。所以に江湖卻つて人を碍へ去ると成す、江湖人を碍へすと道ふことを得ず。祖佛人を瞞するの心無しと雖も、自らは是れ時の人透ることを得ず、祖佛卻つて人を瞞じ去ると成す、也た祖佛人を瞞せずと道ふことを得ず。若し祖佛を透得すれば、此の人即ち祖佛を過却す、也た須らく是れ祖佛の意を體得して、方に向上の古人と同じかるべし。若し未だ透得せずして、僅しくは佛を學び祖を學ばば、則ち萬劫にも得期有ること無し。又問ふ、「如何が祖佛に瞞せられざることを得去らん。」牙云く、「直に須らく自ら悟り去るべし、這裏に到つて須らく是れ此の如くにして始めて得べし。」何が故ぞ、人の爲にせんには須らく爲に徹せしむべし、人を殺さんには須らく血を見るべし、南泉雪竇は是れ這般の人なり、方に敢て拈弄す。頌に云く、

【頌】 此錯彼錯。(眉毛を惜取せよ、令に據つて行す、天上天下唯我獨尊。) 一切に忌む拈却することを。(兩箇無孔の鐵鏡、直饒千手大悲も、也た提不起、或は若し拈じ去らば、閻黎に三十棒を喫せしめん。) 四海浪平かに。(天下の人敢て動着せず、東西南北一等の家風、近日雨水多し。) 百川潮落つ。(淨裸裸赤漉漉、且つ得たり自家安穩なることを、直に得たり海晏河

一六八  
かなるや、師曰く、「本、自ら動するに非ず、豈に速かなること有らんや、祖曰く、「誰れか動に非ざることを知る、曰く、「仁者自ら分別を生ず、祖曰く、「汝甚だ無生の意を得たり、曰く、「無生豈に意有らんや、祖曰く、「意無くんば誰れか當に分別すべき、曰く、「分別も亦意に非ず、祖歎じて曰く、「善哉善哉、少留一宿せよ、時に一宿覺と謂ふ、傳燈第五に見ゆ。  
◎新豐和尚は洞山和尚を謂ふ、師唐の大中の末に至りて、新豐山に於て學徒を接誘す。傳燈、會元等に見ゆ。

清) 古策風高し十二門。(這箇を何似せん、杖頭に眼無し、一切に忌む拄杖頭上に向つて活計を作すことを。) 門門路あり空蕭索。(一物も也た無し、爾が平生を賺す、顧着せば即ち瞎せん。) 蕭索に非ず。(果然、頼に轉身の處有り、已に瞎し了れり、便ち打つ。) 作者好し無病の藥を求むるに。(一死更に再活せず、十二時中什麼としてか瞌睡する、天を撈り地を摸して什麼か作ん。)

【評唱】 這の一箇の頌、徳山、潯山に見ゆる公案に似て相似たり。先づ公案を將て、兩轉語を著けて、穿つて一串と作して、然して後に頌出す。此錯彼錯、一切に忌む拈却することとを。雪竇の意に云く、此處の一錯、彼處の一錯、一切に忌む拈却することとを。拈却せば即ち乖く、須らく是れ此の如く、這の兩錯を著くべし。直に得たり四海浪平かに、百川潮落つることを。可煞だ清風明月、爾若し這の兩錯下に向つて會得せば、更に一星事没けん。山は是れ山、水は是れ水、長者は自ら長、短者は自ら短、五日一風、十日一雨。所以に道ふ、「四

◎事文類聚第五に云く、「太平の時、五日一風、十日一雨。」  
◎錫杖經に云く、「十二環は十二因縁を念じて、十二門禪を修行することを名ふ、十二門は、四禪、四無量、四無色定なり。

海浪平かにして百川潮落つ。後面は麻谷錫を持することを頌して云く、「古策風高し十二門。」古人鞭を以て策と爲す、衲僧家は拄杖を以て策と爲す。(祖庭事苑の中に古策は錫杖經を擧ぐ。) 西王母が瑤池の上に、十二の朱門有り、古策は即ち是れ拄杖、頭上の清風、十二の朱門よりも高し。天子及び帝釋所居の處、亦各十二の朱門有り。若し是れ這の兩錯を會得せば、拄杖頭上に光を生せん。

古策も也た用ふることを著す。①古人道く、「拄杖子を識得せば、一生參學の事畢んぬ。」又道く、「是れ形を標して虚しく、事禪するのみにあらず、如來の寶杖親しく蹤跡す」と、此の類なり。這裏に到つて、七顛八倒、一切時中に於て大自在を得。門門路有り空しく蕭索、路有りと雖も、只だ是れ空しく蕭索たり。雪竇此に到つて、自ら漏逗することを覺え、更に懶が與に打破す。然も是の如くなりと雖も、也た蕭索に非ざる處有り、任ひ是れ作者なるも、無病の時、也た須らく是れ先づ些の藥を討ね喫して、始めて得べし。

### 第三十二則

垂示に云く、十方坐斷、千眼頓に開く。一句截流、萬機寢削。還つて同死同生底ありや。見成公案、打疊不下ならば、古人の葛藤を請ふ擧す看よ。

【本則】擧す、定上座臨濟に問ふ、「如何なるか是れ佛法の大意。」(多少の人此に到つて茫然たり、猶ほ這箇の在る有り、訝郎當して什麼か作ん。)濟禪床を下つて擒住し、一掌を與へて便ち托開す。(今日捉敗す老婆心切、天下の衲僧跳不出。)定、佇立す。(已に鬼窟裏に落つ、蹉過了也、未だ免れず鼻孔を失却することを。)傍僧云く、「定上座何ぞ禮拜せざる。」(冷地裏に

①汾陽昭の語なり。  
 ②傳燈等の書に、禪の字、持に作る、永嘉證道歌に出づ。もちふる事。  
 ③傳燈三十、杯渡一鉢歌に云く、「離すべき無く、著すべき無し、何れの處にか更に無病の藥を求めん。」

#### 【本則】

東嶺禪師云く、三十二則、林才定上座を接するは、是れ祖師門下人を接するの基範にして、依行す可き古實を明す。

人有りて戲破す、全く他の力を得たり、東家の人死すれば西家の人哀を助く。定、禮拜するに方つて、(勤を將て拙を補ふ。)忽然として大悟す。(暗に燈を得るが如く、貧の寶を得るが如し。錯を將て錯に就く、且く道へ、定上座箇の什麼を見てか便ち禮拜する。)

【評唱】看よ他の恁麼に直出直入、直往直來することを。乃ち是れ臨濟の正宗、恁麼の作用有り、若し透得し去らば、便ち天を翻し地と作して、自ら受用を得可し。定上座は是れ這般の漢、臨濟に一掌せられ、禮拜し起き來つて、便ち落處を知る。他は是れ向北の人、最も朴直なり。既に之を得て後、更に出世せず、後來全く臨濟の機を用ふ、也た妨げず穎脱なり。一日路に巖頭・雪峯・欽山の三人に逢ふ、巖頭乃ち問ふ、「甚の處より來る。」定云く、「臨濟。」頭云く、「和尚萬福なりや。」定云く、「已に順世し了れり。」頭云く、「某等三人、特に去つて禮拜せん」とす、福縁淺薄にして、又歸寂に値ふ、未審し和尚在日、何の言句か有りし、請ふ上座、一兩則を擧せよ看ん。定遂に擧す、臨濟一日衆に示して云く、「赤肉團上に、一無位の眞人有り、常に汝諸人の面門より出入す、未だ證據せざる者は看よ看よ。」時に僧有り出でて問ふ、「如何なるか是れ無位の眞人。」濟便ち擒住して云く、「道へ道へ。」僧擬議す、濟便ち托開して云く、「無位の眞人、是れ什麼の乾屎橛ぞ」と云ふて、便ち方丈に歸る。巖頭覺えず舌を吐く、欽山云く、「何ぞ非無位の眞

①内經素問の一に云く、「黄帝曰く、余、聞く上古に眞人なる者有り、天地を提掣し、陰陽を把握し、精氣を呼吸し、獨立して神を守る、肌肉一の若し云々。」又、莊子大宗師篇に見えたり。



人と道はざる。定擒住して、無位の真人と非無位の真人と相去ること多少ぞ、速かに道へ速かに道へ」と云はれて、山無語、直に得たり面黄に面青きことを。巖頭雪峯、近前禮拜して云く、「この新戒好悪を識らず、上座に觸忤す、望らくは慈悲且く放過せよ。」定云く、「若し是れこの兩箇の老漢にあらすんば、この屎床の鬼子を壑殺せん。」又鎮州に在つて齋より回る、橋上に到つて歇ふ。三人の座主に逢ふ、一人問ふ、「如何なるか是れ禪河深き處、須らく底を窮むべき。」定擒住して橋下に抛向せんと擬す。時に二座主、連忙して救ふて云く、「休みの休みの、是れ伊れ上座に觸忤す、且く望らくは慈悲。」定云く、「若し是れ二座主にあらすんば、他の窮めて底に到り去るに從せん。」看よ他の恁麼の手段、全く是れ臨濟の作用なることを、更に雪竇の頌出するを看よ。云く、

【頌】 斷際的全機後蹤を繼ぐ。(黃河源頭より濁り了れり、子は父の業を承ぐ。) 持し來つて何ぞ必すしも從容に在らん。(什麼の處に在る、爭奈せん此の如き人有ることを。脚手無き人還つて他を得んや也た無や。) 巨靈手を擡ぐるに多子無し。(人を赫殺す、少賣弄、打つこと一拂子、更に再勘せじ。) 分破す華山の千萬重(乾坤大地一時に露出す、墮也。)

【評唱】 雪竇頌す、「斷際的全機後蹤を繼ぐ、持し來つて何ぞ必すしも從容に在らん」と。黃檗の大機大用、唯だ臨濟獨り其の蹤を繼ぐ、拈得し將ち來つて擬議を容れず、或は若し躊躇せば、便ち陰界に落ちん。楞嚴

⑤五陰十八界の迷。  
楞嚴經第四卷に云く、「譬へば琴瑟笙簧琵琶の、妙音有りとは雖も、若し妙指無くんば、終

經に云く、「我が指を按するが如きんば、海印光を發す、汝暫くも心を擧すれば、塵勞先づ起る」と。巨靈手を擡ぐるに多子無し、分破す華山の千萬重とは、巨靈神大神力有り、手を以て太華を擘開し、水を放つて黃河に流入す。定上座の疑情、山の堆く岳の積れるが如し、臨濟に一掌せられ、直に得たり瓦解冰消することぞ。

### 第三十三則

垂示に云く、東西辨せず、南北分たす、朝より暮に至り、暮より朝に至る。還つて伊れ瞌睡すと道ふや。有る時は眼流星に似たり。還つて伊れ惺惺と道ふや。有る時は南を呼んで北と作す。且く道へ、是れ有心か是れ無心か。是れ道人か是れ常人か。若し箇裡に向つて透得して、始めて落處を知らば、方に古人の恁麼不恁麼なることを知らん。且く道へ、是れ什麼の時節ぞ。試みに擧す看よ。

【本則】 擧す、陳操尙書、資福を看る。福來るを見て便ち一圓相を畫す。(是れ精、精を識り、是れ賊、賊を識る、若し蘊藉ならずんば争か這の漢

に發すること能はざるが如し、汝と衆生と、亦、復、是くの如し、寶覺の眞心各各圓滿す、我が指を按するが如きんば、海印光を發す、汝暫くも心を擧すれば、塵勞先づ起る云々、疏に曰く、「琴等は衆生なり、妙音は藏性なり、妙指は寶智なり、發は用を起すなり。」海印は法身性海。  
⑥祖庭事苑第一に、郭緣生述征記に曰く、「華山と首陽と、木、一山、河神巨靈擘開して、以て河流を造す、故に掌迹存す。」

を識らん、還つて金剛圈を見るや。」操云く、「弟子恁麼に來る、早く是れ便を著す。何に況んや更に一圓相を畫するをや。」(今日箇の瞋睡の漢に撞着す、這の老賊)福便ち方丈の門を掩却す。(賊は貧兒の家を打せず、已に它的の圈續に入り了れり)雪竇云く、「陳操只一隻眼を具す。」(雪竇頂門に眼を具す、且く道へ、他の意什麼の處にか在る、也た好し一圓相を與ふるに、灼然として龍頭蛇尾、當時好し一撈を與へて伊れをして進むにも亦門無く、退くにも亦路無からしめん。且く道へ、他に什麼の一撈を與へん。)

【評唱】 陳操尙書は、裴休・李翱と同時なり。凡そ一僧の來るを見れば、先づ齋に請じ、錢三百を、<sup>①</sup> 襯して、是の勘辨を須ふ。一日雲門到る、相看して便ち問ふ、「儒書の中は即ち問はず、三乘十二分教は、自ら座主有り、作麼生か是れ衲僧家行脚の事。」雲門云く、「尙書會て幾人にか問ひ來る。」操云く、「即今上座に問ふ。」門云く、「即今は且く置く、作麼生か是れ教意。」操云く、「黃卷赤軸、這箇は是れ文字語言。」作麼生か是れ教意。」操云く、「口談せんと欲して辭喪し、心緣せんと欲して慮亡す。」門云く、「口談せんと欲して辭喪するは、有言に對するが爲なり、心緣せんと欲して慮亡するは、妄想に對するが爲なり、作麼生か是れ教意。」操無語、門云く、

① 陳は姓、操は名、尙書は文官の名なり、睦州に嗣ぐ、傳燈十二、會元第四に傳あり。  
 ② 裴休は十一則に記せり、李翱は藥山の儀に嗣ぐ、韓退之、柳宗元、劉禹錫等と同時の學者なり、會元第五、佛法金湯編第九に傳あり。  
 ③ 釋氏要覽に、觀漢、梵語には達觀祭、此に財施と云ふ、今、達觀を略して、但だ觀と云ふ。  
 ④ 華法師の語。

「見説く尙書法華經を看すと、是なりや否や。」操云く、「是。」門云く、「經中に道ふ、<sup>①</sup> 一切の治生産業、皆實相と相違背せず」と、且く道へ、<sup>②</sup> 非非想天、即今幾人有つてか退位す。」操、又、無語、門云く、「尙書且く草草なること莫れ、師僧家三經五論を抛却し、來つて叢林に入つて、十年二十年、尙ほ自ら奈何ともせず。尙書、又、争か會することを得ん。」操禮拜して云く、「某甲が罪過」と、又、一日衆官と樓に登る次、數僧の來るを望見し、一官人云く、「來者は總に是れ禪僧。」操云く、「不是。」官云く、「焉んぞ不是なることを知らん。」操云く、「近く來らんを待つて、偏が爲に勘過せん。」僧樓前に至る、操幕ち召して云く、「上座」と、僧頭を擧す、書衆官に謂つて云く、「道ふことを信せずや」と。唯だ雲門一人のみ有つて、他勘することを得ず。他睦州に參見し來れり。一日去つて資福に參ず、福來るを見て、便ち一圓相を畫す。資福は乃ち瀉山仰山下の尊宿なり、尋常境致を以て人を接するを愛す。陳操尙書を見て、便ち一圓相を畫す、争奈せん操却つて是れ作家、人の瞞を受けざることを。自ら點檢することを解して云く、「弟子恁麼に來る、早く是れ便を著す、那ぞ更に一圓相を畫するに堪へん。」福、門を掩却す。這般の公案之を言中の的を辨じ、句裏に機を藏すと謂ふ。雪竇云く、「陳操只だ一隻眼を具す」と、雪竇謂つ可し、頂門に眼を具すと。且く道へ、意什麼の處にか在る、也た好し一圓相を與ふるに、若し總に恁麼地な

① 法華經、法師功德品の文。  
 ② 非々想天は、四天の頂上なり、四果の聖人、四天に生じ、滅受想定を修して、阿羅漢を成じ、三界を出離す。  
 ③ 古鈔に、圓相、又、城致と稱す。  
 ④ 掩は閉なり。

らば、衲僧家如何が人の爲にせん。我れ且く爾に問ふ、當時若し是れ諸人陳操と作らん時、箇の什麼の語を下し得てか、雪竇に他只だ一隻眼を具すと道はるることを免れ得るに堪へん。所以に雪竇踏繚して頌して云く、

【頌】團團珠遠る玉珊瑚。(三尺の杖子黄河を攪く、須らく是れ碧眼の胡僧にして始めて得べし、生鐵鑄就す。)馬載驢馳鐵船に上す。(許多を用て什麼か作ん、什麼の限りか有らん、且く閑黎に與へよ看ん。)分付す海山無事の客。(人の要せざる有り、若し是れ無事の客ならば也た消得せじ、須らく是れ無事にして始めて得べし。)鼈を釣つて時に下す一團擊。(恁麼にし來り恁麼にし去る、一時に出不得、若し是れ蝦蟇ならば什麼を作すにか堪へん、蝦蟇螺蚌怎生奈何せん、須らく是れ鼈を釣りて始めて得べし。)雪竇復云く、「天下の衲僧跳不出。」(身を兼ねて内に在り、一坑に埋却せん、閑黎還つて跳得出するや。)

【評唱】團團珠遠る玉珊瑚、馬載驢馳鐵船に上す。雪竇當頭に頌出す、只だ箇の圓相を頌す。若し會得し去らば、虎の角を戴くが如くに相似ん。這箇の些子、須らく是れ桶底脱し、機關盡き、得失是非、一時に放却すべし。更に道理の會を作すことを要せず、也た玄妙の會を作すことを得ず、畢竟作麼生か會せん。這箇須らく是れ馬載驢馳鐵船に上す、這裏に看て始

①先韻に、珊瑚は佩聲清揚の貌。

②睡庵曰く、臨當に臥に作るべし、驢馬物を負ふなり。

③承當は「ひきうけて、我が物にする」と譯す。

④閑は釣を云ふ、説文に、凡そ

めて得ん。別處に則ち分付す可らず、須らく是れ將ち去つて海山無事底の客に分付すべし。爾若し肚裏に些子の事有らば、即ち承當し得ず。這裏須らく是れ有事無事、達情順境、若しくは佛若しくは祖、他を奈何ともし得ざる底の人にして、方に承當するに可なるべし。若し禪の參す可き有り、凡聖の情量有らば、決定して他底を承當し得ず。承當得し了るも、作麼生か會せん、他の鼈を釣つて時に一團擊を下すと道ふことを。鼈を釣ることは須らく是れ團擊にして始めて得べし。所以に風穴云く、「鯨鯢を釣つて巨浸を澄ましむるに慣れて、卻つて嗟す蛙歩の泥沙に躡すること。」又云く、「巨鼈三山を載せて去ること莫れ、吾れ蓬萊頂上に行かんと欲す」と。雪竇復云く、「天下の衲僧跳不出」と。若し是れ巨鼈ならば、終に衲僧の見解を作さず、若し是れ衲僧ならば、終に巨鼈の見解を作さず。

第三十四則

【本則】擧す、仰山、僧に問ふ、「近離甚の處ぞ。」(天下の人一般也た問過せんことを要す、風に因つて火を吹く、常の程を作さず。)僧云く、「廬

拍案連擊する者、皆擧と曰ふとあれば、擧は釣の索なり、從容録、驢官牛話の頌に、「扇子破れて犀牛を索む、團擊中の字來由有り」と云ふに依れば、團擊の切、團、疊納にて、團一字の義なり、今は團索の團と見て、牧にて馬をとる索の如く「わな」のことなり。團相のことなり。

①風穴云くより泥沙に躡することとをに至る、第三十八則に見ゆ。

②列子湯問篇に云く、渤海の東に、大壑有り、其の中に五山有り、一を岱輿と曰ひ、二を員嶠と曰ひ、三を方壺と曰ひ、四を瀛洲と曰ひ、五を蓬萊と曰ふ、而して五山の根、連り著く所無し、常に潮波に隨つて、上下往還して、暫くも時することを得ず、仙聖之を毒んで、之を帝に訴ふ、帝乃ち

山。(實頭の人得難し。)山云く、「曾て五老峯に遊ぶや。」(行に因つて妨げず臂を掉るふことを。何ぞ曾て蹉過せん。)僧云く、「曾て到らず。」(一歩を移せ、面の赤からんより、語の直からんには如かず、忘前失後するに似たり。)山云く、「閑黎曾て遊山せず。」(太多事生、眉毛を惜取せば好し、這の老漢甚の死急か着たる。)雲門云く、「此の語皆慈悲の爲の故に、落草の談あり。」(殺人刀活人劍、兩箇三箇、山下の路を知らんと要せば、須らく是れ去來の人なるべし。)

【評唱】人を驗むる端的の處、口を下せば便ち知音。古人道く、「没量の大人、語脈裏に向つて轉卻す。」若し是れ頂門に眼を具せば、擧著せば便ち落處を知らん。看よ他の一問一答、歴歴分明なり、雲門什麼と爲てか卻つて道ふ、「此の語皆慈悲の爲の故に、落草の談有り」と。古人這裏に到つて、明鏡の臺に當り、明珠の掌に在るが如し。胡來れば胡現じ、漢來れば漢現す。一箇の蠅子も也た他の鑑を過ぐることを得ず。且く道へ、作麼生か是れ慈悲の故に、落草の談有る、也た妨げず險峻なり。這の田地に到つて、也た須らく是れ箇の漢にして始めて提撥するに可なるべし。雲門拈じて云く、「這の僧親しく廬山より來る、什麼に因つてか卻つて道ふ、閑黎曾て遊山せず」と。瀉山一日、仰山に問うて云く、「諸方若し僧有り

馮巖に命じて、瓦礫十五をして首を擧げて、之を載せしむ、五山始めて峙して動せず。此の句は李白懷仙の歌の結末の二句なり。三山は、蓬萊、方壺、瀛洲なり。

【本則】

東嶽禪師云く、三十四則、仰山の言句、大いに廬門に似たるの用處を明す

①提起拈撥。

②袁州仰山の慧寂禪師は、瀉山靈祐の法嗣にして、瀉仰宗の第二祖なり。

來らば、汝什麼を將てか他を驗せん。」仰山云く、「某甲驗處有り。」瀉山云く、「子試みに擧せよ看ん。」仰云く、「某甲尋常僧の來るを見れば、只だ拂子を擧して伊に向つて道ふ、諸方還つて這箇有り麼。伊が語有らんを待つて、只だ伊に向つて道はん、這箇は即ち且く置く、那箇は如何と。」瀉山云く、「此は是れ向上の人の牙爪なり。豈に見ずや馬祖、百丈に問ふ、「什麼の處より來る。」丈云く、「山下より來る。」祖云く、「路上還つて一人に逢著する麼。」丈云く、「曾てせず。」祖云く、「什麼と爲てか曾て逢著せざる。」丈云く、「若し逢著せば、即ち和尚に擧似せん。」祖云く、「那裏よりか這の消息を得來る。」丈云く、「某甲が罪過。」祖云く、「卻つて是れ老僧が罪過」と。仰山僧に問ふ、正に此に相類す。當時他の曾て五老峰に到る麼と道ふを待つて、這の僧若し是れ箇の漢ならば、但だ禍事と云はん。卻つて道ふ曾て到らずと。這の僧既に不作家、仰山何ぞ合に據つて行じて、後面に許多の葛藤を見ることを免れざる。卻つて云ふ、「閑黎曾て遊山せず」と。所以

③五老峰は廬山に在り、五老相逆るが如し、故に名く。

【頌】出草入草。(頭上漫漫、脚下漫漫、半開半合、他も也た恁麼、我も也た恁麼。)誰か尋討することとを解せん。(頂門に一隻眼を具す。閑黎尋討することを解せず。)白雲重重。(千里百匝、頭上に頭を安す。)紅日杲杲。(破也、晴、眼を擧すれば即ち錯。)左顧瑕無く、(瞎漢、依前として無事、備許多の伎倆を作して什麼か作ん。)右盼已に老いたり。(一念萬年、過。)君見ずや寒山子。(癩兒伴を牽く。)行